

環境活動28の証言



3.11あの時

Stage 2013

東日本大震災 2011年3月11日(金)14時46分からの物語

東北地方太平洋沖地震により被災されました多くの皆様に、心からお見舞いを申し上げます。
また、この大震災により犠牲になられました皆様の、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

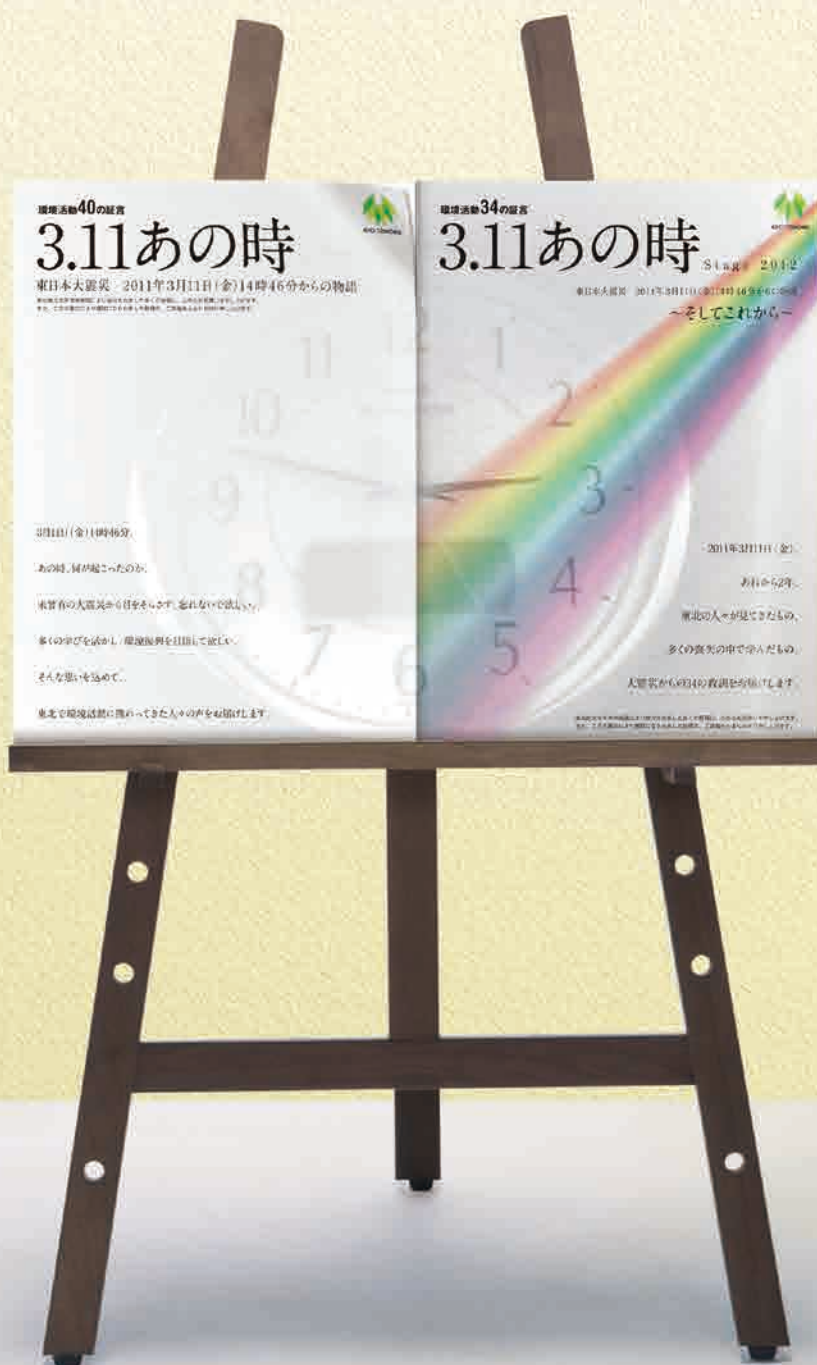
2011年3月11日(金)。

あれから3年。

東北の人々が見てきたもの。

多くの喪失の中で学んだもの。

大震災からの28の教訓をお届けします。





環境省東北地方環境事務所 所長

徳丸 久 衛

東日本大震災から丸3年が過ぎ、東北の遅い春がまた去りゆこうとしています。

本書「3.11あの時」も3冊目となりました。被災地にあらゆる角度から関わってきた方々1人ひとりの声は、災害を経験した人達のみならず、その場には居なかった人達すべてに届き、心に響き、共鳴することでしょう。

私が被災地を初めて訪ねたのは震災の年の暮でした。荒れ果てた沿岸の街や村、累々と続く瓦礫の山、あらぬ場所にうち捨てられた船、バス、広告塔などに唾然としたものです。

そして昨年の夏、転勤で仙台に参りました。被災地ではたしかに瓦礫の山は消え、廃屋の多くは片づけられ、信号や道路も生き返っておびたしい数の車両が行き来してはいますが、町並みの消えた平地などはただ草に覆われているだけで、お世辞にもかつての姿と人の暮らしが戻って来ているとはいいがたい状況でした。

それでも今、沿岸域には復興からさらなる発展に向かう槌音が聞こえ始めています。そして新しい東北の未来を切り開こうとする人々の力強い息吹が感じられます。

「3.11あの時」の中にはそうした人々の声が詰まっています。私も、環境省という行政の一員として、グリーン復興を進める際に、皆さんの声を参考にさせていただきたいと思います。

最後に、ヒアリングにご協力いただいた方々、そしてこの冊子をまとめたいただいた、東北環境パートナーシップオフィス（EPO東北）のスタッフの皆さんに心より感謝申し上げ、私のごあいさつとさせていただきます。



公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワーク（MELON）理事長

長谷川 公 一

この決意と希望を地域と未来につなぎたい

毎月11日が続くと、心に波立つものがある。毎年3月11日が近づくと、ときどきしてくる、鼓動が速くなってくる。東日本大震災から丸3年が経過した。3年という時間は短いようで長く、長いようで短い。

本書は「3.11 あの時」の2013年度版だ。EPO 東北による28件の聞き書きの記録だ。Stage1、Stage2と合わせて3年分を合計すると102件になる。102通りの涙と汗と決断の物語だ。被災地も捨てたもんじゃない、東北も、日本も捨てたもんじゃないと、希望が湧いてくる。震災に負けないぞ、負けるもんか、と力が湧いてくる。

今回の大地震や大津波を身近で経験した私達には、自分は震災を生き延びたのだ、という否定しがたい感覚がある。運が良くてたまたま助かったに過ぎない。時に自問する。生き延びた特権をどう使っているのか。生き延びた事に値するだけの活動をしているのか。賜った時間を、十分に活かしているのか、と。1945年8月15日を生き延びた親達や祖父母、先輩の方々もおそらく発しただろう自問である。

あたかも福島原発事故などなかったかのように、あたかも東日本大震災などなかったかのように忘れたふりをするのは極めて非倫理的である。

小回りの利く小さな仕組みの大事さ、1人だから自分の責任の範囲内で自分の決断次第で動ける事の大事さ、普段からの顔の見える関係の大切さ、何気なく過ごしてきた日常の大切さ、自分が社会を作っている当事者だという事の再発見、構想力を磨きたいという決意、地域へ、未来へつないでいこうという決意などなど。合計102件の物語の中には、大きな決意と希望が一杯詰まっている。何度も味読して、決意を新たにしたい。忘れたふりはもう止めよう。

もくじ

1. ヒアリング所在地		5
2. 本書の主旨		6
青森県	Report.1 青森市 三澤 章 (NPO 法人あおもり NPO サポートセンター)	
	「人」を育て、「想い」をつなぐ	9
岩手県	Report.2 雫石町 野澤 日出夫 (小岩井農牧株式会社)	
	本能を活かせるようなまちづくりを	12
	Report.3 雫石町 鎌田 徹 (小岩井農牧株式会社)	
	東北の皆で頑張っていかなきゃ	15
	Report.4 遠野市 伊勢崎 克彦 (個人)	
	遠野を農的な暮らしができる集落のモデルに	18
	Report.5 釜石市 石村 真一 (石村工業株式会社)	
	日々心豊かに生きられるように	21
	Report.6 野田村 大澤 継弥、畑村 茂、廣内 幸作 (だらすこ工房)	
	千年後の未来、村や後世を想って	24
	Report.7 盛岡市 大立目 勇次 (株式会社岩手暖炉)	
	地域の成り立ちや生活のあり方を真剣に考え直すべき	28
	Report.8 盛岡市 野中 章久 (独立行政法人東北農業研究センター)	
	自分達の面倒を見る事の重要性を投げかけた	31
宮城県	Report.9 仙台市 島野 智之 (宮城教育大学 環境教育実践研究センター)	
	夢や志を目標に生きる姿勢を育てる教育と津波被災地	34
	Report.10 仙台市 砂子 啓子 (i-くさのねプロジェクト)	
	被災者と支援者、両方の目線で宮城と佐賀の橋渡し	36
	Report.11 気仙沼市 杉浦 恵一 (一般社団法人 Nr.12)	
	灯すことを 100 年や 200 年も続く文化にしたい	39
	Report.12 大崎市 山田 好恵 (株式会社一ノ蔵)	
	次世代を想い、10 年後の未来を思い描きながら	42
	Report.13 大崎市 千田 信良 (有限会社千田清掃)	
	菜の花でつながる縁	47
	Report.14 塩竈市 外川 晴信、外川 栄子、長南 正義 (個人)	
	寒風沢へ来て、島の現状を見て欲しい	50



	Report.15 亶理町 松島 宏佑 (わたりグリーンベルトプロジェクト運営委員会)	
	一緒に亶理町の未来を考えていきたい	54
	Report.16 気仙沼市 柏木 友浩、柏木 亜希子、村上 純之 (マシンパーツ精密工業)	
	地域で自給できるエネルギー	57
	Report.17 仙台市 小野 寿光 (株式会社馬淵工業所)	
	持続可能で安心安全な社会を目指して	59
	Report.18 仙台市 小金澤 孝昭 (宮城教育大学)	
	いぐねは仙台平野復活のシンボル	63
	Report.19 仙台市 鈴木 悦子 (オフィス e)	
	人と人、人とコミュニティを「つなげる」	66
	Report.20 仙台市 佐藤 正実 (NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台)	
	震災後の生活をジブンゴトとして全国に伝える	70
	Report.21 仙台市 齋藤 昭子 (みやぎ生活協同組合)	
	忘れず、つながりをきらず、伝え続ける事の大事さ	75
秋田県	Report.22 横手市 奥 ちひろ (NPO 法人秋田県南 NPO センター)	
	秋田で一緒に地域を考える仲間を増やしたい	78
山形県	Report.23 米沢市 佐藤 洋 (NPO りとる福島避難者支援ネットワーク)	
	福島から避難した母子に寄り添う息の長い支援を	82
福島県	Report.24 南相馬市 半谷 栄寿 (一般社団法人福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会)	
	自分で考え行動するための「生きる力」を学んでほしい	85
	Report.25 郡山市 日塔 マキ (女子の暮らしの研究所 (株式会社 GIRLSLIFELABO))	
	福島の「今」を発信して、「自分の暮らし」について考えられる社会を作りたい	88
京都府	Report.26 京都市 米村 真悟 (個人)	
	第三者目線に立つという事	92
北海道	Report.27 札幌市 鈴木 将之 (パタゴニア)	
	裸足で歩けるきれいな砂浜を残したい	95
神奈川県	Report.28 横浜市 前田 圭一郎 (有限会社 GMP 創房)	
	ネットワークから生まれた復興支援	98
3. おわりにかえて	スタッフ対談	104



ヒアリング所在地

「3.11 あの時」(別冊)

取材：2011年4月～2012年3月
発行：2012年5月31日

「3.11 あの時 stage 2012」(別冊)

取材：2012年6月～2013年2月
発行：2013年5月31日

「3.11 あの時 stage 2013」(本誌)

取材：2013年4月～2014年1月
発行：2014年3月31日

発生時刻 2011年3月11日(金) 14時46分頃

発生場所 三陸沖(北緯38度06.2分 東経142度51.6分 深さ24km)

最大震度 7

発震機構 西北西-東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型

被害状況(2014年3月10日現在)

	死 者	行方不明者	家屋全壊	道路損壊	橋梁被害	堤防決壊
岩手県	4,673	1,142	19,107	30	4	-
宮城県	9,537	1,280	82,912	390	12	45
福島県	1,607	207	21,146	187	3	-
全国合計	15,884	2,633	127,302	4,198	116	45

※出典：警察庁緊急災害警備本部発表「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置」

青森県

Stage2011	1件
Stage2012	2件
Stage2013	1件
合計	4件

秋田県

Stage2011	0件
Stage2012	4件
Stage2013	1件
合計	5件

山形県

Stage2011	0件
Stage2012	4件
Stage2013	1件
合計	5件

岩手県

岩手県

Stage2011	9件
Stage2012	0件
Stage2013	7件
合計	16件

宮城県

Stage2011	21件
Stage2012	12件
Stage2013	13件
合計	46件

福島県

Stage2011	7件
Stage2012	8件
Stage2013	2件
合計	17件

その他

Stage2011	2件
Stage2012	4件
Stage2013	3件
合計	9件

はじめに

東日本大震災発生後、東北環境パートナーシップオフィス（EPO 東北）が2011年4月から取り組んできた「3.11 あの時」レポートは、環境NPOにこだわらず広く環境活動に携わってきた皆様にヒアリングを行なう方針を掲げて取り組んで参りました。環境NPO以外に企業、福祉団体、協同組合、メディア関係者、大学関係者、中間支援組織、個人、実にさまざまな立場の方々にご協力いただきました。快くヒアリングにご協力くださった皆様に、改めてお礼申し上げます。

「3.11 あの時」と題した本レポートは、あの時何が起きたのか当時の様子とその後の活動について伺い、記録すると共に全国の皆様に向けて発信していく事を目的とし、EPO 東北が現地の状況を伝えるスピーカーの役割を担おうと始まりました。時間が経過すると共にヒアリングの内容も少しずつ様相を変え、現場で起きた課題や支援の成功要因、そして大震災からの教訓として感じている事を伺いました。いつの間にか現場の情報発信から、支援活動と教訓を記録し発信するレポートへと役割が変わっていきました。2011年度はとにかく現場の情報を伝えようと岩手県、宮城県、福島県を中心にヒアリングを行ない、続く2012年度は支援活動の拠点となった青森県、秋田県、山形県へヒアリング範囲を広げ、現場での直接的な支援、後方支援など、さまざまな形の支援活動を取り上げました。3年目となった2013年度は、短期的な支援の時期が終わり地域のニーズが複雑化する中で中長期の支援に取り組む団体や、ヒアリングの中で多く出てきたキーワードである「地域エネルギー」に焦点をあててヒアリングを行ないました。

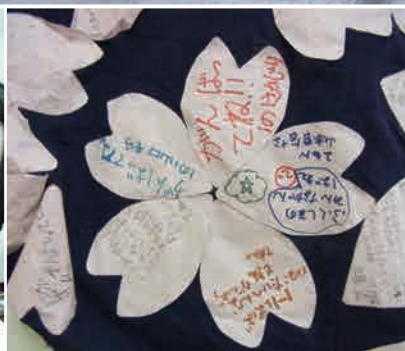
Web-site上での発信のみを行なう予定であった本レポートは、「冊子化して記録として残すべきだ」と全国から寄せられた多くの声を受けて、2012年の春に1冊目の冊子を発行しました。冊子化する事でさらに多くの方に読んでいただき、支援活動に入る前の事前学習として、今後起こるかもしれない「もしも」のための対策を考える教材として、広く活用されたことは大変嬉しく思っています。

3年間継続してきた本ヒアリングは、3冊目となる本冊子の発行をもって終了します。3年間で集めたレポートは合計102件となりました。その1つひとつに、皆様へ伝えたいメッセージが込められています。たくさんの方に何度でも読んでいただき、多くの喪失の中で得た教訓が各地で活かされる事を願います。

東北環境パートナーシップオフィス（EPO 東北）

スタッフ一同

2014.3.31





NPO 「人」を育て、「想い」をつなぐ

青森市

三澤 章 NPO法人あおりNPOサポートセンター

取材日 2013.11.26

あおりNPOサポートセンター常務理事・事務局長。同団体は「NPOのためのNPO」として、市民にむけた啓発活動、NPOの支援とネットワークづくり、調査研究や政策提言を主な活動としている。東日本大震災後は団体ではなく、そこに所属する「人」を育てる事に主眼を置いた人材育成の事業を展開した。

3月11日 14時46分

事務所はビルの2階と3階にあった。地震が来て、「かなり大きいな」と思った。縦揺れではなく、長い横揺れだったので、震源地が遠くの地震だと思った。この地域で地震が起きる時の震源地は大体が太平洋側だ。僕が青森県に来て、日本海側が震源地だった事は1度か2度である。太平洋側に実家があるスタッフがいたので、すぐに電話をするよう伝えた。僕は東京にいる子ども達に電話をした。最初にかけた時はつながったが、それ以降はつながらなかった。

青森市は揺れが収まってすぐに停電した。緊急事態だと判断してスタッフには帰宅の指示を出し、僕も帰宅することにした。水が止まった地域はなかったようだが、僕の家はマンションなので停電で水が出なくなるといった。帰宅途中で水を買いにコンビニエンスストアに寄ったが、停電でレジが動かず買う事ができなかった。情報がなく、何が起こったのかまったく状況がつかめなかったのので、携帯電話のワンセグとラジオで情報を収集した。ワンセグで津波の映像を見て、大変な事が起こっているのかもしれないと思ったが、初めは何が起きたのかはっきり分からなかった。それに、地震が発生して時間が経過してから津波が来ているので、皆が無事に避難したのだと思っていた。

情報収集に徹した2週間

地域によっては、丸2日停電したところもあった。自宅マンションがある地域では近くにたまたま病院があったため、翌日の朝に電気が復旧した。それからだんだんとテレビなどを通して情報が入るようになり、大変な事が起きていると分かった。メールはできそうだったので、すぐに仙台の仲間にメールを送った。しかしまったく連絡は取れず、2週間ほど経過してからやっとメールが通じるようになった。それまでは共通の知人を通して「〇〇さん、大丈夫だって！」と連絡しあい、無事を確認した。



職員は地震のあった翌日から出勤し、事業を進めると同時に情報収集を行ない、約2週間は被災した地域の仲間と連絡を取るためにさまざまな対応をした。1週間、10日と時間が経つにつれ、「バスで移動してボランティアに行った」などの情報が他団体から入ってきたが詳しい事は分からず、団体としてどう動くべきなのか判断がつかなかった。

3月25日、淡路島などに出張する予定があったのだが、青森市もずっとガソリン不足が続いたので車が使えず、バスで行く事になった。また、電力不足が原因で貨物電車を動かす電力がなく、秋田で止まってしまい、青森まで生活物資が流通しない事態が起きた。3週間ほど経ってから、ようやく物流が回り始めた。

青森県民として
自分達にできる事

2011年3月27日、東日本大震災緊急支援フォーラムを開催し、青森県民としてこの度の大震災とどう向き合い、どのような支援が可能なのか、被災地の復興に向けて何をすべきなのか考えるための緊急フォーラムを行なった。講師に末村祐子さんをお招きし「悲しみの分かち合い〜緊急支援と復興への道」と題して基調講演をしてもらった。末村祐子さんは大阪経済大学客員教授であり、阪

神淡路大震災の際も復興支援に尽力した方だ。東日本大震災が起こってからは遠野で支援活動に取り組まれていたので、現地の情報提供をお願いした。他にも弘前大学の李教授や当団体元理事長の有谷にも、阪神淡路大震災でのボランティアについて話をしてもらった。一般の方も多く参加し、意見交換の中ではさまざまな意見が出た。緊急で行ない、ほとんど告知もできていない状況の中で約50名の方にご参加いただいた。自分達にできる事として、当団体のホームページに「心をつなぐポータルサイト」を開設し、支援金や情報の後方支援を始めた。

初めて被災地を訪れて

2011年4月、八戸市を訪れて船が川で転覆している現場を見た。八戸市はもともと漁師の方が多く、津波が来る事は分かっていたため、幸い人的な被害は少なかった。

5月の大型連休の後、被災地の情報収集と記録のため南三陸町へ向った。それまで幾度となくテレビなどを通して、津波被害の大きかった地域の様子を見たけれども、それは映像であり、おかしなもので僕は傍観者として見ていた事に気づいた。南三陸町の何もない光景を目の当たりにして、「こんな事があるのだろうか」と本当に驚き、涙が出て、シャッターを押す事ができずに帰ってきた。4月に訪れた八戸市の状況とは別の世界だと感じた。

ステップアップと チャレンジのサポート

2011年6月、青森県から「被災した人達を支援したい」と、震災に関連する緊急雇用事業の相談があったので、当団体からはボランティアバスや被災地の方の人材育成の提案をした。しかし、県では機運がだんだん下がり、動き出すまでに時間がかかってしまい、実際に動き出したのは12月からだった。時間の流れの中で被災地のニーズは変わっていったので、その時点ではボランティアバスは適切ではなかった。

そこで、2012年1月より「復興支援コミュニティビジネスモデル事業」を県と協働してスタートした。震災により被災された方々や、県外から青森県への避難を余儀なくされた方々が、青森県で楽しく暮らせるようにサポートする事が目的だ。まずは、県外から青森県に避難された方を探した。お子さんのためを考えて、福島から奥様のご実家のある青森に移住した方を新聞で見つけたので、コンタクトを取って雇用させていただいた。県内の被災者と、青森県に避難を余儀なくされた県外



撮影：2012.5.30～31 岩手県花巻市
「市民活動団体（NPO）育成・強化プロジェクト」講習

からの被災者と地域の方々が協力して、8人からなる「チームEn」を作り、復興支援活動に取り組んだ。1月と2月はNPOやコミュニティビジネスを学ぶ事から始まり、4月と5月には被災地のニーズや課題の調査を行なった。復興支援商品を商店街で販売する「En-shop」、株式会社エドウィンの青森工場で出る切れ端を活用した商品開発、シニア世代向けの「情報端末教室」などを通じて、復興支援の活動に善意のお金が回る仕組みを調査、検証した。

2013年3月で事業は終了したが、現在も「チームEn」のつながりが続いている。最初は「仕事が必要なので雇用されればいい」と言っていたメンバーも、このつながりを通してステップアップし、独立したり、就職している。緊急雇用とは次のステップに進むためのサポートであり、そのサポートによって個人がステップアップして、次のチャレンジに活かさなければならない。そうした意味でこの事業は本来の緊急雇用の役割を果たしたと思う。

地域で活躍するNPOの力を信じて

2012年3月より、日本NPOセンターやワールド・ビジョン・ジャパンと一緒に岩手県、宮城県、福島県で人材育成の事業をスタートした。震災後、被災地では助成金、支援金バブルの状況になっており、それらを受託するためにたくさんのNPOが発足していた。その活動の多くはおそらく資金が切れたら終わってしまうはずだ。しかし、被災地では個人が落ち着き始めてからやっとまちづくりに取り組むようになる。その時に、絶対にしっかりと市民活動の動きが必要となるだろう。そこでせっかく立ち上がったNPOを育てようと、被災3県で各20団体ずつ、次期リーダーや立ち

上げたばかりの団体を対象に、全国の中間支援団体がサポートする事業をスタートした。僕はメンターとして隣県の岩手の団体を担当した。

NPOの社会における役割や経理処理、事業提案の仕方、資金計画の立て方などの基礎を学ぶ講習会を行なった。また、組織の中における個人の悩みの相談役やスキルアップしたい時の講習の紹介、アドバイスなどを行なった。この事業はあくまでも個人を育てる事に主眼を置いている。支援した団体は震災を機に発足した団体もあれば、震災以前から活動している団体もあった。しかし、どの団体もNPOが本来すべき事を理解しておらず、中長期的に事業を考える視点が不足していた。NPOは社会的使命があるからこそ存在する。皆を元気にするためにイベントをやるのは簡単だけれども、それ1回で終わってはならないし、次の活動につなげていかなければならない。また、その事業を行なう資金の調達方法は非常に重要であり、助成金、支援金ならば当然報告の義務がある。そうした基本的な部分をしっかりと理解し、今回勉強したメンバーがその下の世代を育てていける人材になってほしかった。事業終了後、講習会の内容は冊子「NPOリーダーのための15のチカラ」にまとめられた。

事業は2013年7月までの約1年間続いた。終了後もメンターとして僕が担当した被災地の団体の方とはコンタクトが続いており、これからまだまだ関わっていく予定だ。団体のつながりがあり、仲間のいるその地域がどうなっていくのか未永く見ていきたい。

大震災を振り返って

これから東北で課題となっていくのは経済だろう。現在は経済があまりにも一極集中で回っている。そうではない価値観を日本人が見つけないと、田舎はどんどんいなくなってしまう。さらに、東北地方は各地で過疎化が進み、それが震災で顕著になった。震災で流出した人口はもう戻らないだろう。あったものを継続する事はできるが、なくなったものを新しく作る事はなかなか難しい。被災地の方々にとって、津波は想定内の自然災害だったはずだ。なぜ大きな被害になってしまったのか。地域が残っていないから災害が起きるのだと思う。市町村合併などによる村や町の名称変更は危ういことだ。地名は土地の特徴が示された先人達のメッセージであったのに、それらを無視して開発を進めてしまった。昔の人達は自然と自分達の境界線をきちんと保っていた。自然は変わらない。人間や社会が変わってしまった事を見つめ直し、自分達の生き方はこれでいいのかと考えなければいけないと思う。



撮影：2013.12.14 青森県三沢市
市民活動推進講座ワークショップ風景

震災により、急速に変化している地域もある。子ども達が幸せに暮らしていける未来を残したい。もしもそれができないのなら、せめて元通りにして次世代の人達の迷惑にならないようにしたい。それは皆で知恵を出し合って真剣に考えていく事だと思う。震災に対して人々がどう感じ、その中でどのように奮闘して、暮らしをつないでいかのか。僕達のやるべき事は、そうした「気持ち」をつないでいく事だと感じている。その時その時の人々の気持ちの変化を記録していくべきだ。昔から記録というものはあったはずだが、それはきちんと後世に伝わっていなかった。これまで津波の歴史はたくさんあったが、当時の庶民の暮らしぶりや想いはほとんど分からない。僕達の経験した地震や津波もいくら地震の大きさや波の高さの数字を残しても、後世の人々に寄り添う記録でなければ伝わる事はないと思う。時間が経ち忘れていく前に、庶民の暮らしに寄り添う「気持ち」の部分を次世代につないでいきたい。



「市民活動団体（NPO）育成・強化プロジェクト」講習

企業

本能を活かせるようなまちづくりを

雫石町

野澤 日出夫 小岩井農牧株式会社

取材日 2013.06.05

総面積約3,000haの総合生産農場である小岩井農場の特別常任顧問。他にNPO法人環境パートナーシップいわて代表理事、日本ビオトープ協会理事副会長を務める。大震災後、地域やNPO、大学と連携して「緑のカーテンプロジェクトいわて（GCPI）」を発足させ、仮設住宅への支援活動や、被災林再生支援などを行なっている。

3月11日 14時46分

普段通り小岩井農場内の執務室にいた時、強い地震を感じた。非常に長い揺れが2度3度連続した。かなり大きな揺れであったが、明治時代の建物で、かえって強度が強く倒壊などの心配はしなかった。玄関まで出て様子を見てみると、そのうち電気が消えた。地震直後は通話可能だったため、すぐに各地の何人かに電話で連絡を取り、被害状況の把握と確認を行ない、併せて自分の無事を知らせた。

小岩井農場内は大きな被害はなかった。盛岡で1人暮らしの90歳になる義母が気がかりで、迎えに行き盛岡の自宅へ戻った。蓄電式の信号機が2基ほど作動していたがその他の信号機は停電で消え、いたるところの交差点が混乱して渋滞していた。車の中でラジオを聞き、大津波が押し寄せた事とその被害を知った。まさか沿岸部がそのような大災害となるとは思わずにおり、大変な衝撃を受けた。前々日に起こった大きな地震の津波が50～60cmだったので、もし津波が来るとしても少し高いくらいで大事には至らないだろう、むしろあの長い大きな揺れによる被害の方が大きいのではとさえ思っていた。自宅は蓄熱式暖房機のため、寒さから当日は逃れる事ができた。太陽光パネルが設置しており、翌日からの電力は確保された。テレビで津波による被害を目の当たりにし、改めて被害の大きさを認識した。盛岡市内の中心部で電力が復旧したのは震災翌日の夜であったが、多くは3日間の停電となった。

「助けたい。何かしなければ」

地震による停電は復旧作業を長期化させると感じた。小岩井農場では、イベント開催時にお世話になっている業者から電源車2台を借りることができ、ライフラインが復旧するまでの3日間、乳牛700頭の搾乳や牛乳冷却、養鶏部門の孵化場・施設内空調など緊急の対応が続いた。沿岸部には知人が多くいたが連絡不能で、ずっと



その人達の事が気がかりだった。地震の直前に「大槌に講演に来ている」との連絡をもらった岩手県立大学の先生とは、地震後すぐに連絡が取れなくなった。共に県の環境審議会を務めており10年以上のお付き合いがある方だ。大槌町での講演の準備をしていた時に大津波に遭い、津波の直撃被害を受けたと思った。その後も連絡がとれず絶望的と思っていた。ところが、地震から3日後の夕刻、先生から電話が入った。「大槌町の避難所を脱出した。遠野まで送ってくれた方がいて、遠野の道の駅から電話が通じた」と言う。先生は危機一髪で津波から逃れたが、この地域でも多くの死者・行方不明者が出た。すぐに迎えに行き大学へ送り届けた。その送り迎えにより、車のガソリンが残り僅かとなって行動が制約される事となった。

被災地に初めて行ったのは、ガソリンが手に入るようになった4月に入ってからで、連絡のつかない沿岸部の知人の安否を確認するために、陸前高田、大船渡、釜石、宮古まで北上して消息を確認した。知人は皆無事であったが、家や家族を流された方がたくさんいた。津波被害のあった地域へ近づくと、あるところから風景が全く変わり、一部の道路だけが通行を確保されていて、瓦礫が両側に積まれていた。道路はやっと車が通れるくらいの幅だ。自衛隊の救出活動の目覚ましい姿が強く印象に残っている。町に入っても自分がどこに

いるのか分からず、カーナビは瓦礫の先を誘導していた。

「沿岸部の知人達を助きたい。何かしなければ」と思った。支援活動をしている仲間もたくさんいたが、自分が手伝いに行ってもその活動だけになってしまう。むしろそうした活動を支える軍資金確保などが必要だと感じ、直接支援活動へ行く事と葛藤した。

大槌町には、NPO法人遠野まごころネット副理事長の白澤良一さんがいた。彼は環境審議会のメンバーだったので、彼から被災した話を聞いた。「何でも言ってほしい。できる事は何でもする」と言って、大槌町に何度も通い、食料や水を運んだ。白澤さんを支援しようと思ったのは、彼が大槌町小鮎の避難所で取りまとめ役や相談役を引き受け、広場に TENT を張り、寒さの中で活動を続けていたからだ。彼の健康が危惧されたが、常時広場に待機している事で必需品の調達や、避難所の皆さんが何かと相談でき安心できた。彼は見るからにやつれていたが、その頃はできる人がすべてを背負っていたように思う。彼の行動が、避難所の運営を混乱なくできたものと敬意を表している。非常時にこのようなリーダーやコーディネーターが必須と感じた。

緑のカーテンプロジェクトいわて (GCPI) 発足

2008年3月11日、JAXA(宇宙航空研究開発機構)の土井隆雄宇宙飛行士は、植物種子と共に「エンデバー号」に乗って、国際宇宙ステーション(ISS)へ向かった。国際宇宙ステーションの日本モジュール「きぼう」内に9ヶ月間保存されたアサガオの種は日本で発芽後栽培され、採取した2代目種子3,800粒が2011年、NPO法人自然環境復元協会へ譲渡され、その会員であった岩手県立大学平塚明教授に分譲された。この宇宙を旅したアサガオの種から作った「緑のカーテン」を仮設住宅に設置し、日陰と共に潤いを提供したいという志によって「緑のカーテンプロジェクトいわて(代表・野澤)」が生まれた。仮設住宅の建設は全体的に遅れがちな上、断熱や換気など気候条件に全く配慮されていない西向きの建物は強い日差しで室内の壁も異常に暑くなる状況であった。そこに少しでも潤いを提供したかった。岩手県立大学総合政策学部の平塚明教授が中心となって学生達が苗を作り、私が仮設住宅との調整を行なった。仮設住宅工事の進捗に合わせて2011年7月、現地のグループや住民・ボランティアセンターの協力のもと、釜石市と大槌町の仮設住宅に緑のカーテンを設置した。居住空間の温度が下がる効果もあったが、それ以上に緑のカーテンを話題にして



撮影：2012.6.23 岩手県内の仮設住宅に緑のカーテンを設置

隣近所と話すきっかけができた事は大きな成果であった。設置前まではせいぜい隣のひとと話すくらいだったが、「きれいだね」「うちのはこんなに大きくなったよ」と会話が生まれたようだ。

設置する仮設住宅団地を毎年増やしながらか、震災から3回目の設置となった。3年目の今年になって、仮設住宅に住む方々の気持ちに変化が生じてきているように感じる。仮設住宅団地のまとめ役(自治会長・リーダー)によって、住民の意識に差が出てきていると思われる。昨年までは仮設住宅に住んでいる皆で協力して何かやろうという雰囲気があった。しかし、この1年間でだんだんと入居者に条件の違いが生まれてきた。ある程度資金がある人、復興住宅の抽選に当たった人が出て行く一方で、自分はいつ出られるのだろうと不安を抱える人もいる。そうした条件の違いが心に隙間を生み出し、仮設住宅団地での付き合いがうまくいかない方も出ている。あるいは仮設住宅周辺の隣人からの支援や協力も少なくなっていると思われる。

100年後の曾孫の代を思って

今、復興に向けて事業が進められているが、その基準は震災直前の状態に戻す事が優先されている。例えば、大槌町においては高度成長期の開発によって、2つの河川の河口の位置を変えて防潮堤が作られ、かつての干潟や砂浜・防砂林は消えてしまった。復興計画ではこれまで通り高い防潮堤を作り、ビオトープエリアも作る計画が示されている。しかし、ビオトープ復元も重要であるが、むしろ自然に戻し居住エリアをステップバックさせてしっかり守るべきではないだろうか。今回の大震災により、防潮堤が壊され、地盤も下がり、干潟が戻ってきている。こうした自然

の働きは非常に貴重である。震災後、地元の方々が「子どもの頃の干潟や海が戻っただけ」と言っていたのは印象的であった。自然の現象(大津波)を人工的に防ぐ事に、限界があるだろう。実際に現地の被災した方々の意見を集約すれば、もちろん多くの意見はあるが、防潮堤は低い方がよいという意見が多い。危険は自分の目で察知しなければならない。高い防潮堤は住民を海から遮断し、危険を察知できなくなる。本来リスク察知の本能であるはずの五感が働かなくなっている。防災を考えるなら、「本能を活かせるようなまちづくり」をしなければならない。

現在、世の中では持続可能なエネルギーに関するしっかりとした理念がない。二酸化炭素の削減(化石燃料削減)も本気で取り組んでいない。今回の震災はそうした事に気づき、変わるチャンスなのだと思う。持続的なエネルギーのもとになる資源は無尽蔵にある。その資源をフルに活用する技術開発に、原子力発電開発同等の国家予算を投じれば、新しい産業が生まれる。これまでと同じ産業が持続する事はないかもしれない。今植えた木を最終伐期で伐採する時、社会はどうなっているだ



撮影：2012.6.23 岩手県内の仮設住宅に緑のカーテンを設置

ろうか。80年後、100年後の曾孫の時代、化石燃料は底をつき、新たなエネルギーに移行して、社会は大きく変わっているだろう。今、遅ればせながら、持続可能なエネルギー開発に真剣に取り組むべき時にきている。



撮影：2012.6.23
岩手県内の仮設住宅に緑のカーテンを設置（野澤 日出夫さん提供）



撮影：2013.7.7
岩手県陸前高田市 一本松（EPO東北スタッフ撮影）



撮影：2013.7.7 岩手県陸前高田市（EPO東北スタッフ撮影）



撮影：2013.7.7 岩手県陸前高田市（EPO東北スタッフ撮影）

企業

東北の皆で頑張っていかなきゃ

雫石町

鎌田 徹 小岩井農牧株式会社

取材日 2013.07.09

小岩井農場の品質保証部部長。1891年、火山灰地の荒野に1本の木を植える事から始まった日本最大級の民間総合農場である小岩井農場は、「環境保全・持続型・循環型」を基本とし「安全・安心・素性明らかプラス質の高さ」をすべての基礎に生み出す商品・サービス・情報などを通して社会に貢献している。

3月11日 14時46分

翌日、沿岸部に出張する予定があり、屋外で車両を点検している時に地震が発生した。屋外にいたせいからゆらゆらと非常に長い揺れが続いていたが、ゆっくりとした横揺れだったので、この地域に大きな被害を招く揺れとは感じなかった。

学生時代を仙台で過ごし、大学2年生の時に1978年の宮城県沖地震を経験した。友人が自転車で転倒し、手当てのために病院に付き添った。診療が終わった直後に地震が来た。その時の揺れは尋常ではなかった。突き上げるような縦揺れを感じ石灯籠が倒れて、吊り下げ式の照明が天井にぶつかるほどだった。窓ガラスが割れ、塀が倒れた。

その時と比較すると、立ってられないような激しい揺れではなく、非常に長い揺れが続いたので、震源地は遠いのだろうと判断していた。直接的な被害としては、農場内の建物で天井のはがれなどはあったが、私のいた事務所は書類などが落下した程度で大きな被害はなかった。

即座に停電になり、PCが使用不可能になるなど通常の業務はできなくなった。停電はしたもの、ラジオで災害に関する情報は入手できており、そこでは津波に関する情報も流れていた。また、携帯電話のワンセグを見ると、仙台空港近くの津波の映像が映し出されていた。その映像を見て、ただ事ではないと初めて気がついた。農場内はワンセグの電波状況が悪いため、窓際にくっついて食い入るように映像を見た。

その後、社内に対策本部が立ち上げられ、従業員の安否確認、動物への対策、翌日以降のお客様の受け入れ対応などを検討すると共に、停電したため発電機の確保やお取引先様の被災状況の把握にあたる事となった。特に動物を扱う部署の従業員の多くは帰宅できない状況となった。

地震の後、家族の安否確認のためすぐに自宅に電話をかけたが、なかなかつながらなかった。やっと電話がつながり、家族の無事が確認できた。娘が仙台的の大学に通っていたのだが、ちょうど春休



みで帰省中で、中学生の息子もたまたま家にいたので、安否の確認に手間取るなどの心配をせずに済んだ。

電気が復旧するまで

停電した2日間は、会社としても正念場だった。乳牛は1日に朝夕2回搾乳する。地震の時は夕方の搾乳の準備をしているところだった。停電によりコンプレッサーが機能せず、牛の乳房に付けるミルカーが動作しなくなった。ずっと昔であれば手搾りだったのだが、800頭近くいるため手搾りでは対応できない。乳業工場も停電に見舞われており、搾った原乳を受け入れる事ができないので、それは結果的に廃棄する事になるのだが、廃棄による損失はもとより牛の体調が重要である。乳を搾ってあげないと、牛の場合は乳房炎を起こしてしまう。乳房炎にかかるとう生産性は著しく低下し、回復には長期間を要するので、特に注意が必要だ。所有している発電機では小さくて間に合わず、日頃からお付き合いのあるイベント業者から大型の発電機を借りる事で、何とか乗り切るといった状況だった。

また、鶏も非常に繊細な動物で、大きなストレスを受けると鶏同士が怖がって集まり、圧死状態を引き起こしてしまう。パニックにならないようにデリケートな管理が必要であった。

灯油や重油は若干の在庫があったのでその点では良かったのだが、燃料が切れれば発電機は使えなくなる。人間は何とか食べ物やガソリンを探して動けるが、動物を放置する事はできないので、動物を管理する部門は大変気を遣っていた。

雪はちらついていたが、3月だったので凍えるほどの寒さではなかった事が幸いだった。自宅は電気さえ復旧すれば大丈夫だろうと考えていたし、当初発電所の停止による電力不足などは思い浮かばなかったので、電気はすぐに復旧するだろうと考えていた。地震発生の翌日に盛岡市内の電力供給が復旧したので、いくら遅くとも3日目にはこの地域の電気も復旧するのではないかと予想していた。実際、農場周辺の電気は2日目の午前中に復旧した。

もっとも電力の復旧以外は、まったく先が見えない状態だった。家庭も会社もまだまだ落ち着いた状況にはなっていなかったし、津波の被害がひどい地域の事も心配で不安だった。停電が復旧するまでは、会社で発電機を使わずずっとテレビを見る事ができたので、悲惨な状況を見て、これから一体どうなるのだろう、この状況がいつまで続くのだろうと不安な気持ちになっていた。

自然や動物と向き合う仕事

エサの手配については2ヶ月ほど大変な時期が続いた。牛や鶏のエサを作っている会社が石巻などの被災地域にあり、飼料の確保が困難となった。特にこだわったエサを使っていると、「非常時のため、特殊な配合のエサは対応が困難」と飼料メーカーから言われる事もあり、調達が大変だったという。飼料メーカー自身が大きな被害を受けていたのだからそれもそのはずだ。この状況下でも最大限の協力をいただき、北海道や愛知などの遠隔地の工場から運んでもらって必要量を確保した。通常の農場運営に回復するまでには相当時間がかかったと思う。

3月いっぱい「まきば園」は休園したが、グリーンシーズン（4月中旬～）はオープンできた。ご来園者の動向は壊滅的な状況ではなかったが、レジャーに関しては自粛ムードに覆われていたように思う。

5月に入ると、また新たな事態が発生した。「県内の牧草から放射性物質が検出された」と岩手県農政部から飼料に関する注意喚起と利用自粛要請が出たのだ。小岩井農場内は粗飼料用として牧草地を拡大に抱えており、これをエサとして給与できないとなると大変である。種々の調査の結果、この地域の利用自粛は徐々に解除され、牧草の利用に関しては大きな影響は受けなかったが、風評被害は大きかった。放射性物質に関するお問い合わせ



岩手県雫石町 牧草の収穫風景

わせなどは私の部署が対応しているので、一時は「そちらの牛乳や卵は大丈夫か」というお問い合わせの対応に追われた。

また、一般の方から「福島県の牛などの動物がかわいそうなので、何とかそちらの農場で受け入れられないか」とのお問い合わせもいただいた。同業者の方は、通常であっても防疫衛生上の問題や飼料の確保の問題で簡単には動物を受け入れられない状況であると事情をよく知っていらっしゃるのだが、一般の方はテレビなどで報道されていた福島の酪農家の現状に相当衝撃を受けたのだろう。お問い合わせに対しては、お気持ちはよく分かるが、会社としては受け入れる事ができない事情を説明するしかなかった。

日常で自分にできる事

岩手県山田町の沿岸部に親戚がいて、お米を送ったり、ホタテやワカメをお返しに頂いたりというお付き合いをしていた。テレビで沿岸部の津波の映像を目にしているので、一体どうなってしまったのだろうと心配になり、ずっと電話をかけ続けていた。結局こちらからの電話はつながらなかったが、地震から2日目くらいに親戚伝いに家屋の被害もなく無事である事が分かった。宅配業者は復旧していたので、すぐに米や野菜をかき集めて送った。

いつか絶対に行かなければと思っていたが、こちらもなかなか落ち着かず、ようやく少し落ち着いてきた2011年7月に様子を見に行く事ができた。妻と一緒に盛岡から宮古、山田町、釜石、花巻のルートで回った。瓦礫は山積みになっていたのだが、あまりにもきれいに片づきすぎていて、本当に何もない、何か感情を通り越しているような感覚だった。喪失感というのか、悲しいのではなく、正直、呆然としていた。親戚の家は海岸から

200m程度で、海が見える位置にある。家の4軒前まで津波が到達したそうだが、山のちょっとした高台になっている場所に家があったので助かったようだ。しばらくは行政がサポートする民間の避難所扱いになっていて、支援物資が届く拠点にもなっていたらしい。実際に行ってみると、津波に流された家屋は片づけられており、以前は家の間から少ししか見えなかった海が見渡せるようになってしまっていた。

同じ岩手県にいても、もっと自分達よりも大変な状況にある方々のために、何もできない無力感を感じた。内陸部でも被害はあったが、人的被害は多くはなかったし、沿岸部ではもっと大変な被害を受けているので、「内陸部の我々よりももっと困っている方々のために何か」という気持ちが皆にあったと思う。しかし、何かしたい気持ちはあっても、ガソリンは不足しており、帰って来られるかどうか分からない状況下から、行こうと思っても行けなかった。

私は岩手県花巻市の出身で、大学は仙台、仙台から戻ってきてずっと地元岩手、東北に住んでいる。復興にあたって現在思う事は「東北の皆で頑張っていかなきゃいけないんじゃないか」という事だ。私の中では「東北一体で」という気持ちが震災後ますます大きくなっている。個人として大それた事はできないし、直接何かできるわけでもない。だから、これを機会に改めて東北各地に出かけようと思っている。



岩手県雫石町 小岩井農場の1本桜

日頃からつながりを大事に

震災を経験して、普段意識しているとは言えない多くの事について改めて考えさせられた。エネルギーの問題、家族やたまたま山田町に住んでいた親戚の事。人とのつながりは何かがあってからどうにかしようとしてもどうしようもないし、急に相手がいなくなってしまう事もある。震災がなければ、何気なくやり過ごしていたであろう日常の大事さに気づく事もなかっただろう。天災、特に地震は突然訪れる。そうした事を考えると、日頃から感謝の気持ちを忘れない事、それを伝える事、そしてつながりを大事にしておかなければいけないと改めて思う。



震災時、停電により約800頭の乳牛の搾乳の対応に追われた（EPO東北スタッフ撮影）



1903年建設 国の登録有形文化財である本部事務所（EPO東北スタッフ撮影）



撮影：2011.3.20 岩手県盛岡市 被災した事務所（大目 勇次さん提供）



緊急時に対応できる強さを発揮した薪ストーブ（大目 勇次さん提供）

個人

遠野を農的な暮らしができる集落のモデルに

遠野市

伊勢崎 克彦 個人

取材日 2013.08.21

岩手県遠野市の馬搬継承者、農家。遠野を馬と共に林業や農業をしながら、地域の資源で生きていける持続可能な集落にする事を目指して、日々取り組んでいる。東日本大震災では被災地とボランティアをつなぐコーディネーターを務め、また、全国に花・野菜の苗や種の提供を呼びかけて被災地に届け、復耕（復興）支援をした。

3月11日 14時46分

図書館で映画「降りてゆく生き方」のスタッフ上映会を行なっている時、これまでは経験した事のない、強い揺れの地震が来た。かなり揺れたため本棚などが倒れる危険性があり、外に出る指示が出され、上映会は何となしに中止になった。図書館の目の前にある川を見ると、水が濁っている。「かなり大きな地震だったんだな」と思い、すぐに自宅に帰った。

その後3日ほど停電した。ガスはプロパンガスで水道も止まらなかったの、困ったのは電気がつかず暗かった事くらいだ。薪ストーブで暖を取り、食料は家にあるものを食べた。ガソリンは手に入らなかったの、なるべく歩くようにして節約した。

「復興する、未来はある」

遠野市宮守町にある柏木平レイクリゾートの多田一彦社長は、震災が発生してからすぐに支援物資を積んで被災地を訪れた。震災から5日後、柏木平レイクリゾートの社員である僕も、多田社長と一緒に物資を持って岩手県大槌町へ向かった。テレビで被災地の状況は見ていたので、大変な状況だろうと分かっていたし、もしかしたら山なども無くなっているのではないかと思っていた。ところが、現地に着くと悲惨な状況が目に見え込んできたものの、地震や津波で壊れてしまったのは人間が作ったものであって、自然のあるべき姿である山や川は残っている。率直に「すぐに復興する、未来はある」と感じた。

それから約1ヶ月は多田社長と一緒に被災各地を回った。どこに物資を届けたら良いのか分からないような混乱があり、土地勘がない方々のために避難所の場所と人数、リーダーを記した地図を作った。また、被災地の状況を内陸部に伝えて支援を呼びかける事が役割だと思ったので、現場で御用聞きをした。初期の要望は食料だったが、だんだんと調味料、長靴、服などに変化した。



「遠野まごころネット」設立

被災地を見た多田社長が何とかしなければと考え、「遠野の風土と観光（産業）を考える会」（略称＝遠風会 [えんぷうかい]）^{*}のメンバーと集まり、連携を呼びかけた。この連携が後に、遠野市民を中心とした岩手県沿岸部の被災者支援ボランティア集団「遠野まごころネット」設立につながっていく。

阪神・淡路大震災で支援に携わった、被災地NGO協働センターの村井雅清さんが、被災地を支援するために遠野に来ると聞いた。当初、多田社長や僕は災害支援ノウハウを持つプロの人がいるならば、任せようと考えた。僕達はプロが来るまで現地の情報収集をして、次の支援活動につなげようと思っていた。

2011年3月25日、被災地NGO協働センターの村井さんが遠野へ来た。災害支援のノウハウを教えてもらおうと、きちんと団体として組織化し、いろいろな支援者と連携しなければ対応できない事が分かった。日本では社会福祉協議会がボランティアを扱っているの、遠野市社会福祉協議会にも連携を要請した。遠野市社協の常務理事、佐藤正市さんが理解のある方で、協力してくれた。こうして3月28日、「遠野まごころネット（遠野被災地支援ボランティアネットワーク）」が立ち

上がった。

※「遠野の風土と観光（産業）を考える会」（略称＝遠風会〔えんふうかい〕）…2011年1月に立ち上がった。地域おこしをしようと志ある人達のネットワーク。

支援の拠点となった遠野

大槌町の社会福祉協議会が地元の方々からの要請を受け、瓦礫撤去作業を始めたが、圧倒的にマンパワーが足りていなかった。遠野まごころネットが最初の支援に向かったのは、大槌町桜木町地区だ。桜木町地区は津波により家屋1階天井まで浸水の被害はあったものの、流失した家屋が比較的少なかった。浸水した1階を片づければ、何とか2階で暮らせるまでに住居を回復できる。避難所生活者を少しでも減らしたい思いで桜木町地区から支援をスタートした。

被災地は混乱しているので、コーディネートが本当に大変だった。遠野は被災地とつなぐ支援拠点となり、東京などから大勢のボランティアがやって来た。ボランティアに瓦礫撤去の作業であると説明し、バスに乗せて現場へ行くけれども、状況は刻々と変化しかつ混乱しているため、最初から段取りが決まっているわけではない。行った先で現地の方と交渉した。周辺は瓦礫の山で、バスをどこに停めたらよいかも分からない。現地の方とボランティアの狭間で調整した。首都圏からは、被災地のために何か手伝いたいとやる気満々でボランティアにやってくる。時には「気持ちは分かるけれど、待つ事もボランティアの仕事だよ」と声をかけ、今は非常時で現地がとても混乱している事を理解してもらった。

社会福祉協議会との連携と課題

大槌町では多田社長も僕もどこの馬の骨か分からない。大槌の方々に片づけを手伝うと申し出ても「ここはおらほのところだから、自分達でやる」と断られ、最初は壁があった。だけれど被災地で社協のビブスを着ていると、僕達は社協の人間ではないが、現地の人達は社協の人間だと思ってしゃべる。そうした点では現場での支援マッチングがスムーズになる事もあった。

西日本の県社協からは、1～2週間ずつの交替で人員が派遣され、被災地に入っていた。しかし、同じ人が長期に滞在しないので、地元の方と築いた関係性などは引き継ぐことができない。新しく来た方は土地勘もないので慣れるまでに時間がかかる。せっかく社協として支援体制を作り、申し送りをして状況は刻々と変わり、社協の支援体制はなかなか構築されなかった。こうした状況を



撮影：2011.6.16 岩手県遠野市
三陸エコビジョンフォーラム実行委員会

何とか解決できないかと県社協に提案したが、この課題は解決されなかった。

被災地に持続可能な種を

被災地に通っていると、「土いじりをしたい」「お花が好き」という声が聞こえてきた。野菜が採れる時期ではないため野菜は無かったが、周りに呼びかけると種が集まってきた。しかし、集まってくるのは全てF1品種（次の世代を生まない品種）の種だった。僕は、種取りをしてまたまいて実る種を渡したかった。本当に被災地が復興する事を考えると、持続可能性のある本物の種をまきたい思いが強くなったからだ。遠野の有機農家や、埼玉で「たねの森」という固定種や在来種を扱っている種屋さんをお願いをしてみると、種を送ってくれた。

最初に被災地へ行った時、避難所にいるおばあちゃんが「来てくれてありがとう」と言ってくれた。そして「戦争の時は誰も来なかった。食べ物も無かった。今回はこれだけの被害があったけれども、大勢の方が来てくれて、食べ物も持ってきてくれて、ありがとう」と言った。でも、そのあと「これからは物がたくさんあるのが良いのではなくて、昔に戻らなきゃダメなんだな。でも若い人達には昔に戻っては言えないからな」としみり言っていたのがとても印象的だった。僕達の生活している現代の社会システムは完全に破綻している。物質的なものが無くなって、新たに町が興る時に、これまでとは違う価値観が生まれるだろうと思った。復興するプロセスの中に、良い意味で世界が抱える問題を解決する希望があるのではないかと感じていた。被災地の人達がどう感じたかは分からないが、そうした想いを被災地の方に説明しながら、種や苗を配った。

大震災を振り返って

その土地で誇りを持って住んでいる「人」がとても大事な要素だと感じた。地域の世話役、リーダーがいろいろな意味で良い人だと、非常時でもその地域は何とかやっていける。結局、場所や物は変わらないけれど、住む人によって地域は変わってくる。その地域にどんな人材がいたのかに尽きると思うし、遠野も多田社長をはじめとするリーダーがいたからこそ、さまざまな団体が集結して行動する事ができたのだと思う。

遠野を持続可能な集落のモデルに

馬搬を始めて4年が経つ。山の事も初めは分からなかった。お金持ちではないのでレジャーで楽しむ馬は持てないが、働く馬は生きていく上で必要とするものだ。遠野に馬と働く仕事があるならば、馬と一緒に生活ができると思ったのが始まりだ。馬は機動力があるので馬搬もでき、田畑を耕す事もできる。馬搬や農業に携わっていると家畜の重要性がよく分かる。昔の人は牛や馬などの家畜と共に暮らしていた。家畜の力を借りて農作業を行ない、田んぼの畦の草は家畜の朝ごはんに刈り、家畜の排泄物は田畑で肥料として使った。資源を有効に活用する考え方が当たり前で、循環型の暮らしが普通に営まれていた。また、農的な生活からは神社や祭りなどの文化が育まれてきた。しかし、そうした農村の循環型の暮らしは無くなりつつある。今は田んぼの畦の草は焼かれ、無駄になっている。集落から人は出ていくばかりで、第一次産業から離れる人も多い。僕が小さい頃と比べると、明らかに川は汚くなっているし、生き物も少なくなっているのを肌で感じる。集落に人が住まなくなり、第一次産業から離れる人も多くなれば、循環型の暮らしや神社、祭りなどの文化は必然的に無くなってしまいうだろう。

現代は規模を拡大する農業や林業が、第一次産業のスタイルと捉えられている。どのようなライフスタイルを選択するかにもよるが、換金の目的だけで農業を見ると、確かに規模を拡大しなければ農業だけで生活していくのは厳しい。しかし、農業だけを拡大するのではなく、林業も釣りもするし、得意分野を活かして山のガイドやパラグライダーのインストラクターもすれば生活はできる。いくつも仕事を持っていて良いと思う。

昔は都会に憧れたけれども、人間がロボットを作ったとして、どんなに人間に近づけてもそのロボットは人間にはなれないし、僕達は新しくハエや蚊を作り出す事はできない。結局、本物に勝るものはない。農的な仕事の面白みは本物を作る事であり、やるほど面白い。農業には何年も続けられ



撮影：2011.8.4 岩手県遠野市
遠野まごころネットの拠点となった遠野市総合福祉センター

ば蓄積されていくものがあり、農村にはさまざまな可能性があると思う。これから遠野に「馬搬の森」を作りたい。集落の水源地の森だ。そこから皆が水を取り、僕はその水を使って自然栽培で米を作る。1つの水系に恩恵を受けている持続可能な集落のモデルのイメージだ。1人で広い面積で大規模な農業をするのではなく、その地域に住む人達がどれほど小さな面積でもよいから農業を暮らしの中に組み込み、農的な暮らしができる集落を再現したい。本当は被災地でできると思ったが、そこに住む人達の中にやりたいと思う人がいなければ成り立たない。だから、自分が住んでいる地元、コントロールできる場所で、住まい方を楽しく提案していきたい。遠野は地元の方もいて、外から来る人もいて、集落の中にも僕の考えを分かってくれる方がいる。おそらく新しい集落に変わっていくだろう。



撮影：2013.8.21 岩手県遠野市（EPO東北スタッフ撮影）

企業

釜石市

日々心豊かに生きられるように

石村 眞一 石村工業株式会社

取材日 2013.08.21

石村工業株式会社代表取締役。岩手県釜石市で薪・ペレット兼用ストーブ「クラフトマン」や高速ワカメ攪拌塩蔵機「しおまる」を自社製品に持ち、製造・販売している。東日本大震災の津波で大きな被害を受けたものの、いち早く操業を再開し、現在も順調に事業を継続している。

試行錯誤の道のり

創業以来、釜石市内の大手製鉄所の設備補修などを専業としていたが、平成元年に高炉休止となり、事業転換せざるを得なくなった。下請けの仕事を続けながらも、「自社製品を持たなければ生き残れない」と奮起し、自社製品の開発に挑戦し続けた。自分達で調査、開発、製造し、そして売り込むという試行錯誤の道のりであった。現在、薪・ペレット兼用ストーブ「クラフトマン」とワカメ塩蔵機「しおまる」が事業の2本柱になっている。2001年、岩手県工業技術センターの勧めがきっかけとなり、木質燃料の鉄製ストーブを開発、販売する事業に乗り出した。最初は同センターに岩手県軽米町の建具店経営者の「薪ストーブ」技術を紹介された経緯もあり、薪ストーブを生産した。「薪ストーブ」技術は薪の燃焼効率を最大限まで高める技術で、建具店経営者が余った木くずを有効活用するため、10年かけて完成させた仕組みである。日本でペレット燃料が流通し始めた頃から、ペレット用ストーブへ「薪ストーブ」技術の応用を考えた。2003年に試作機が完成し、2004年から本格販売を開始した。デザインも良く、環境にも良いと県内外の環境団体などに好評となり、さまざまな展示会に呼ばれるようになった。2013年度も日本全国へ積極的に赴いている。また2003年、中国産ワカメの増加により国産ワカメ業界が危機に瀕した状況を受けて、取引先のお客様から相談を受けた。これがきっかけとなり、ワカメ塩蔵機（ワカメの塩漬け加工装置）の商品開発に着手した。岩手県水産技術センター、岩手大学工学部との共同開発である。これまで1～2日を要していた塩漬け作業が約1時間に短縮され、コストの大幅な削減と省力化、高品質化ができると漁師さん達からとても好評な製品となった。

3月11日 14時46分

事務所にいる時に地震が来た。とてもすごい揺れ



で、ロッカーやキャビネットが倒れそうになったので必死に抑えた。釜石市出身のため、子どもの頃から地震が来たら避難する事は習慣として染みついていて、尋常ではない揺れだったので、津波が来ると直感的に思った。すぐに従業員を帰宅させて、自分も会社の近くにある自宅へ帰った。家族が避難した事を確認し、高台の小学校へ避難した。最初はラジオで「予想される津波の高さは3mです」と報道されていたので、防潮堤も超えないだろうと思っていた。しかし、湾口防波堤で少しは弱まったのだろうが、あっという間に公共埠頭や橋が波にのまれた。そして予想を上回る大きな津波は、海の近くにある2階建ての我が家の屋根が隠れるほど押し寄せ、家を飲み込んでしまった。信じられないと思ったが、「はあ…こんな事もあるんだな…」と流される様子を見ているしかなかった。その日の晩は小学校の避難所で「もう世の中の終わりかな、会社ももうやめようか」と自問した。

従業員達の姿を見て、
会社の再建を決意

翌朝会社に来ると、3つある工場の1つは全壊で、2つは鉄骨だけになっていた。機械はすべて海水をかぶってひどい状況だ。停電しているし、ガソリンもない。周囲の道路は瓦礫で溢れていた。と

ころがそうした中、従業員が徒歩や自転車で会社に来て片づけを始めた。私は指示を出していない。従業員達には「会社はもう駄目だ」という考えは一切ないようだった。自主的に片づけをする従業員は、日を追うごとに1人、2人と増えていった。そうした従業員達の姿を見て、会社の再建を決意した。

まずは資金が必要だ。半年、会社を維持できるお金を用意しようと銀行に掛け合った。釜石市内の銀行は一般市民の対応に迫われ企業への対応はできなかったもので、盛岡まで行き資金を確保した。ビニール波トタンを使って、自分達の手で工場の壁を張り替え、中古の機械をすぐに手配した。全国から応援を兼ねたストーブの注文が来るようになり、5月末からは少しずつ出荷を始める事ができた。また、6月頃には漁師さん達からワカメ塩蔵機の注文が来るようになった。漁師さん達も被災したが、ワカメは1年で収穫できる。ワカメ養殖を再開するにあたり塩蔵機が必要になったのだ。自社製品を持っている事が幸いした。

全国の支援に感謝を伝えた被災ストーブ

工場を片づけていると、瓦礫の中から在庫のストーブがたくさん出てきた。海水をかぶり多少傷がある。さらに錆が出てくる可能性もあるため売り物にはならないが、修繕して塗装すれば使用する分には問題がない。そこで、木質バイオマス燃料の普及に役立てていただければと思い、活用してくださる団体への無償提供を呼びかけた。全国紙が記事に取り上げてくれた事も手伝って、全国各地から応募が来た。被災したストーブは、過疎化した農村の活性化に取り組んでいる団体や森林セラピーをしている団体、老人ホームなどへ行き先が決まった。その後高知県の老人ホームの方が来てくださって、毎日炎を見ている年配の方に笑顔が戻ったと、ストーブの活躍を報告してくれた。もちろん修理の費用はかかったが、全国に薪・ペレット兼用ストーブを通じたネットワークができたので、提供して良かったと思っている。

大震災を振り返って

日本での木質燃料暖房機の普及はまだ課題が多い。外国製のストーブも流通が増えているため、全国で薪の供給が足りていないようだ。「薪を購入できないか」と関西からのお問合せもあった。現在、釜石地方森林組合と山から木を切り出し、薪にし、供給するまでのシステムを研究している。また、都市部では煙とストックが問題になるため、薪よりもペレット燃料が良い事が分かってきた。



撮影：2011.3.11 岩手県釜石市 建物を飲み込んだ津波

これから家庭用も農業用も技術的な研究をさらに進め、人々の身近なエネルギーとして広めていきたい。

私も約2週間避難所で生活したが、被災した方々は少なからずオール電化住宅のように1つのエネルギーに頼って暮らすスタイルは危ういと感じたと思う。ヨーロッパでは薪ストーブが暖房として多くの方に使われている。しかし、日本では石油燃料のストーブが主だ。日本には全国に山があり、木質バイオマス燃料は私達にとって、とても身近なエネルギーである。少々手間はかかるけれど、薪を作って炎を見ながら煮炊きをして暖を取り、身近なエネルギーと暮らす方が人間らしいのではないだろうか。かつての日本人はそうした人間らしいライフスタイルだったはずだが、いつの間にか変わってしまった。震災後、釜石でもこうしたライフスタイルの重要性が話題となった。震災前は岩手をはじめとして長野や北海道からのストーブの注文が多かったが、震災後は関西地方からの注文が増えている。南海トラフ地震なども危



撮影：2011.3.31 岩手県釜石市 被災したストーブ工場

惧されている事から、電気だけに依存せず停電時でも暖を取れるほか、煮炊きもできる点が好評だ。震災を受けて、薪ストーブのような再生可能エネルギーに対する人々の認識は変わったように感じる。

東日本大震災で釜石でも大勢の方が犠牲になった。日々心豊かに生きられるように、自分にとって何が大事なのか、どう生きていくかが重要だと思う。家族と共に毎日美味しい食事をして、仕事ができ、自然の恵みの元で生きていけるありがたみを改めて感じている。



薪・ペレット兼用ストーブ「クラフトマン」



撮影：2011.3.13 岩手県釜石市 被災した元事務所
(石村 真一さん提供)



撮影：2011.3.13 岩手県釜石市 被災した本社工場
(石村 真一さん提供)



撮影：2011.3.18 岩手県釜石市 被災した工場内部
(石村 真一さん提供)



撮影：2013.8.21 岩手県釜石市 復旧した工場内部
(EPO東北スタッフ撮影)

任意団体 千年後の未来、村や後世を想って

野田村

大澤 継弥、畑村 茂、廣内 幸作 だらすこ工房

取材日 2013.09.25

小さな木工工房は岩手県野田村の山中にある。東日本大震災後、5人のメンバーで始まった。震災の記憶と復興して行く被災地の姿を伝えるため、村を守りながら倒れた防潮林の黒松を用いて木工品を作っている。また、再生の足がかりとして地域主体の自然エネルギー発電所「野田村だらすこ太陽光発電所」を自分達の手で建設した。

だらすこ工房の始まり

【大澤さん】「だらすこ工房」は私が25～6年前から叔父叔母の家をコツコツと改築して作ってきた場所だ。久慈市内で長年勤め、厄年の前後に病気になる「自分は長生きできないのだろうな」と思った時、先の事を考えた。昔に比べて村には人々が集まる場所がとても少ない。昔は家の縁側に誰かが座っていて、家の前を通る人に「おい、よってけー」と声をかけていた。そうした場所が減り、自分を含めて男性は退職後に時間を持て余してしまうのではないかと心配になった。退職後は地域の人々の集まる遊び場のような工房を作る事が夢となった。



大澤 継弥さん

は入らなかった。

【大澤さん】翌朝、避難所を確認し、家族の無事が分かった。自宅は流されてしまった。ショックがないと言えば嘘になる。当然、心の中には悲しい気持ちや悔しい気持ちがあったけれども、表には出さないようにした。

【畑村さん】自宅を津波で流され、妻の実家に1週間ほど避難した。ところが親戚の家にも何も情報が入らなかったのも、久慈工業高等学校の避難所に入った。高校は山の方にあったので、電気は2～3日で回復したようだ。

【大澤さん】津波が起きて、自分の家が海の近くに建っていた事を再認識した。もちろん、海の近くに住んでいる事や津波が来る地域である事を知っていたが、自宅を流される想定で暮らしているわけではなかった。しかし、自然災害は仕方がない。これほど海の近くに家が合ったのだから、流されるのは当然だろうと思った。家族が無事だった事が幸いだし、俺の将来はもう短いのだから、1日でも多く楽しんだ方がよいのではないかと感じた。

地域の人々の防災意識

【畑村さん】3月11日の2～3日前にも地震があっ

3月11日 14時46分

【大澤さん】だらすこ工房で作業をしている時に地震が来た。とても長く、揺れ方は尋常ではない変な感じだった。地震が来た時、年長者の昔の話をよく聞いていたので、すぐに津波が来ると分かった。家族や町内の身体の不自由な方、お年寄りが心配になり、工房を出発する準備をして町の方へ向かった。ところがすでに津波が来ている事を聞き、町に入る事はできなかった。その晩は家族の消息も分からず、不安な一夜を過ごした。

【畑村さん】薪割りをしていた。「そろそろ3時だからお茶でも飲むかな」と思い、自宅に入ったところで地震が来た。とても長い揺れだったが、家の中では物が落ちる事もなく、ストーブの上に置いてある鍋からお湯が少しこぼれるくらいだった。大きな地震があった時は必ず津波が来る。すぐに高台へ避難した。

【幸作さん】旭町の修理工場にいる時に地震が来た。とても浜に近い場所なので、間違いなく津波が来ると思った。周囲の人に「何も持たずに、とにかく年寄りや孫を車に乗せて逃げろ」と指示をした。揺れているうちに停電になったため、警報

た。私は避難したのだが、近所の人達は逃げていなかった。家に戻ると妻は「恥ずかしい」と言った。周りの人は逃げていないのに、自分達は逃げたからだそう。人々にはこうした気持ちはどこにあるのかもしれない。また、その時の地震で津波が来なかったため、3月11日の地震の後も津波は来ないだろうと判断して逃げなかった人もいたかもしれない。

【幸作さん】 それでも津波は黙ってやって来る。いつ来るのか、どのくらいの高さなのか、津波が来るまで分からない。万里の長城と言われた旧田老町の防潮堤でさえ、絶対に安心ではないのだ。どの台風でも町を流してしまうほどの台風はないが、津波は細いところに入るほど威力が増し、波もどんどん高くなる。三陸沿岸は細く狭くなっている場所がたくさんある。だから大きな船も内陸へ運ばれてしまう。津波は何の知らせもなく、静かにやって来る。それを分からずに防潮堤を高くしても意味がない。

【畑村さん】 地震が来たら逃げるのは当たり前だ。昭和8年（1933年）の昭和三陸津波の話を聞いていたならばなおさらだと思う。逃げる時は海から1歩でも遠く、1歩でも高いところに逃げなければならない。そうすれば助かる可能性が上がる。逃げるのは恥ずかしい事ではない。

【大澤さん】 幸作さんのように豊富な経験を正しく認識している事が重要だ。津波はブルドーザーと同じ原理で、細く狭い場所に入ると威力が増して波は高くなり、波同士がぶつかればさらに波は高くなる。もしかしたら年長者の中には昔の話を聞いて、豊富な経験から自分なりの解釈をしてしまった人もいるかもしれない。犠牲になってしまった方々の状況から原因を把握し、また悲劇を生まないためにも、これからの復興や防災意識に活かしていかなければならないと思う。

2010年に、旭町自主防災組織で防災設備を整備した。旭町内会長を務めており、役場から「津波や水害のある地域なので自主防災組織を整備しないか」と提案された事がきっかけだ。会長に就いたからにはぜひ何かをやってみたいと思っていたし、津波や水害が常襲の地域に住む者として、防災は大切だと日頃から感じていた。（財）自治総合センターのコミュニティ助成事業を活用し、発電機、携帯ラジオ、簡易トイレ、救急箱、災害用車いすなどをそろえた。また、地域の方を対象に聞き取り調査とアンケートを行ない、要介護者や英語が必要な方をリストアップした。支援体制も防災グッズもそろったので、2011年4月からはそれらを使って訓練を行なおうと計画を立てた、



廣内 幸作さん

その矢先の震災だった。津波によってそろえた防災グッズは流されてしまった。

小学生の孫に「おじいちゃん逃げよう、逃げよう」と言われて、しぶしぶ逃げた方は多いらしい。また、津波を見物していて、思わぬ大津波に必死で逃げて間一髪で助かった方が大勢いるそう。避難路や避難所の整備は大切だが、個人の防災意識は最も重要なポイントではないだろうか。旭町で自主防災組織を立ち上げた目的の1つは「防災意識の向上」だった。どのような津波が来るのかは分からないのだから、想定内、想定外は関係ないのだ。避難路や避難所が活かされるような防災意識をすべての人が身につけなければならないと思う。

「千年の松」プロジェクト

【大澤さん】 皆が仮設住宅に入るようになった頃、周りの様子を見てみると、男の人達が時間を持て余して散らばっている。集会所では女性が集まってお茶っこしていた。「ああ、やっぱり男の居場所はないのだ」と思った。「遊び場があるから来てよ」とだらすこ工場の事を何人かに声をかけた。そのうちの1人に畑村さんがいた。

【畑村さん】 仮設住宅で「輪の会」というグループがあったので、大澤さんから話を聞いて仲間に声をかけた。2012年6月からだらすこ工場へ来ている。最初は「試しに行ってみるか」と軽い気持ちだったが、現在まで通い続けているのだから、だらすこ工場を気に入ったという事だと思う。

【大澤さん】 時間制限も拘束もない。誰が何をするのも決まっていない。工房が少しでも元気の素になれば良いと思っているので、自由に利用してもらいたかった。

だらすこ工房では「千年の松」プロジェクトに取り組んでいる。昭和10年、野田村には約1万本の黒松が防潮林として植えられた。村民の手による3年がかりの一大事業だ。東日本大震災で黒

松は村を守りながら倒れ、現在は数えるほどしか残っていない。復興へ向かう事ができる感謝を忘れず、未来の子ども達をまた来るかもしれない津波から守るために、だらすこ工房では村を守った黒松を活用して、木工品を制作販売し、売り上げの一部を村に寄付をする事にした。それを「千年の松」と命名し、防潮林の苗を買うための資金に充てている。我々の取り組みを子ども達が意識して、感じてくれれば良いと思っている。何のために、どんな思いで取り組んだのか、我々のストーリーが伝わり続ければ、津波に対する意識の向上にもつながると思う。未来の子ども達を守り、夢のある村を残したい。

【幸作さん】 教える人は立派な先生でなくともよいと思う。経験した人が教えていかなければ分からない。

【大澤さん】 学者などの立場からの見解ももちろん必要だろうが、地元の経験者を大事にした方が良いと思っている。今後の防災意識の向上や防災教育について、しっかりと練り直すべきだ。大震災では多くの映像が残っている。正直、当事者としては見たくはないが、そうした映像を見せる事も、忘れてしまわないため、今後の犠牲者を出さないために必要かと思う。

【畑村さん】 この出来事を伝え続けるしかない。それを子ども達にも伝えたい。この大震災を経験した人が自分の子ども達に話せば、その子達は友達に話すかもしれないし、大人になってから自分の子ども達に話すかもしれない。「100年前にね…」「200年前にね…」と、そのように伝えていくしかないと思う。

【大澤さん】 だらすこ工房は、取り組んでいる事はてんでんだけれども（めいめい違うけれども）、仲間とお話できるのが楽しい。何かを作る事が目的ではなく、ここに集まっただけの情報交換が何より大切な事だ。そして、自分達が何とかめげずにやっている事を、これまで支援をしてくださった方々や若い世代に見せたい。野田村に住む我々の取り組みを発信する事で、野田村の元気を知ってもらえる事ができると考えている。

「俺たちが作ったんだ」

【大澤さん】 NPO 法人環境パートナーシップいわての佐々木明宏さんから、市民共同発電所事業の提案をいただいた。市民ファンドで太陽光発電所を建設し、事業を通して自立と復興を目指そうとする取り組みだ。仲間に相談すると、「やる！」

と二つ返事で、とんとん拍子に話は進んでいった。この事業に取り組む事を決めたのは、震災で停電を経験し、福島第一原子力発電所の事故があった事をきっかけにいろいろと考えさせられたからだ。これからのエネルギーには何が良いのか、知らず知らずのうちに情報として入ってきていた。

【畑村さん】 現代の社会では電気やガソリンが無いと何もできない。もしも近くにエネルギーの供給源があり、どのような状況でも灯りさえつければ、精神的にとっても救われるはずだ。

【大澤さん】 2012年11月、雑木林の木を伐採して片づけ、12月に太陽光パネルを載せる単管パイプの基礎を作った。1週間ほど技術指導の方が1人だけ来てくれたが、すべて自分達で建設した。私は配線関係を担当し、仲間には大工や土木関係者のプロフェッショナルがそろっていた。いろいろな人が集まると得意を持ち寄って、何かができる。

【畑村さん】 2013年6月、「野田村だらすこ太陽光発電所」が完成した。単管パイプやパイプを地面へ打ち込むための機械はとても重くて大変だったが、建設にかかった約6ヶ月間は本当にあっという間だった。この発電所の建設に取り組んでから、自分が作った電気だと思える。これまで使っていた電気は他の人が作ったものだ実感した。震災を経験したからこそ分かった事であり、よそから入った業者ではなく、自分達でやったのが良かった。自立運転ができるので、非常時に備えて、50 kw くらいの発電所を村にたくさん作れたら良いと思う。

【大澤さん】 歳を取っているけれども、我々も将来やエネルギーの事を考えている。大震災を通してエネルギーに対する意識は変わった。市民共同発電所の提案があった時、すぐに挑戦してみようと思った。この発電所は自分達のためではなく、未来の子ども達のために作ったと思っている。村



畑村 茂さん

の人達やいろいろな人を巻き込んで、自分達で作ったのが良かった。エネルギーをより身近に考えられるし、発電所を「俺達で作ったんだ」と子ども達に言う事ができるし、実物を見た時にストーリーが始まる。手づくりの発電所が村のあちこちにあるようなまちづくりをしたい。

新聞やテレビなどのマスコミに取り上げられた事もあり、花巻や仙台、気仙沼から「自分達もやりたいなと思っている」と見学者が来るようになった。現在は2号機の建設も考えている。また、使わなくなったパネルを再利用して、移動式の携帯用発電キットを作ろうとしている。これらの取り組みは夢にも思わなかった展開であるし、このような経験ができてとても勉強になった。仕事として何十年もやってきた事を活かせるのは、「やったな」という達成感がある。ものすごく楽しい。

村への想い、大震災を振り返って

【大澤さん】東日本大震災が発生し、全国、世界中から多くの方が支援に来てくれた。本当にありがたい。支援をしてくださった方々に何とか感謝の気持ちを伝えたいと思い、だらすこ工房の活動を続けてきた。自分1人だけの力ではできないので、仲間や行政に協力してもらおう。幸作さんはだらすこ工房にとって、とても頼れる先輩だ。漁師を経験し、昔の事、道具の使い方やロープの結び方など何でも知っている物知り博士である。

次世代の人達はこれからの日本を背負っていかなければならない。高齢者が増え、震災の復興もあり、原発の問題も抱えている。少ない人数でこの日本を支えていかなければならない人達の事を思えば、我々も何かできる事を示したい。動いていれば100人のうち1人でも見ていてくれると思う。村や後世を思う気持ちはきっと世界共通だ。我々のために先祖が防潮林や伝承などを残してくれたように、意識はしていないけれども、村や後世を思うDNAが根づいているのだと思う。

自然災害は誰の責任でもない。自分の家だけが流されれば、「なんで俺の家が…」と思うのだろうが、今回の震災では多くの方が大変な思いをした。形のあるものは流されてしまう。防波堤や防潮林には限度があり、それを超える津波が来たのだから仕方がない。目標としてきた、家を建てる事は達成できた。もう流されて無くなったけれど、自分の人生で家を建てる事実は変わらない。これまで自分の一生はこうありたい、一生のうちにこれをやりたいと思い描きながら生きてきて、震災をきっかけに思わぬ方向転換があったけれども、最終的に考えてみると、だらすこ工房にたくさんの仲間や村民が集まってくれる事が自分の目標の到達点だと思っている。だらすこ工房は村の人達が



野田村だらすこ市民共同発電所

集まる場所として千年続いてほしい。

【幸作さん】津波は明治三陸地震、昭和三陸地震、チリ地震と何度も来ている。その都度皆で頑張って、何とか立ち直ってきた。何回津波が来ても、何とか立ち直ってきた。流れたものは元には戻らない。村も行政も国も悪くない。自然災害が起きた時、誰のせいかと考えても誰も悪くないのだ。なんぼ流れても（何度流されたとしても）元の場所に家を建てたいと思うし、これまで何度も立ち直ってきた野田村を守りたい。

村には昔のような縁側もなくなったし、年寄りが歩いている事は少なくなった。仮設住宅ばかりにいるより、だらすこ工房へ来て、仲間と集まる方がとても楽しい。薪を割ったり、お茶を飲んだりするだけなのだが、また遊びに来たくなる。だらすこ工房は野田村の中で最高の場所だ。

【畑村さん】津波で家を流されてしまったが、流れたら流れたで仕方がないと感じている。今はとてもシンプルな気持ちで、移転先が決まるのを待っている。だらすこ工房へ来て自分が作った木工品の売り上げが村に寄付されるので、工房来ると「少しは野田村のためになっているかな」という気持ちになれる。行政が頑張っている間は、少しでも野田村のためになるよう取り組みを続けたい。

とても便利な社会になったが、すべてが便利になると、人間は駄目になってしまう。便利な社会になったとしても、昔の知恵や道具は残しつつ、緊急時の備えをしなければならない。そして、津波から逃げる時は、1歩でも海から離れ、1歩でも高い場所に行かなければならない。子ども達、孫達…とずっと命がつながっていけば、その先が未来なのだと思う。津波からてんでんに（めいめいに）逃げて、命さえ助かればまたいつかは会えるかもしれない。それを伝え続けなければならないと思う。自分の子ども達、孫達…と順番に教えて、1世代、1世代、積み重ねていけば、千年後につながっていくだろう。

企業

盛岡市

地域の成り立ちや生活のあり方を
真剣に考え直すべき

大立目 勇次 株式会社岩手暖炉

取材日 2013.10.22

株式会社岩手暖炉は1982年創業。数多くのメーカーの暖炉、薪ストーブを取り扱う。また、山や林業に対する問題意識から、2000年より盛岡市近郊の薪を焚くことが大好きな仲間達と「もりおか薪割りクラブ」の活動を行ない、薪ストーブを購入した人達に、薪を作り、薪ストーブに関する情報交換ができる仲間と出会う場の提供をしている。

薪ストーブとの出会い

父親の仕事を継いで、主に林業関係の機械を販売する仕事をしていた。1979年、第二次オイルショックの影響で石油が高騰した際に、お付き合いのあった林業機械の輸入元が「日本は豊かな森林があるので、海外の高性能の薪ストーブはビジネスチャンスではないか」とデンマークから輸入したのが、私が薪ストーブに出会ったきっかけだった。その頃はリゾート地での需要も大きく、しゃれた別荘などに暖炉や薪ストーブが設置されていた。

最初に薪ストーブと聞いた時は、ホームセンターなどに行けば3000円で買える時代なのに、なぜわざわざ海外から高いストーブを輸入するのか疑問に思った。しかし、実際に見てみると非常にデザインが良く惹かれたので、自分の事務所で使う事にした。火を焚いてストーブにあたると、とても心地が良く「これほど良い物なら分かってくれる人もいるかもしれない」と思い、約30年前から仕事として取り組み始めた。

3月11日 14時46分

平泉バイパス北口交差点の赤信号で停車している時に地震が来た。「30秒もたてば止まるだろうな」と思ったが、いつまでたっても止まらない。正確な時間は分からなかったが、地震とはこれほど長く続くものなのだろうか。すぐに尋常ではないと感じた。車体が大きく揺れるので船に乗っている感覚で、誰も車からは降りられない様子だ。信号機や電柱もぐらぐら揺れていた。これほど大きな地震で建物は倒壊しないのか、自宅や事務所は無事なのだろうかと不安が募った。

地震が落ち着き、すぐに信号機は停電した。帰宅する事を決め、一ノ関にある自宅へ向かった。幸い道路の陥没などはなく、普段通る道路を通って帰る事ができた。家では家族が私の帰りを待っていた。電気は3～4日間は止まったが、水道は止まらず、都市ガスもすぐに復旧した。電源に頼ら



ない薪ストーブを日頃から使っているの、暖房の心配はなかった。燃料も前日に薪を調達していたので十分にストックがあった。さらに、米や乾麺など食料の備蓄もあったため、2週間は生きていけるだろうと思った。携帯電話は使える地域と使えない地域があったが、固定電話は使えたので昔の物の強さを感じた。

家族の無事を確認した後、近隣を回って建物の倒壊やけが人がいないかを確認した。停電で暖房の無いお宅が多かったので、「よろしければ、うちに薪ストーブがあるので来てくださいね」と声をかけた。結果的に地域の方々は遠慮して来なかったが、停電が長期化し、もっと寒い時期で毛布にくるまっているだけでは凌げない寒さだったら、地域の方々が集まれる暖かい場が必要だと思った。

ほとんどの大型スーパーマーケットは閉店した。天井が落ちたり、ガラスが割れたり建物の被害が大きかったので従業員やお客様の安全を確保するため。一方、昔ながらの個人商店や地元スーパーマーケットは営業していた。店舗の外で販売するお店もあり、食料や電池を買うために行列ができた。地震から1週間が経過し、盛岡市内にある事務所へ来たところ、ロッカーやストーブが倒れてひどい状況だった。この頃からだんだんと食料の流通が回り始めたと思う。

せめて少しでも力になりたい

次の日、情報を得るために訪れた避難所でテレビや新聞を見て、津波被害の大きさを知った。津波が起きた事はラジオで聞いていたが、まさかこれほどの被害があったとは想像ができなかった。衝撃的だった。

2週間後、お客様に会いに大船渡市赤崎町へ行った。幸いな事にお客様は全員無事だった。一関市大東地域から陸前高田市の矢作町を通ったところ、矢作町でも津波の被害があり、大変驚いた。矢作町は内陸地域なので何事もないと思っていたからだ。それから気仙川沿いに進み、広田町を抜けて大船渡の日頃市町へ行き、さらに海に近い赤崎町のお客様に会いに行った。道路沿いに瓦礫がたくさん積みれ、壊滅的な状況だ。新聞やテレビでは見たけれど、内陸と沿岸部の被害の差がありすぎてもどかしさを感じた。しかし、自衛隊が復旧したのだろう、すでに道路の瓦礫は片づけられ、主要な道路は走る事ができた。

赤崎町のお客様ご自身は地震の時、盛岡にいたためなかなか大船渡に帰れなかったそうだ。お客様のご家族は津波が来た時、すぐ近くの山に逃げて助かり、お宅1階の天井まで津波が来たものの建物に残った。せめて少しでも力になりたいと思い、まだ食料が手に入りにくかったので、大東地域の福祉施設のパン工房で買えるだけ買ったパンと電池をお渡しした。

同級生にも会えた。話を聞くと、自宅は津波の被害を受けなかったが、食料が手に入らず大変だったようだ。その後、広田町のお客様に会いに行った。その地域の住宅も1階部分は津波の被害を受けていた。避難所に指定されている高台のお寺に行ってみると、消防団の関係のお客様は出かけていたのだが、無事である事が分かった。また、陸前高田市内に4～5軒はお客様がいたので中心部へ行ってみると、大変な惨状を目の当たりにした。何かしてあげたい気持ちはあっても、同じ県にいるのに何もできず、もどかしさを感じた。

震災を経て、薪ストーブに対する認識の変化

震災以前、薪ストーブは暖房機なのに嗜好性の強い物だった。火の暖かさや木の温もりを知っている方々が好きで使っていた。しかし震災による長期の停電を経験して、人々の自然エネルギーや蓄電に関する関心や意識は変わった。新築などで薪ストーブを設置できる条件にある方は設置しようと意識が高くなったと感じる。震災以前は電気や石油が無くなる事を考えていなかった。シンプルでかつ昔からあるものは非常時にも対応できる強

さを持っている。すべてをデジタル、ハイテクにする事は危ないと感じた。

林業と薪供給における課題

薪ストーブの全体の需要は上がっている。ホームセンターなどで購入できるし、個人で輸入している方もいる。岩手県内で2軒しかなかった販売店は、ここ数年で12～13軒に増えた。環境問題に対する認識から取り組む時代になり、注目されるようになった。薪ストーブが木質バイオマス、自然エネルギーなどの環境問題に関する認識に変化したのは7～8年ほど前からだ。本来は自分で薪の調達をできる人が薪ストーブを購入すべきなのだろうが、利用している人達にとって薪の調達は大きな課題である。

岩手県は全国一の薪や炭の生産地だ。かつての生活は薪と炭のエネルギーが中心だった。それが、戦後の高度成長の過程でエネルギーの転換がなされ、さまざまな物が安く便利に移り変わる中で、薪が流通しなくなってしまった。かつては林業の盛んだった岩手県でも林業分野で抱える課題は大きく、薪の供給における現実是非常に厳しい。

暖かく過ごす冬を想像しながら

「もりおか薪割りクラブ」は岩手県盛岡市近郊の火を焚く事が好きな仲間によって始められたローカルなネットワークだ。

うちのお客様が県の林業技術センターのホームページで「薪割りクラブ」の項目を見つけた。薪の利用について、薪割りクラブの構想が書いてあるページだった。そのホームページを見て、私は担当者の深澤光さんに直接会いに行った。その後、意見交換や薪割りのPRイベントを行ない、山や林業の現状に対する活動を一緒に模索した。

「もりおか薪割りクラブ」の活動が始まったのは2000年の事だ。木や山に対する認識を見つめ直してほしい思いがあった。山がこれだけ自分達の近くにあるのに、誰もが無関係なかのように生きている。お金を出せば薪は買えるけれど、自分で薪を作る事で木や山は大事だと感じて欲しいと考えた。購入側は「高い」と感じるが、いざ薪を作って売る側から労働力やかけた時間を考えるととても単価が安い。林業への理解や薪を作る大変さを体験し、薪ストーブを買ったところから、さらに踏み込んでほしい。ある程度意識をお持ちで、市内にお住まいで薪を作る事ができる条件のない方に活動の声がけをしている。

活動は毎年5月頃からスタートする。年10回ほど土曜か日曜に集まって、薪の共同製作をしている。1回の活動に参加するのは約10人だ。普段

は体を動かす仕事をしていないと、なおさら作業が楽しい。当然、最初は斧もチェーンソーも使えないが、だんだんと覚えていく。大変な作業だが、冬の生活の楽しさを知っているのだから、薪ストーブで暖かく過ごす冬を想像しながら薪を作る。作った薪は1つひとつに思い出があり、なかなか割れなくて何度も挑戦した木だと、使う時に思い出す。安いかもしれないが、ホームセンターで売っている薪には作る人の愛情を感じない。使う人の顔が見えないので、ただ物を使う感覚なのかもしれない。作業だけではなく皆でお茶を飲み、コミュニケーション、情報交換をする。自分で作った薪は絶対に無駄使いできない。その薪で冬を過ごすのは特別な事だと思う。

薪を作るグループはたくさんある。考え方はそれぞれ微妙に違うようだ。「もりおか薪割りクラブ」は組織を大きくしないように、お昼にお話できる人数での活動を目指している。名前に「もりおか」と付けたのも、そうした意味が込められている。そうした小さなグループが地域のあちこちできると良いと思う。

大震災を振り返って

岩手県は首都圏に頼りすぎていると感じる。物の流れはすべて1か所でコントロールされ、郊外には大型スーパーマーケットが店舗を構えている。商品は安いだろうが、無駄に多くの量を買わなければならない事も多い。また、コンビニエンスストアがあちこちにあり、いつでも買い物ができる。しかし、コンビニエンスストアにはストックヤードがないため、余った商品はすべて廃棄だ。1世代前まで、地域は地元の商店で成り立っていた。小さい頃から親しんでいる地元の商店はお店より広い倉庫があったし、必要な分だけを買えた。当時のスタイルだったら、東日本大震災でも地域はそれほどのパニックにはならなかったと思う。岩手だけでなくすべてがグローバリズムに頼りすぎている現状があると思う。ローカリズムがきちんと成立した上で成り立つのがグローバリズムではないだろうか。

大震災を通して、災害時には水と暖房が大事だと感じた。お米はなくても、水さえあれば10日は生きられる。災害は突然やってくるのだ。朝、「行きます」と家を出て家族の元に必ず帰れる保証はどこにもない。食べ物、水、安全は自分で確保しなければならないし、岩手は冬が長く暖房を半年間使用するのだから、暖房についても備えるべきだ。日々目の前の事をきちんと行ないながらも、これらは常に考えなければならない事だ。震災直後は電話が復旧したら、修繕依頼に追われると思ったのだが、意外に少なかった。シンプルな薪ストー

ブほど修繕は簡単であり、シンプルなのは緊急時にも対応できる強さを持っていると感じた。それに、さまざまな地震を経験し、薪ストーブ自体や設置の強度が上がっているのだと思った。

現在、関東圏でも薪ストーブの需要は大きい。しかし、薪ストーブを使える条件を持つ人達が使うべきではないだろうか。岩手県でも薪の安定供給は大きな課題なのに、関東圏に出荷されている。米は毎年収穫できるが、木は育つまでに10年も20年もかかる。岩手県の資源を簡単に外に出す事についてはよく考えなければならないと思う。岩手県は山や木が豊富にあるので、災害時の備えとしても薪ストーブは有効だ。それは岩手県の地域性だろう。都市には都市に合った備えがあると思う。

震災後、全国からボランティアがたくさん来てくれた。大変ありがたいことだが、少し疑問を感じた。かつての地域は「結」の文化で成り立っていたからだ。隣の家が困っていたら手伝う、集落同士で祭りの手伝いを行なう。それが結文化だ。あれだけ大きな震災だったので、本当に困った時は必要かもしれない。けれども時間が経ち、ボランティアに頼らずに自分達でやらなければならない時期が来ると思う。震災後、地域を出た人は多く、新しい人が入ってくる事はほとんどない中で、復興できるのか正直不安は大きい。仕事が無いと人は離れてしまうので、岩手県に縁のある経営者が岩手に事務所を構えるくらいの考え方がなければ復興できないと思う。その地域にはその地域の生き方がある。大震災を通して、岩手県、日本の地域の成り立ちや自分達の生活のあり方について、真剣に考え直すべきだと感じている。



暖かく過ごす冬を想像しながら、薪を共同で製作

独立行政法人 自分達の面倒を見る事の重要性を投げかけた

盛岡市

野中 章久 独立行政法人東北農業研究センター

取材日 2013.10.22

東北農業研究センターで農業経済を中心とした幅広い研究を行なっている。農村内の資源利用の研究の一環としてバイオディーゼル燃料（BDF）に長く携わる。東日本大震災時に東北で起こっていたBDFのミスマッチをきっかけに、東北全体のBDF関係者間でのネットワークの重要性を説く。

東北農業研究センターでの研究について

農業経済担当で専門分野は幅が広いが、農家の経済状態を調査して判明するのが最も基本にある業務だ。農家といっても複雑で、農業だけで食べているわけではなく兼業の方もいて、兼業の所得と農業の所得を足し合わせて生活をしている。農業だけではなく兼業の方も重要なファクターになるので、兼業の賃金水準やどこに勤めているかも調査している。

例えば、東北の中山間の寒村で人々がどのくらいの所得水準で暮らしているかを調査する。役所の仕事として、そこに新しい作物を入れて所得を向上させることは重要な任務になる。その時は、ほうれん草を導入するとどれだけの所得拡大効果があるかを調査した。一方でどれだけ彼らが過酷な環境にいるのかを調べている。北上山系のある村では水道があまり普及しておらず、各家庭で沢水を引いている。農業用の用水も沢から引いているが、水が冷たすぎて稲が育たない。そのため池を作り、1度そこで温めてから水田に水を流している。

農村内にある資源は全部有効活用して、将来につなげられるような題材があればそれを発展させるべきだという考えからバイオマスに着目したプロジェクトが生まれ、その延長としてバイオディーゼル燃料（BDF）の調査を行なった。BDFに携わるようになってから8年が経つ。

地域の資源が循環していないと石油依存に対する問題意識があった。それは僕の問題意識だけではなく、研究所のネットワークの中でも、できるだけ石油は使わないように技術開発をしていこうという流れがあった。

3月11日 14時46分

研究所内で本の原稿を書いていた。数日前に少し強い地震があったので、「またか」と一瞬思ったが横揺れが収まらないので、「これはやばい」と感じた。しかも命がかかった原稿を保存する前に



揺れ始めたので、おそらく電源も落ちると思い、地震の中でデータを保存した。HDDが壊れるといけなかったのでPCをシャットダウンしようとしたが、地震の揺れのせいでシャットダウンできずPCを抱きかかえて逃げ惑っていた。地盤が固く建物の倒壊の心配はなかったので、命の危険は感じなかった。電気はその後すぐに落ちてしまった。県の試験場では温室のガラスが割れるなどの被害があったが、研究所は何も被害がなかった。

電気は県庁と同じエリアだったので2～3日ほどで復旧した。電気が来るまではろうそくで暮らしていた。食料は近所の酒屋さんで缶詰とパスタを売っていたので大至急確保した。時間があつたので商店街を歩いて開いてそうなお店に状況を聞いて回っていた。東北農業研究センターの近くにもいつもお世話になっている寿司屋さんがある。地震直後に話を聞きに行くと、冷蔵庫にある魚が腐るので皆で食べてくれと、寿司を食べさせていただいた。規模の小さいお店は商品が腐ってしまう事情があり、商品を提供していた。ガスは止まっていなかったが停電で店内が少し暗かった。

家族経営の商店はお店を開けていて、品物もなぜか並んでいた。親戚関係も含めて地元に着用しているお店は意外と物が流通していた。近所にある小さなスーパーマーケットでは豊富に商品を置いていて、皆がそこに買い物に来ていた。盛岡で一番古い商店街である肴町でもお店が開いていて、お肉屋さんがコロケを揚げていた。通常通り提

供できるものは販売していたそうだ。

大型スーパーマーケットに全面依存している人は目を三角にしていたが、なんとなく田舎には田舎の暮らしがあると思っている人は比較的落ち着いた印象だった。結局、燃料もそうだが大きな仕組みで平時の時にトラックや飛行機に依存しているところは流通が途絶えたが、地域の商店街のような小回りが利くところは生きていた。それで震災直後から地元の小さな商店の油を回収してBDFを作り、地域で回していったらどうだろうかと話すようになった。

震災時に何をするか

仕事を再開した時、最初に岩手県庁を訪ねてトラックのデータを取り始めた。被災県なので救援物資や支援の情報がテレビやラジオを通して発信されていた。そうした情報は県庁で提供されていて、マスコミの方々も県庁で情報を受け取って中継をしていた。そこで情報を得るために県庁に向かった。県庁では細かな対応ができず、マスコミ向けに巨大な掲示板が用意され、あらゆる情報が貼り付けられていた。そこには、今日は何台のトラックが救援物資を沿岸部に送ったかの搬送情報も載っていた。記録しておくべきだと思いメモを取り、同時に筑波の知り合いと電話で何をすべきかを相談した。その電話で普段BDFの調査をしているのだから、今BDFがどうなっているか、プラントが動いているか、調査をしようと決めた。

BDFのミスマッチ

調査を進めるうちに、難しい状況がある事が分かってきた。普段から交流がある盛岡杉生園（さんせいえん）、雫石町福祉作業所かし和の郷、秋田運送に電話をしてBDFの状況を確認した。すると岩手に廃油はあるが、メタノールがないためにBDFが作れないという。メタノールは普通のガソリンスタンドで扱っていて、石油の流通ルートとほぼ一緒だ。ガソリンスタンドが閉まってしまくとメタノールも流通しない事が分かった。別のルートを確認しようと、工業用の原料や試薬として使われているメタノールを扱う素材屋さんに相談をし、在庫をかき集めてもらった。秋田運送に連絡をしてみると、こちらでは廃油がないと聞いた。地震が起こった3～4日後の事だ。マスコミの方が、高速道路は使えないし空港も難しいから、秋田港に荷を揚げて陸路で物資を岩手に運べばよいだろうと話をしていて、実際に秋田港に荷を揚げる話が出ていて、BDFは大活躍するだろうと思っていたが、軽油の手配がうまく



BDFで発電機を運転試験中

いっておらず廃油が足りないのだという。岩手に廃油があつて、秋田にメタノールがあるという状況ではあったが、岩手にあつた廃油の量は秋田運送のメタノールの量と比べるとかなり少ない。岩手にある物を秋田に運んでBDFを作る話はリアリティがないと判断され、東京から廃油を運ぶ事になった。

東北で普段から情報のやり取りや原料を融通し合う関係があれば、メタノールと廃油の連絡は関係各所でできていたはずだ。当時は、岩手生協のように県内でBDFを積極的に広げていこうという姿勢はあったが、それ以上の広がりを目指す盛り上がりはなかった。そのため、石油が来ないなら石油以外で動かそうという動きが作られる余地が無かった。東北でのBDFに関する情報共有ができていれば、震災時にBDFが活きたのにと強く思った。

これからの東北のエネルギー

課題はたくさんあるが、まずは廃油の回収量を増やす事が先決だ。まだ発展途上の技術で完成された社会システムではないので、集めたところで使い道がないという悩みもある。けれども資源というものは集まっている事が大事だと思う。そして矛盾しているような言い方だが、分散的にある事が大事だと考えている。関東に送ってまとめて加工するような仕組みでは駄目だ。東北地域の市町村や、郡程度の単位で利用する事ができるシステムを組み上げる事がゴールになるだろう。そのゴールに向かって進むために、利用できる資源を集めるシステムを組み上げる事が出発点になると思う。それと同時に使う側の工夫も必要となる。東北は気候的に暖房需要があり、必要とする期間も長い。BDFは普通、ディーゼルエンジンを動かすために使うが、暖房に使う事もできる。

エンジンに使わないなら暖房に使うという用途を開発していくべきだと考えている。

BDFに関してはまだまだ可能性があると思っている。先進国のように工業化が進み生産が拡大している国は、必ず廃棄物の問題が拡大していく構造にある。廃棄物を減らすという意味でも、植物油のように大量に輸入をしていて商品化もしている資源の活用は重要だ。確かにBDFは最近のエンジンには使えないと言われていて、なんとなく斜陽な見方をされているが、農業用として十分使えるし、発電機や建設機械にも適合する。トラックや乗用車を動かすには適合しないかもしれないが、利用できるところで活用されれば十分だ。特に東北は農業圏なので、農業現場での利用可能性はまだまだある。これは石炭から石油、石油から原子力のような表街道のエネルギー転換とは別のエネルギー転換で、とてもローテクで格好悪いけれど、小さな努力の積み重ねでのエネルギー転換だと思っている。だから少しくらいエンジンが変わったからそう簡単に諦めてよいものではない。逆に、そんな事で影響されない用途はたくさんあると思う。

エネルギー転換の課題

エネルギー転換は、産業構造全体をデザインしていく過程の一部でなければいけない。産業構造をデザインする役割を担うのは地方行政だが、地域内で議論し行政に対して提案していく形が望ましいと考えている。地域内で議論する場が形成されていない事が課題だ。

例えば県庁で低炭素の課題として太陽光・木質バイオマスなどの再生可能エネルギーの利用拡大や、企業などによる3Rの推進などいろいろな事に取り組んでいるが、それは地域の産業戦略のデザインに結びついていない。BDFを推し進めているNPOや事業者にも、自分の事業の範囲で考えるために範囲を越えたところまでは考えられない。このような地域の産業戦略としての課題は大きいと思う。

実際の動きがないと研究者も研究課題が立てにくい事もある。大学の先生で地域の産業戦略を課題として取り組んでいる方もいるので研究を進める事はできるが、現場では動きがないために研究と実社会との距離ができてしまい実際の運動と連動していかない。地域内で産業戦略の議論の場が形成されないため、BDF産業は発展途上であると感じた。

震災を振り返って

地域のコミュニティの在り方として、自分達で

自分達の面倒を見る事の重要性を投げかけたと思う。被災地ではお互いを支え合う事で生活を成り立たせていた。被災地の生活がコミュニティの重要性を再確認させ、崩壊させてはいけないと再提起したと考えている。

地域コミュニティの中で、食べ物や水だけではなく薪やBDFなどの燃料も含めて、生活に必要な物資が最低限生産されている事は重要だ。確かに、現在の社会のように一極集中で生産した方が効率は良い。しかし、交通が遮断されてしまうと運搬する事ができなくなる。震災が、すべてを遠くの地域に預ける事の危険性を露呈したと思う。自分達の手の届く範囲で、生活が成り立つものが自給できれば、いざという時に役立てる事ができる。

震災後の調査中に、山から薪を集めている農家の方に震災時の話を聞いた。すると、「まったく変わらなかったよ、うちは薪だから」と言っていた。震災時に燃料不足が深刻な問題となった一方で、ある地域では燃料が自給できるために何も問題にはならなかった。大震災は、いままで当然手に入ると思っていた燃料が手に入らなくなる事、コミュニティ内で燃料を自給する事の重要性に気づききっかけになったと思う。



精製したBDF

大学

仙台市

夢や志を目標に生きる姿勢を育てる教育と津波被災地

島野 智之 宮城教育大学 環境教育実践研究センター

取材日 2013.04.03

野外生物学者（生物多様性）。世界中の研究者と連絡を取りながら持続可能な開発（発展）のための教育（ESD）や環境教育の推進にも取り組む。震災直後は世界各地での野外調査のスキルを生かし、被災者支援のボランティアに加わり、気仙沼市、南三陸町などの被災地を巡り、救援物資の配給等の作業を支えた。

ESDと志教育

南三陸町教育委員会から、大震災後初めて南三陸町内の全教員がそろって研修会で「持続発展教育と志教育」に関する講師を依頼された。

志教育とは、宮城県教育委員会が震災前から独自に推進している教育の在り方で、子ども達が小・中・高等学校の全時期を通じて、人や社会と関わる中で社会性や勤労観を養い、集団や社会の中で果たすべき自己の役割を考えながら、将来の社会人としてのよりよい生き方を主体的に求めていく教育である（キャリア教育）。小さい時に描いた夢を、高校生までに志として高めていく。「夢と志」ではなく、子どもの頃に持った「夢」を「志」として高めていこうというものだ。

ESD（持続可能な開発（発展）のための教育、持続発展教育ともいう。Education for Sustainable Development）も、社会の中での自分の立場を理解して、社会で自分は何ができるかを考える。持続可能な社会を創るために、私達は何ができるかを考えるのがESDだと思う。志教育も同様な事を目指している側面がある。社会の中で自分ができる事や役割を大事にする教育であり、ESDと根底ではつながっていると考えている。

大震災発生後、支援者は5～6月にかけて疲労のピークがあったが、学校の先生方はさらに夏休みにかけても疲労のピークが残っていた。先生方は非常に疲れていた。そうしたとても大変な中で、志教育や持続発展教育の講話を行なうのは、話にくい部分が多かった。けれども、志教育の中の「夢」や「志」という部分を取り出してみるならば、それは大変な状況にあっても夢や志を見つけて、それを目指に生きていこう、頑張っていこうという姿勢だ。そうした姿勢を持つ事はとても意味があるのではないだろうか。その意味では、志教育も持続発展教育も津波被災地において必要な教育の考え方の1つであるように思う。



大震災後の海岸生態系

海岸生態系は震災前にすでに人間の活動によって破壊されていて、ごく一部にしか良い海岸生態系は残っていなかった。2011年の夏に津波が来た海岸を調べると、分解者の生態系、つまり藻類などを分解するような生態系は戻ってきていた。つまり、千年に1度の津波でも海岸の生態系を根こそぎ破壊する事はなかったと考えられる。

しかしその後、夏に重機を導入し、仮設防潮堤がたくさん造られた。その重機は海岸のごく一部に残されていた、手のついていない非常に良い海岸生態系を根こそぎ破壊する事につながった。今後さらに工事用の機材や重機が入り、防潮堤ができれば、ごく一部にしか残されていなかった良い海岸生態系が根こそぎ破壊されてしまうだろう。それでも、それなりに海岸生態系はできるだろう。しかしとびきり良い海岸生態系は、一度破壊されてしまうと戻ってこれない貴重な生物を含んでいる。

今も定期的に気仙沼・南三陸エリアへ調査に行っているが、海藻が根こそぎ無くなっている。最初は打ち上げられた海藻がたくさんあったけれど、2012年頃から海藻が打ち上げられない。もともと海藻からはじまっている海岸生態系は一旦、縮小状態になっている。このような、ハビタット（生息場所）が残されている場合には、生物達は絶滅

してしまうわけではなくて、また戻ってくると考えられている。津波の後に一度回復したものが、また規模が小さくなり、生態系自体が痩せ細った状態になっているのが現状だ。これ以上工事用の機材や重機が入り、防潮堤を作り上げてしまう事は、生態系から見れば避けていただきたい事ではある。

漁師さん達は「海と生きる」覚悟を持って海と生きている。僕達研究者が常に研究対象の生き物を顕微鏡などで見ていないと分からなくなってしまうのと同じで、防潮堤という遮るものができると、海の事がわからなくなってさらに危険になるのではないかと、漁師さん達が仰っていた。防潮堤で海を遮る事は海岸生態系の大きな問題を引き起こし、人間の活動にも大きな影響を及ぼす。

非常時のアレルギー問題

高度な障害を持つ、支援が必要な子ども達のためのマニュアルを出版した。医療に近い支援を常に必要とする子ども達が、一切電源が無い避難所などでどうしたらよいのか書かれている。その中でも僕の興味は食品アレルギーにあり、仙台にある「ヘルシーハット」というアレルギー対応食品や自然食品を販売するお店へ取材に行った。社長さんがもともとひどい金属アレルギーを持っていたらっしゃったそうで、食品アレルギーを持つ子ども達も食べられるものを豊富に取り扱っている。小さいお店だが、全国に顧客を持っている。

震災の時にアレルギーが出て、呼吸困難になったら命にかかわる。震災の後は遠くから、自転車などで食品を求めてお客さんが来たという。皆さん、「命拾いした」と仰って帰られたそう。震災直後にお店を開けた事で救われた子ども達はたくさんいた。今後も、ぜひ頑張っていたきたいお店である。

2年間で振り返って

社会全体を次のエネルギー形態で維持できる社会に切り替えていたらよかった。あの当時はそんな夢があったけれども、現実的にはなかなかそうは進まない。震災後はもっと世の中のエネルギーがシフトするかと思ったけれど、2年経ってもそれほど代替エネルギーへシフトしている現実は多くは見えてこない。ただし、長い目で見れば、いくつものきっかけにはなったと思う。

個人的な支援活動としては、南三陸町のネイチャーセンターを、今後とも支援したいと思っている。震災前にもお世話になっていた。津波で大変な被害を受け、使っていた電子顕微鏡は田んぼの中に転がっていた。2013年になり、やっとブ

レハブの準備室が立ち上がった。今後は震災前と同じように、もしくはそれ以上に県外の人にも来ていただき、志津川の海を楽しんでもらえるよう、震災でどんな事があったのかを含めて伝える場として、ネイチャーセンターが元気になっていくところを支援していきたいと思っている。

また、学生達のサポートをしていきたい。私が顧問をしているサークルでは、のべ120人ほどの学生が、のべ40日間ある仮設住宅に通い、子ども達の学習支援を行なってきた。あるいは子ども達が望む、陶芸教室や星空観察会などを自分達で企画していた。自治会長さんとも連絡を取りながら、地域の夏祭りにも参加させてもらった。

今年は学校が荒れる年になるかもしれないと言われている。阪神淡路大震災でも、2年経ってから学校が荒れたらしい。神戸などから非常にたくさんのスクールカウンセラーが応援のために被災地の学校へ来てくださっている。嬉しい事だ。こうした問題も含めて、学生達が主体となって取り組んでいる活動が続けられるよう、サポートをしていきたいと思っている。学生達も仙台で大学間ネットワークを作り、学生サークル同士の連携をとりたいと言っているので、実現できるよう応援したい。



任意団体

仙台市

被災者と支援者、
両方の目線で宮城と佐賀の橋渡し

砂子 啓子 i-くさのねプロジェクト

取材日 2013.05.21

i-くさのねプロジェクト代表、生活協同組合あいコープみやぎ理事。一般主婦の目線からの支援活動が続ける。震災後、地元佐賀県から支援活動を始めた事をきっかけに、佐賀県と被災地をつなぐ橋渡し役を引き受ける。現在は宮城県宮城野区と岩手県陸前高田市を中心に活動をしている。

3月11日 14時46分

幼稚園から帰ってきた子どもをバスから引き取って、八乙女にある自宅マンションの8階の部屋に入った途端に地震があった。ドーンと大きな地鳴りのようなものが聞こえ、とっさに子どもと一緒にリビングにあるテーブルの下へ入った。建物を揺らして倒壊から守る構造だったので、家具がすっ飛んでいくほど大きく揺れた。テーブルの下でなんとかやり過ごし、家財をかき分けながらマンションを降りた。後日、マンションは全壊判定を受けた。強い余震が続いたのでマンションにいては危ないと思い、近所の避難所で2日間ほど過ごした。

当時は子どもが2歳と4歳だった。家の中を片づけるにしても、この2人の子どもがいる状態だと危なかった。主人の実家が東京で、私の実家は佐賀だ。東京か九州かどちらに帰ろうか迷っていた時に、福島原発が危ないから離れられるだけ離れた方が良くとメールが来た。私はあいコープみやぎの理事をしていて、あいコープでは以前から原発についての勉強をしていた。そのため放射能に詳しい友人が多く、東北に残る人は家の外に出るな、外出するならばレインコートを着用した方がよい、可能ならば東北から避難しなさい、などさまざまな情報が入ってきた。

その時は爆発はしていなかったし、テレビも見られないから原発の事故については半信半疑だった。けれども万が一を考え、とりあえず九州に1回帰ろうと主人と相談をした。12日の夜、ラジオで山形空港から東京に向けて1便だけ臨時便が出る事を聞いて、山形空港に向かった。主人は水道関係の仕事をしていて忙しかったので、宮城に残ってもらった。なんとか臨時便に乗る事ができ、東京から佐賀へ帰ったのが13日の事だった。佐賀に帰ってから津波の映像を見てびっくりした。それまでは避難所にいたので津波の映像を見たことがなく、自分達の事で手一杯だった。沿岸部の人達はいったいどんな状況なのだろうと心配になった。



佐賀から仙台への物資支援

佐賀に帰ったら、宮城にいるママ友達から物資を送ってほしいとたくさんメールをもらった。救援物資はアルファ米や乾パンが主なので、子どもは食べてくれない。フレッシュなものは手に入らず長期化するほどに栄養が偏るので、子どもに飲ませる野菜ジュースや果物の缶詰、それに女性の生理用品や服、下着類を送って欲しいと、緊急支援の物資では得られない物を求める声が寄せられた。

翌日、すぐに県庁に向かった。まだ郵送が止まっていたが、県庁からなら送れると思ったからだ。私は仙台から佐賀へ避難してきていて、仙台の知人から困窮している現状を直接聞いている事を説明した。子どものための野菜ジュースや女性のための生理用品などは絶対に必要なもので、避難が長期になってしまったら栄養失調の人が出てしまう。非常食だけではなく被災地のお母さん達が必要としているものの募集をかけて欲しいと伝えた。しかし、宮城県から要請が来ているものしか送れないからできないと断られた。

危機感と焦りを覚えた。せっかく助かった人も、このままでは何日かしたら死んでしまうのではないかと思った。この状況で乳飲み子や小さな子ども、彼らを育てているお母さんの事を考えると、いてもたってもいられなくなった。調べてみると、

九州にある西濃運輸では、仙台市若林区にある支店に荷物を届ける事ができるとの情報を得た。そこで、必要とされそうなホッカイロやウェットティッシュやビタミン剤などを大量に購入した。西濃運輸の支店の近くにはあいコープみやぎがあり、あいコープみやぎにいる職員はあちこちに組合員を知っている。物資を届けてほしいと話を通して、こちらから送った荷物を職員に受け取りに行ってもらい、組合員に届けてもらった。しかし、これだけでは埒が明かないし、自分のお金だけではどうしようもなかった。遠くにいて余力があるからこそ、何かできないかと思い始めた。

i-くさのねプロジェクト発足

何をするにしてもまずは団体が必要だ。一般市民の立場と考えた時にピンと来たのが「草の根」だった。「人づてにつながっていく」という意味を含めて、団体名を「i-くさのねプロジェクト」と決めた。iという字はあいコープの理念にとっても共感をしていたので、iの字をいただいた。

i-くさのねプロジェクトという団体名をつけてすぐに、仙台から九州に避難をしてきていて、現地に必要な物資を届ける活動をしているので取り上げて欲しいと、佐賀新聞に駄目元で連絡をした。すぐに連絡が来て、新聞に掲載してもらう事ができた。新聞掲載を通してつながったのが、「佐賀から元気を送ろうキャンペーン」を実施していたNPO法人地球市民の会だった。NPO法人地球市民の会はいち早く支援活動を行なっていたので目に止まったようだ。会の方から、いろいろな場所で講演をしながら支援者を募る提案を受けて、引き受ける事にした。

たった3日間の震災経験談だったが、各地で講演を行なった。中学校や婦人会などを回り全部で15回ほど講演をした。最初の1年は反響がとても大きかった。震災の実際の現場や、地震の揺れの状況をまったく知らない人が多い。ヘドロの臭いがすごい事、港町では津波によって魚が入り込み家に住めなくなってしまった人の話をすると、「そんなの知らない、分からない」と反応が返ってきた。遠いところの出来事と捉え、実感がないだろうけれど、佐賀も他人事ではない。佐賀は地震の少ない地域なので、私達は大丈夫と考えている人が多い。しかし災害は地震だけではなく台風もあるのだから、自分の地域の防災対策に関心を持ち、家族の避難先を決めておくと、いざという時に役立つ事を伝えた。テレビや新聞で見る情報は本当に少しの情報量なので、私が被災地での日常について話す事で、気づく事がたくさんあったようだった。講演が終わると、必ず家庭の防災対策を見直そうという話題になった。また、「砂子



佐賀大学文化教育学部附属中学校の生徒がメッセージ入り雑巾を東北へ送る

さんのような一般の主婦の方でも支援活動をしているのだから、自分達もできる事はやろう」と言ってくれる人も多かった。

佐賀は狭い土地なので一度新聞に出ると名前が広く知れ渡る。それがきっかけでNHKなどいろいろな媒体から声をかけていただき、たくさんの情報を発信する事ができた。

佐賀と東北の橋渡し役

佐賀で講演をしながら支援を募る際に、支援金はどういう使われ方をしているか分からないと集まりにくいと言われた。私が佐賀と東北の間に入り、支援品が被災地で使われている現場を写真などで報告すれば、目に見えてつながっている事が分かる。佐賀と東北の橋渡し役をお願いしたいという話をいただき、もともと仙台に戻るつもりでいたので引き受ける事にした。あちこちで支援金を集めながら大震災から半年後に東北に戻ってきた。東北に知り合いがいる佐賀の人はとても少なく、東北に来てボランティアをしたい思いがあってもどこの団体に問い合わせたらよいのか分からない状態だった。私も住んでいる場所が沿岸部から遠いため、沿岸部の方とつながりを持っていなかった。そこで、私は佐賀の出身で佐賀の人たちと東北をつなげてボランティアを派遣している事を伝えて、一生懸命ボランティアの受け入れ先を探し回った。なかなか受け入れ先は見つからなかったが、いくつかの団体から良い返事をもらう事ができた。うまくマッチングする時はお互いにピンとくるもので、良い橋渡しをする事ができたと思う。ボランティアの受け入れは、ボランティアを希望する人と受け入れ先の間に入るコーディネーターがいるとスムーズにいく事が多かった。佐賀の人達は支援したい想いは強いが、東北の状況はまったく分からない。そのため、いきなり引き合わせると「そんな支援は的外れだ」と怒られてしまう事もあった。お互いに強い思いがあるのに、通じ

合わない事がとてももったいない。私は佐賀の人の支援したい気持ちも分かるし、東北の人の大変な気持ちも分かるので、両方の気持ちが分かる私が間に入って、仲介役をやりようと思った。

佐賀の子ども達が、メッセージ入りの雑巾を約1,000枚作ってくれた。これなら邪魔にならないし、メッセージも入れられるから良いと考えた。その時は受け入れ先がなかったので配布して回った。最初は、被災者の方もそれどころではないと言っていたが、実際にメッセージの入った雑巾を貰うと嬉しかったようで、喜んでもらえた。福島ではセシウムが水に吸着するので、少しでもセシウムを抑えたいと一生懸命水拭きをしていたお母さん達に重宝された。お母さん達からも喜ばれるような、主婦目線を心がけた。

佐賀と東北をつないだ酒「絆伝心」

登米市に「イセヒカリ」という無農薬で栽培されている貴重な酒米がある。酒米を調べてもセシウムは不検出で、土壌からも検出されなかったが、大手の酒造会社からその年は契約を打ち切られてしまった。契約を打ち切られた生産者の方は幼い子どもを抱えて路頭に迷ってしまっていた。どうにかできないかと佐賀の皆さんに相談をしたところ、佐賀に古くからある天吹酒造という酒屋が手を挙げてくれた。当時は瓦礫受け入れ問題で揉めていたにも関わらず、調べて不検出だったなら問題ないとイセヒカリを買い、お酒を造ってくださった。それも、3年間は造り続けると決心して受け入れてくださった。佐賀の名物である苺の花びらを酵母に使ったお酒は、復興酒として「絆伝心」と名づけられた。和紙のラベルやシールはボランティアが手作業で全部貼ってくれている。「絆伝心」は新聞で大きく取り上げられた。その後、契約を打ち切った酒造会社が生産者のところにいらして、来年以降の契約再開を打診なさったそうだ。おかげで生産者は農家を続けられる事になった。佐賀の人が動いてくれたからこそその出来事で、本当に嬉しく思っている。

大きなNPOにはない身軽さ

現在は、仙台市宮城野区の高砂地区の方々、石巻、福島、陸前高田の仮設住宅に住んでいる女性とつながっている。

陸前高田は津波の被害が大きく、長い間米の食事が続いていた。子ども達はパンが大好きなのになかなか口にできないと聞き、ホームベーカリーを送る事にした。集会所でどんどん焼いて、皆で食べた。大変喜ばれた。そうした草の根の活動の中



撮影：2011.12 岩手県陸前高田市 仮設住宅で全世帯のケーキを手づくり

で、「靴下が欲しい」とポロッと言われれば届ける。大きいNPOには言えないようなちょっとした主婦の願いを聞いては届けていた。

私の活動の強みはとにかく速い事だ。大きな団体は会議を重ねた上で決定されるから、被災者に届くまで時間がかかってしまう。私の場合はしっかりした団体だと判断できればすぐにお金を渡す事ができる。煩雑な手続きがなくスピーディな性格の活動は重宝され、あちこちから声をかけてもらっている。結局、人と人との付き合いの活動だ。だからNPOではないが、本当に信頼関係と絆での活動を行なっている。

活動を振り返って

立派な方もいるが、すべての大人が「大人」ではない事が分かった。今までは50～60代の年上の人達に頼っていれば大丈夫と思っていた面もあるが、大震災という混乱の中で本当に頼れる人はいなかった。今の現役世代である自分達が考えて行動しないと駄目なのだと気づいた。地震や津波は自分のせいではないけれども、「俺が悪いんじゃない、こうなってしまったのは国が悪い」と言っても仕方がない。けれども人のせいにする人や、他人任せにする人がとても多かった。確かに今回の震災は大変な事だったけれども、人任せにせず自分で動く事の大事さに気づき、人に頼らない責任感を持つべきだ。誰かが悪いと言っている間は立ち直れないし、一步を踏み出すことはできない。原発の話にしても、本当に原発を廃炉にしたいと思っているのなら、反対派の人達はもっと違うやり方で活動をしなければならないはずだ。反対と意思表示をするが具体的な事案は少ない。自分の理想やプライドを横に置いて、覚悟と責任を持って行動したい。国も企業も市民も皆で考えていかなければ、社会の在り方が見直される事はないだろう。

灯すことを 100年や200年も続く文化にしたい

気仙沼市

杉浦 恵一 一般社団法人 Nr.12

取材日 2013.05.27

一般社団法人Nr.12代表理事、ともしびプロジェクト代表。ヒッチハイクでの旅の途中で東日本大震災が起こり、旅を中断して東北への単独支援を開始し、現在は気仙沼に拠点を置く。「忘れないをカタチに」をスローガンに、それぞれの場所で毎月11日にキャンドルを灯すアートイベントプロジェクトを立ち上げ、現在は雇用創出にも取り組む。

3月11日 14時46分

愛知県の実家にいた。ゆら〜と揺れが来たから立ちくらみだと思った。久しぶりの立ちくらみだと思っていたら、リビングからおばあちゃんの叫び声が聞こえた。何事かとリビングに駆けつけると、テレビには津波の映像が映っていて衝撃を受けた。これが本当に日本で起きている事なのかと信じられなかった。

愛知県の揺れ方は震度3程度の長い横揺れのイメージで、単なる立ちくらみだと思った人は知り合いにもたくさんいた。

怪我を治して東北へ

大震災の前は、無一文でヒッチハイクをしていた。愛知を出発して太平洋側から東北を抜けて北海道を回り、日本海側を通って愛知まで帰ってきた。暖かくなったら西日本に向かおうと思っていた矢先の出来事だった。東北にはヒッチハイクの旅でお世話になった方がたくさんいる。恩返しではないけれども、何かしたい、何かしなければと思った。

ところが震災が起こる2日前、足に怪我をしていた。足が曲がったまま伸びなくなってしまい、医者にも1ヶ月は安静にするようにと言われていた。これでは動こうにも動けない。何とか早く治るように願いながら安静にしていたら、1週間程で膝が伸びるようになり、走れるようになった。安静中も何かをせずにはいられず、学生団体と一緒にあって2011年3月12日に募金活動を行ない、約400万円を集めた。けれども直感的に自分がすべき事は募金活動ではないと感じ、同時に絶対に東北へ行ってやるという思いが強くなった。怪我が治った頃、物資を集めているけれど、肝心の物資を送る手立てがなくて困っている方と出会った。そこで知り合いからトラックを借りて、物資を受け取り迷わず東北へと向かった。後輩と一緒にトラックを運転して東北に向かったが、東北のどこに向かうかは決めていなかった。



た。最初は郡山を経由しなければ東北に行く事ができなかった。移動しながら愛知の先輩に電話をすると、電話の向こうで東北の事を調べてくれて、福島が大変だと教えてくれた。震災から1週間後、ちょうど福島第一原子力発電所の事故が起きてすぐの時期だった。「いわきに入ったら死ぬ」「入ったら車が被災車両とみなされ出られなくなる」という情報が流れていた。そのため、いわき市への支援が遅れていて一番困っているという。何も考えずにいわきに入った。競輪場で物資の集積をしていると聞いて、とにかくそこに向かってトラックを走らせた。いわきには夜中にたどり着いたが、家の明かりがまばらにつき、その明かりは異様な感じがして違和感を覚えた。辺りは暗く、よく見えなかったが異様な雰囲気が漂っていた。競輪場にたどり着いて初めて人に出会い、物資の荷卸しを手伝ってもらった。

その日の夜は車の中で寝て、翌日はいわき沿岸の四倉支所を訪ねた。何か手伝える事はないかと聞くと「いっぱいあるよ、寝泊まりもここでしていい」と部屋を与えてくれた。そこで支所の方々と一緒になって、物資の仕分けや配布を手伝った。最初に四倉に行った時、地元の方が隣の久ノ浜を案内してくれた。自衛隊が瓦礫を横によけて作った一本道以外は何も無かった。地元の方と一緒にそこを何度も往復しながら、ここで何をすればいいかと考えた。何かをしなければいけない、けれ

ども現地の様子は外からはまったく分からない。現地の様子を見た自分達が何をすべきかと考えた時に、まずは東北が大変なのだと伝えなければならないと思った。愛知に帰ると、たくさんの人から東北の様子について聞かれたので、東北は大変な事になっている、物資も全然足りていないからどんどん持って行こうと伝えた。地元で四倉へと物資を運ぶグループを作って、物資を運ぶためのサイクルを作った。この時は四倉に絞って支援をしていた。四倉だけで手一杯だと思ったからだ。僕はもともと無一文で旅をしていたので、お金を持っていなかった。知り合いにお金を振り込むように頼み、ブログでも東北に向かうためのお金を振り込んでくださいと支援を呼びかけ、口座番号を掲載した。旅先で1回会っただけの人や、ブログを見てくれている人が振り込んでくれた。

地元での雇用創出

震災から1ヶ月ほどが過ぎ、必要なもののニーズを探る必要があると思った。緊急支援のフェーズから、生活をどう再建していくかを考える時期に変わってきていた。物資支援に回っていた避難所を対象に400枚程のアンケートを配った。しかし、当時は任意団体であったため、団体を怪しんで受け入れてくれない避難所もあった。原発の影響がどれほどのものかも分からない状況にあったので、僕自身はこのままいわきに人々が住み続ける事に疑念を抱いており、アンケートと一緒にいわき市から出る事を呼びかける案内も配布した。たくさんの県が受け入れをしている事や、家賃が無料の物件などの情報を載せた。ところが実際に問い合わせがあったのは2件程で、とても驚いた。この時点では、なんらかの理由があつていわきから出る事ができない人が多かった。そしていわきを出る事ができない事情のある方全員が、「この先仕事が心配です」と書いていた。仕事がないなら作るしかない。しかし1回も働いた事のない僕がどう仕事を作ればよいのか、まったくピンとこなかった。

東北から帰る途中、愛知で支援を始めた時に知り合った方から電話がかかってきた。愛知のある企業の社長と一緒に東北へ向かっているところだという。制御盤を作る製造業の会社で、アジアに支店を建てる予定があった。そこに震災が起き、これから東北では仕事が無くなると考え、アジアの支店をやめて東北に建てようと考えているのだという。特に現地にツテがあるわけではなく、東北で活動をしていた僕から情報を聞きたいということで、茨城付近のパーキングで合流し、話をする事になった。1時間程これまでの話をして、今ちょうど現地では雇用が必要なのだと伝えた。いわき



撮影：2013.4.28 ともしびプロジェクト
気仙沼大川桜並木 未来への集い

の知り合いを紹介し、その後いわきの議員さんの家で地元の方々と社長と一緒に食事会をした。愛知から企業を誘致したいと話すと、全員がわんわん泣きながら「ありがとう」と言ってくれた。それを見た社長もスイッチが入って、「絶対にいわきに建てる」と約束してくれた。6月1日には物件も見つけて求人も始めた。まだ事務所が無かったので、面接はホテルのロビーを借りて行なった。そのまま会社が立ち上がり、今も地元の方を雇用している。

ともしびプロジェクト

キャンドルを灯し始めたのは2011年11月11日からだ。仮設住宅で活動をしていた時、何が不安かと聞くと、たくさんの方が異口同音に「忘れないでほしい」と言っていた。ゴールデンウィークが終わったあと、ボランティアの数が急に減った事は僕でも分かった。支援を受けてきた方々ももちろん感じていて、ボランティアはこれから普通の生活に戻って被災地の事を忘れてしまうと思うのだろう。忘れてなどいない事を形にできないかと考え、あるイベントでキャンドルを灯した事を思い出し、キャンドルに火を灯す事で忘れていない事を形に表せるのではないかとひらめいた。何か支援をしたいけれど、何をしてもいいかわからない人は大勢いる。気休めではないが、キャンドルに火を灯して震災を忘れていない事をSNSを使って表現する事で、何かをしたい人も、忘れないで欲しいと思っている人もつながる事ができる。これならば、遠くにいても参加できる。まずはやってみよう活動を始めた。「ともしびプロジェクト」の名がついたのはもっとあとの事だ。ともしびプロジェクトでは山梨のキャンドル工房「あかり堂」の協力のもと、手でこねてつくるキャ

ンドルキット「KONECANN（コネキャン）」を復興キャンドルとして販売している。気仙沼の主婦の方々にパッキング作業を手仕事としてお願いしている。KONECANN購入者は手仕事としての雇用創出、バラバラになったコミュニティの再生など、間接的に被災地を支援する事ができる。東京でもこのKONECANNを使って11日に灯りを灯し、大震災を忘れないよう呼びかけるコミュニティができた。その中で東北のために何かしたいと話し合いが行なわれた。いろいろな立場の人が集まっていて、このコミュニティの中でツアーを組み、東京から東北に来る事もあった。こうしたつながりから「ともしびプロジェクト」の支部が九州や佐賀など全国25か所にできた。

気仙沼をはじめ被災地の沿岸で、「3月11日にキャンドルを灯す」事を、この先100年200年と続く文化として残していきたいという夢がある。だからこそ事業化をしたいと考えており、リメイクしたキャンドルで作るキャンドルホルダーの販売を始めた。全国の結婚式場や寺院、個人から不要になったロウソクを提供してもらい、気仙沼のお母さん達が再形成して復興キャンドルホルダー「TOMOCAN」を作成している。この売り上げの一部はお母さん達の収入となり、地元の雇用につながる仕組みだ。

ずっとボランティアで続けていくには人的、資金的な面から必ず無理がくる。気仙沼に工房を立ち上げて、そこに雇用が生まれ、これを生業にして暮らす人が生まれたら、100年後僕は死んでいるけれども11日にキャンドルに火が灯る。この文化を知らない人が見て、なぜ気仙沼のあちこちで11日にキャンドルに火が灯るのかと聞かれた時、2011年3月11日に大震災があったと語られる。そうして大震災の事が後々まで伝わるよう、感性に訴えるアートの形式で後世に残していきたい。たくさんの石碑や文面で昔の震災に関する記録が残っていたけれど、堅苦しく、普段から一般人が接する事はない。だから多くの人が忘れてしまったのではないだろうか。長くこの記憶を残していくためには、もっと違う形が必要だと考え、出した結論が綺麗で楽しみながら参加できるこのスタイルだった。

離れていても東北に何かしたいと皆が思っているからこそ、ともしびプロジェクトは全国に広がった。これは多くの人の想いを形にできるプロジェクトだと思っている。

東北に来てきっかけをもらった

自分が人との間に壁を作らない性格なので、活動中に人との壁を感じた事はあまりない。向こうが合わないなら仕方がない、と割り切っている。人

との出会いや連携はタイミングもあると思うが、僕は運が良く、幸いにも大震災後の活動はうまくかみ合っている。その中で、分からない事は分からないと言う事にしている。聞いてはいけないだろうかと遠慮すると、かえって壁ができてしまうので、正直に声を出してみる事が大事だと思っている。

僕自身は「ボランティア」や「支援している」という感覚は持っていない。最初はボランティアだと思っていたが、すぐにその感覚はなくなり、逆に今はキャンドルに火を灯すきっかけをもらったと思っている。100年200年続く文化にしたいという目標ができて、それを一緒に目指すメンバーがいて、今は本当に面白い。だから活動を続けられているのだと思う。



撮影：2013.5.27 宮城県気仙沼市 TOMOCAN作成風景



撮影：2013.2.27 ともしびプロジェクト ボランティア

企業

次世代を想い、10年後の未来を思い描きながら

大崎市

山田 好恵 株式会社一ノ蔵

取材日 2013.06.12

可能な限り復興支援に携わりたいと、故郷石巻市と勤務地大崎市の両方のエリアに軸足を置き、個人では門脇小学校への支援（アートチャリティ展）、仮設住宅との交流、東北グランマ支援、ベガルタレディース活動支援に取り組み、株式会社一ノ蔵の社員としても「ハタチ基金」への寄附継続、大崎ふゆみずたんぼ広め隊としての活動を行なっている。

3月11日 14時46分

会社にいる時に地震にあった。会社は鉄筋コンクリートの4階建てだ。震度7の地震には耐えられる建物だと頃から言われていたが、事務所でいろいろな物が倒れ、このままでは建物が崩れるのではないかと命の危機を感じた。ようやく揺れが収まり、上履きのまま外へ避難した。日頃の訓練のおかげで社員がパニックになる事はなかった。その時は役員が全員外出しており、製造顧問がトップであったので顧問が先導し、管理職が中心となって担当部署の社員の安否確認をした。製品課は特に女性社員が多く、子どもの安否を心配して早く帰りたい様子だった。その日は管理職と蔵人の一部社員が会社に残り、他の社員を帰宅させ、管理職は翌朝8時半に集合する事を決めた。私は当時中学2年生の娘が心配で、何としても早く石巻市にある自宅に帰らねばと思った。車中から娘の通う中学校に電話をかけ続けたがつかない。いつも通っている道路は交通規制で通る事ができず、遠回りをする事になった。普段は家から会社まで片道約1時間かけて通勤しているのだが、地震で道路がボコボコで、その日は約4時間かかった。すでに19時を過ぎていて辺りは真っ暗だ。娘を探しに行かなければの一心で運転し、三角コーンを無視しながら近道をしたら、車のライトの先に人が動いているのが見えた。よく見ると、その人達は腰まで水に浸かりながら「下がれ！」と私に合図をしている。私はやっと津波に気づき、車をバックした。車中では電話を続けていたのでラジオを聞いておらず、津波の事を全く知らなかったのだ。車は高台の、津波が寄せて来ているぎりぎりの場所に入ってしまった。多くの人が車を乗り捨てていたので、私もバイパスの下に乗り捨てた。歩いて帰るしかないと思ったが、道はすべて水で塞がれている。月が煌々と照らす夜空からは無情の雪が降り続き、自分の家がある方向を見ると火の手が上がっていた。近くにいた方に聞くと、「門脇町の日本製紙工場だ。火が日和山に移ろうとしていて、日和山も危ない



らしい」と教えてもらった。家が日和山にあるので、「津波は大丈夫だっただろうけれど、私の家も火事で燃えちゃうんだ」と思った。そう思うとますます娘が心配になり、生まれて初めて絶望感を味わった。雪が舞う氷点下の道端で右往左往したが、行く当てもなく、なす術もなかった。娘の安否を確認しなければという思いだけが頭にあり、避難所へ行こうなどとは思いつきもしなかった。

「生かされた」という重み

夜が明け、辺りの惨状が見えるようになった。水の近くまで行くと、まだ水に浸かっている人もいるし、多くの瓦礫が漂っている。漏電だろうか、あちこちの民家で火災が起きていた。路頭に迷っていると、知り合いの建設会社の方が「雪も降っていて寒いし、私のところにいたらどうですか」と声をかけてくれた。炊き出しのお手伝いをしながら、「何とか家に帰りたんだけど、何とかならないかな」と聞くと、「何ともならないね。家に帰るまで1週間くらいはかかるんじゃないかな」と言われ、1週間も娘の安否が分からないままでは気が狂いそうになると思った。地震から3日目の朝、水が引けてきたので、自衛隊車両が入れるように道路の瓦礫を重機で排除しながら、娘の通う中学校までの道を作ると聞い

た。乗って行くかと声をかけてもらい、「乗ります」と即答した。昼にはやっと家へ帰る事ができた。家族からその間の事を聞くと、門脇町に実家があった義母は早めに逃げて助かり、その後私達の家に避難して来たが、義父は津波が来るとは思わずに逃げ遅れたそうだ。ご近所の男性達は「チリ津波の時に津波が来なかったから大丈夫だ」と、家の片づけのため家に残った人も多かったと聞いた。

それから1週間、私は海の近くに住む兄弟や知合いの安否確認、食料調達や近所の避難所に洋服を届ける事に必死だった。とにかく助かった人だけでも生き延びなければならない。電気が通って携帯電話が使えるようになった時、100通以上のメールや着信履歴があった。会社で最後まで連絡が取れなかった社員が私だったらしい。石巻に住んでいるので、津波被害にあったのではないかと皆が心配したようだ。「生きていますか?!生きていたら連絡をください!」など、すごい内容のメールが届いていた。自分は無事である事を知らせ、身内の安否を確認してから出社したいとお願いした。

ものすごい数の避難者で、自分1人の力ではどうにもならないと感じたが、それでも何かをせずにはいられなかった。地震から3日目の朝、重機に乗せてもらい石巻中学校まで向かった時、大街道では大量の瓦礫の間にご遺体が浮かんでいたのを見た。おそらくご家族を探されているのだろう、腰まで泥水に浸かりながら、あの寒さの中何百人もの人が疲れきった表情で歩いている姿を見た。あの光景を見た時、私は雪で服が濡れたり、飛んできた火の粉でコートが焦げたりしたけれども、家に帰る事ができる。私は生かされたという重みを感じた。生かされたからには何かしなければならないミッションがあると思った。娘の安全が確認できてからは、今度は大変な方々のために動こうと、すぐに気持ちが切り替わった。

3.11 未来へつなぐバトン

10日目に入社し、しばらくは会社の復旧作業に追われた。すぐに、何かできる事をしようという話になった。震災前から一ノ蔵には「社会貢献クラブ」があり、マッチングギフトという活動をしている。社員が選んだ寄付先に毎月給料から何口（一口100円）でも自由に寄付できる活動だ。だから、この会社には寄付をする文化が醸成されていたように思う。全国各地からさまざまなご支援をいただき、お返しをしなければという機運がだんだんに盛り上がった。

酒屋なのでご支援をいただいた方々に特別なお酒を造って差し上げ、復旧した様子を伝えるアイデ



一ノ蔵 特別純米生原酒 3.11 未来へつなぐバトン

アもあったが、私はそうした単なるお返しは少し違うように感じた。もっと視野を大きく捉え、私達が受けた御恩をさらに困っている皆さんにお渡しする形で循環させたらどうだろうと提案した。2012年3月11日に間に合うようにお酒を仕込み、その全売り上げをしかるべきところに寄付する事になった。それが「3.11 未来へつなぐバトン」という商品だ。被災した時、正直、この会社はもう駄目だろうと思った。しかし、ダメージを負いながらも無事復活した。さまざまなご支援をいただいて、立派に酒造りができるまでに復旧し、いただいたご支援は違う形で他の大変な方々にバトンタッチするという意味を込めて商品を企画した。また、大震災によってずたずたになってしまった故郷を、私達がこれから子ども達に渡さなければならないと考えた時に、酒屋だからといって酒を飲む成人以上だけを対象とする活動にすべきではないと思った。私達の醸造発酵技術を活かしたものづくりで子ども達のために商品開発をしたいという想いから「3.11 未来へつなぐバトン」ができた。この商品は営業活動をしてからわずか3日で予約完売した。この業界ではあり得ない事だ。それだけ多くの方が共感してくださったのだと思う。一ノ蔵の売り上げ全額は「ハタチ基金」に寄付をした。

企業人として復興に携わる

平日は会社で働き、週末は個人で地元NPOと連携してボランティア活動をした。東京からお芝居をする方を呼んで、無料でお芝居をしていただいたり、首都圏からの視察学習のコーディネートをした。また、チャリティー展を開催し、売り上げを門脇小学校の文房具を買うための資金として寄付をした。今後石巻市がどう変わっていくべきなのか情報を共有するために石巻都市学会に入り、

情報を集めた。2012年、ベガルタレディースが設立される事になって、スポーツを通して子ども達を元気にする事ができないかと思い、理事に就任した。子ども達がなでしこの選手達にサッカーを教わって、スポーツ選手と触れ合うことで、心に温かさが灯れればと願い、活動を続けている。

また、オーガニックコットンメーカーの株式会社アバンティ代表取締役の渡邊智恵子さんが「東北グランマのクリスマスオーナメント」※¹という復興プロジェクトを立ち上げたと聞いて、地元なので手伝わせてほしいとすぐに連絡を取った。それから1年間かかったが、幸せお守りをベガルタの応援グッズとして販売する事が決まった。さらに、「東北グランマのクリスマスオーナメント」活動をもっと地元の方々に知ってほしい、グランマたちは仮設住宅にこもって手仕事をしているのでたまには仙台に出てきてほしいと思い、仙台でワークショップを開催した。仙台市泉区のショッピングプラザ「SELVA（セルバ）」のご協力、センターコートは無償で貸していただき、グランマ達が子ども達と、あるいは親子と一緒にクリスマスオーナメントを作るワークショップをした。これは河北新報にも取り上げていただいたので、ある程度地元の方々に活動を周知できたと思う。首都圏主導で被災地に向けて支援をしてくださっている方々に協力し、地元での支援係として自分は動けると感じた。

1年ほど経過した頃、いろいろな事をやりすぎて体力も気力も資金も無くなってしまい、土日の活動は少し抑えなければと感じた。震災直後はあれほど娘を心配したのに、今は娘を放って土日も活動をしている。「土日のどちらかは家にいて」と娘に言われた事もあり、週末は身体を休め、家族との時間を大切に過ごす事にした。

それからは、企業人である自分の立場を最大限活用して、被災地、社会が抱えている課題を解決していこうと考え、働き方を切り替えた。被災地にある企業なので、被災地の抱える課題をビジネスで解決できればベストだと思っている。

※1 「東北グランマのクリスマスオーナメント」…震災で仕事を失った漁師のお母さん達（東北グランマ）が、オーガニックコットンの残布（ざんぷ：裁断後に余った布）で手作りのクリスマスオーナメントを皆さんに買ってもらい、東北グランマ達を応援するプロジェクト。

20年続ける支援を

私達がいただいたご支援を感謝の気持ちに変えて、2年目も「3.11未来へつなぐバトン」を続けたいと考えた。震災はどんどん風化してしまう。

我々も被災した企業ではあるけれども、せっかくハタチ基金に寄付をするのだから、2011年に生まれた子ども達が成人するまで20年間続けようと提案した。会議では20年間も全売り上げ寄付を継続する事に反対する意見もあったが、寄付額は売り上げの半額でも30%でもいい、続ける事が大切だと訴えた。子ども達のために20年間、こうした商品を世に出し続けた事は私達の誇りにつながるし、こうした企業活動がどんどん広がってほしい。「とにかく取り組む事を決断しましょう」と促した。

結果、「3.11未来へつなぐバトン」を20年間続ける事が決定した。原料米を検討していた折、宮城県大崎市のふゆみずたんぼ※²で飯米を作っていた農家さんが風評被害を受けている事を知った。震災以前は首都圏のお客様への直接販売で生計が成り立っていたが、キャンセルが相次ぎ、このままでは生計が立ち行かなくなると苦悩していた。一ノ蔵では「特別純米酒ふゆ・みず・たんぼ 一ノ蔵」という商品を出しており、地元農家さんには大変お世話になっている。風評被害を今すぐ食い止める事はできないけれども、安全だと証明されたのならば、その原料米を買い取って「3.11未来へつなぐバトン」のお酒を作ったかどうかと会社へ提案し、2012年の酒造りにつながった。たった1軒の農家さんのお米ではあるが、ふゆみずたんぼの生産組合の方々からは「風評被害で苦しんでいる農家さんが多い中で、ふゆみずたんぼを助けていただいた事は自分達の誇りになる」と感謝のお言葉をいただいた。こうした農業支援のあり方も存在するのだと勉強になった。「特別純米酒ふゆ・みず・たんぼ 一ノ蔵」はとても人気のあるお酒だ。農家さんにもっとモチベーションを上げてお米を作ってもらうためには、我々がこの商品を増産していく必要があると考えている。今は秋以降に数量限定で出しているが、ゆくゆくは1年間市場に流通させたい。こうした企業活動を通して、多くのお客様に周知していくミッションがあると思っている。

2013年2月には、ドイツで開かれたBioFach（ビオファ）※³へふゆみずたんぼのお米とお酒を持って出展した。ふゆみずたんぼができあがる田んぼの風景を収めたDVDを持って行った。ヨーロッパと日本の稲作は全く違うし、米の品種も違う。ヨーロッパの人達は自分達の考えている稲作とは全く違う、そして生き物と共生する日本の稲作に非常に関心を抱き、「それで作ったお米がこの酒になるのか、素晴らしい」と共感を得る事ができた。また日本は大震災でめちゃくちゃになってしまったと思っている方も多かったので、農村風景が美しく残る東北へ遊びに来てほしいとアピールをしてきた。

※2 ふゆみずたんぼ…冬期湛水水田。冬の間も田んぼに水を貼り、田んぼに生きる原生生物や水鳥など多様な生き物の力を借りて無農薬・無化学肥料で米作りを行なう農法。

※3 BioFach（ビオファ）…ドイツ語で「オーガニック専門」の意。ドイツで20年前に始まったオーガニック展で、現在では世界最大のオーガニック・ナチュラル関連製品展示会。

自ら復興者になる思いを持って

これまで首都圏主導で復興へアプローチする取り組みが多く行なわれてきたが、これからはフェーズで変わってくるだろうし、各地では温度差が生じているように感じる。風化していく事が課題だ。いつまでも首都圏頼みではいけない。小さな取り組みでも自分達が情報を発信して、経済の活性化につながるように取り組んでいかなければいけないと思っている。これまで作ってきたご縁を大事にしながらも、被災者自らが復興者になる心意気を忘れずに活動したい。

震災後に、認定NPO法人女子教育奨励会（JKSK）が主催する「結結（ゆいゆい）プロジェクト車座」^{※4}に3回参加した。石巻の他、南三陸、大崎、気仙沼など、それぞれのエリアで抱える課題に触れ、その課題に真摯に取り組む多くの仲間を得た。また首都圏メンバーから寄せられる無私の協力、後押しは何より心強い。東京新聞、河北新報の各誌面で「東北復興日記」と題して、復興に取り組む姿を記事発信し、多くの方々に紹介する形でつながりが今も続いている事には感謝を忘れずにいたい。

震災から2年が過ぎて、3年目を迎えた。精神的にも疲れが出てくる頃だ。疲れる事は仕方ないと思うが、決して方向性を見誤る事がないように、ゴールはどこにあるのかを常に意識して仕事をすべきだと、課題としていつも意識している。震災特需で売り上げが伸びたが、この時期にきて沈静化している。企業なので利益を追求するために「支援」「寄付」から離れて、売り上げ回復に躍起となるかもしれない。それもビジネスには必要だが、より地域、地元に着目した一ノ蔵らしい商品企画や情報発信がますます重要になってくると思う。そのために大切なのは「構想力を磨く」事だ。アイデアをどんどんブラッシュアップして、会社の貢献にもつながりかつ社会貢献にもつながる働き方、あるいは商品の打ち出し方を常に考えていかなければならない。今後は私だけ、一ノ蔵だけ、ではなく、多くの方々と協働する事が大切になると思うので、ますますネットワークを広げていきたいし、そのネットワークを強力にしていきたい。



幸せ御守（株式会社アバンティ提供）

とにかく大事なのは「継続する」事だと思う。復興を果たせたと考えるまで、続ける事が必要だと思っている。本当は復興のステージに入っていないかもしれない時期だと思うが、女川、雄勝、石巻、陸前高田など津波による甚大な被害を受けたところに足を運ぶと、瓦礫が無くなっただけで、あまり復興が進んでいるとは実感できない。時々、娘を連れて各地を訪れる。非常に大変だった時がフラッシュバックしてとても苦しい思いをするが、それでもこの心の痛みを忘れてはいけないと思っている。なぜ私達の故郷にこうした事が起こったのかと恨み言を並べるのではなく、もし他地域で大きな災害が起きた時に私達の体験が他地域の参考になればよいと思っている。そのために軸になる思いを持って、その思いがぶれないように時々被災地を訪れて振り返りながら仕事をしていきたい。

※4 認定NPO法人女子教育奨励会（JKSK）「結結（ゆいゆい）プロジェクト」…東日本大震災を機に、東北の女性リーダー達が持てる能力を存分に発揮し、取り組もうとしている復興活動を首都圏のエキスパートと共に考え、共に支援・協力・応援をしていくために立ち上げられたプロジェクト。

大震災を振り返って

義理の父を亡くし、多くの友人知人を見送った。47歳にして人生観が大きく変わった出来事だった。働き方に対する考え方が大きく変わったし、経済ありきの幸せのもののさが実は間違っていた事に気づかされた。個人だけの欲望にお金を使うのではなく、一部を他の人に回す事によって自分というちっぽけな人間でも人様の役に立つと実感できた。思い出せば泣けてくる事はたくさんあるし、いまだに被災地を訪れば涙も出るが、それらの痛みはこれからここをどうすれば良くできるのかとアイデアに変えていかなければならないと

思うようになった。「負けないぞ」の気持ちでいようと思っている。自然界にとっては摂理であるし、文明の利器で跳ね返すのではなく、自然とうまく寄り添って生きていくためには、私達人間がどうあるべきなのか、人と人のつながりはどうあるべきなのかと考えさせられた。

私が会社で働けるのはあと10年だと思っているが、自分の働き方をソーシャルビジネスとしてシフトしようと決めた時から目標が2つある。一ノ蔵の商品を使って寄付文化を醸成する事と、エシカル消費を促進する事だ。「消費行動を変えるマーケティング」を自分の仕事の軸に置きたいと考えている。私は一ノ蔵の社長ではないが、一ノ蔵のこうありたい姿として「10年後、一ノ蔵はその事業や商品を通じて、地域社会の抱える課題解決を目指して、希望を生み出せる企業」を思い描いている。



ドイツ ニュルンベルク オーガニック・ナチュラル関連製品展示会「BioFach (ビオファ)」



撮影：2011.3.11 宮城県大崎市（千田信良さん提供）



燃料を重機へ供給した（千田信良さん提供）



撮影：2011.5.14 宮城県大崎市
菜の花フェスティバルinおおさき（千田信良さん提供）



地域のリーダーを育てたい想いから積極的に
見学受入を行なっている（千田信良さん提供）

企業

菜の花でつながる縁

大崎市

千田 信良 有限会社千田清掃

取材日 2013.07.17

有限会社千田清掃代表取締役。「時代をリードする創造的企業として社会に貢献しつつ会社の繁栄と社員の幸せを実現する。」を経営理念として掲げ、他にも宮城県環境教育リーダーやおおさきバイオエネルギー協議会の理事兼事務局長を務めるなど、環境や地域貢献をライフワークとし活動している。

3月11日 14時46分

宮城県大崎市内の病院の、2階の病室にいる時に地震が来た。多忙な業務で体調を崩し、数日前より入院していたのだ。「また地震か」と思っていたら、徐々に揺れが激しくなった。点滴を受けていたので、外れないように押さえ、ベッドにしがみついた。ところが、揺れはとても大きく、6人部屋のベッドやテレビ台同士が激しくぶつかり合った。経験した事のない揺れは非常に長く続き、いつ終わるのだろうかという恐怖を覚えた。

すぐに停電したが、病院には非常用電源（発電機）が完備されている。しかし、日頃から動かしていないためか、よく止まった。燃料も十分にはないようで、発電機屋さんと病院のスタッフが燃料調達のため必死に連絡を取っている。私はただ事ではないと感じて、すぐに携帯電話のワンセグをつけた。

津波の映像を目の当たりにし、言葉を失った。過去の災害の話は聞かされていたけれど、まさか自分が生きている時代にこうした悲劇が起きるのかと目を疑った。宮城県女川町や石巻市、塩竈市にいる親戚の安否が気になって仕方がなかった。携帯電話のワンセグから得た情報を看護師や病院スタッフの皆さんに伝えた。

大崎市の緊急災害給油基地に

約2週間の入院と言われていたが、翌日、退院を申し出て許可をもらった。現場の先頭に立つて指揮しなければならなかったからだ。2007年の新潟県中越沖地震でバキュームカーを派遣したボランティアの経験があったので、すぐに大崎市の災害対策本部へ向かい、自分達の業界がどう対応をするか情報を共有した。

停電になった時、すぐにBDF（Bio Diesel Fuel：バイオディーゼル燃料）が役に立つと感じた。電気工事経験のある社員が、所有しているディーゼル発電機から事務所の電源を確保した。また、震災の起こる5日前にBDFを精製する新プラント



が完成したばかりで被害が最小限だった。そこで、想定される燃料需要に備えて、ディーゼル発電機でBDFを製造した。さらに弊社は特殊なB5という、軽油と5%のBDFを混合した燃料を扱っているため、原料となる軽油が地下タンクに10kl備蓄してあった。多くのガソリンスタンドがポンプを手押ししていた時に、ディーゼル発電機からポンプを回す電源を確保する事もできた。その旨をすぐに市長に申し出ると、大崎市の緊急災害給油基地・燃料保管基地として位置づけられた。発電機を持つ病院や浄水場、下水処理場などへ優先的に燃料を提供し、公用車等緊急車両、沿岸部の同業者にも給油活動を行なった。また、沿岸部では地元処理業者が被災したため、各地で避難所に設置された仮設トイレが使用できなくなる事態が発生した。そこでBDFを給油した自社のバキュームカー2台を被災地各地に運行させ、山形県の各市町村の処理場へ搬送した。震災から2週間ほどが経過し、全国各地からバキュームカー60台などの支援車両が応援に来た。弊社の車両をBDFで走らせながら、宮城県塩竈市、多賀城市、石巻市、気仙沼市の同業者に燃料を配達したり、沿岸部の同業者が取りに来たり、うまく中継基地になる事ができたと感じる。BDF、B5、新プラントの施設があったからこそさまざまな連携につながり、沿岸部をバックアップできた。

原料や燃料が集中するコンビナートが沿岸部に多

く立地しているの、リスクを分散する意図で、内陸部にもコンビナートがあってもよいのではないかと感じた。

震災から5日目に女川町へ

震災から5日目、親戚の救助のために宮城県女川町へ行った。ほとんど情報がなかったので、現地へ行ってみるしかないと思った。自衛隊出身の社員を連れて、まだ雪が降ることもあったので防寒対策を万全にし、車にBDFを積んで準備したが、途中から歩く覚悟をしていた。石巻が近づくにつれて悲惨な光景が現れた。私は戦争を経験していないが、焼け野原のように見るも無残な景色が広がっていた。何も残っていないが、そこら中に確かに生活していた跡がたくさん残っていた。親戚は大丈夫だろうかと不安がよぎった。

女川町立病院までは車で直接行く事ができた。自衛隊が道路を復旧したのかと思ったが、驚くべき事に地元の方々が自衛隊の応援が来るように道路の瓦礫を撤去したそう。病院では誰がどこの避難所にいるかを書いた貼紙があった。必死で親戚の名前を探し、女川町立体育館にいる事が分かった。避難所となった体育館はおそらく広いのだろうが、1人1畳もないほど狭い範囲に大人が何人も身体を寄せ合って暖を取っていた。体育館に親戚がいる事は分かったが、その混乱の中で探すのも大変だった。ようやく70歳を過ぎた叔父と叔母を見つけ出し、いとも運よく助かった事が分かった。消防団であるいとこの話を聞くと、高台になっている女川町立病院に逃げ込んだが、1階まで津波が来たそう。水がどんどん上がってきたと言う。女川には何度も足を運び、親戚を通じて物資支援をした。避難所には水や毛布はあったが、多くの人が着の身着のまま避難しているので、歯ブラシのような細やかな物資が大変喜ばれた。今回は自衛隊の動きが早かったのではないかと感じる。初めて女川に行った時にはすでに自衛隊が来ていた。ヘリコプターから救援物資をグラウンドに降ろす作業を目の当たりにして、「日本は捨てたもんじゃない、生かされた自分は頑張らねば」と思った。

田舎と都市の違い

大崎市は10日ほど停電したが、都市ガスはずっと止まらなかった。また、田舎なので親戚に農家がいるし、年配女性の方々の保存の知恵を持ち寄って、1週間は食料に困る事はなかった。そうした面ではコンビニエンスストアに都市型難民が殺到した仙台市内よりも強かったと思う。あの頃はどの地域でもガソリンが無かったが、う



撮影：2011.3.23 宮城県大崎市 全国各地から応援に来た支援車両

ちはBDF用のディーゼル車と燃料があったので、鳴子温泉にも行く事ができた。また、親戚に頼んで山形県に食料を調達しに行ってもらって社員に分配し、ビニールハウスで炊き出しを行なった。

菜の花でつながる縁

2011年5月14日、復興支援イベント「菜の花フェスティバルinおおさき」を鳴子温泉郷・川渡で開催した。震災後、鳴子温泉地域にはピーク時で約1,000人以上の沿岸部の方々が2次避難をされており、その方々と大崎市全体を励ましたいと思ったからだ。

亡き父が旧志津川町の警察署長を務めており、初めて志津川を訪れた時に「昔、津波があったんだよ」と聞かされた。小さいながらも「こんな大きな堤防は見た事がないな」と、津波の事を意識した。また、実姉（杜けあきさん）が宝塚に入った時に志津川の皆さんがパレードをして地元をあげて応援してくれた。そうした経験から「何か恩返しをしたい」という想いが募り、自分が志津川のためにできる事は何なのだろうと考えた。

外の菜の花畑で少しでも楽しんでもらおうと思った。姉とも相談し、いろいろな人に声をかけて、素晴らしいイベントができあがったと思う。ゲストには姉の杜けあき、さとう宗幸さんを迎え、自衛隊音楽隊による演奏や熱気球に乗って空からの菜の花畑鑑賞会や菜の花料理の試食、地元の企業やボランティアによる炊き出しなどが行なわれた。当日は避難者や地元住民などあわせて約1,500人が来場した。最後に来場者の方から「本当にありがとう」と言われたのが一番印象に残っている。菜の花を通じて被災者の皆さんの心に絆が生まれたのではないかと感じる。毎年続けようと、今年も開催した。

また、大崎市や東北大学と連携して、菜の花を通

じた循環型社会を目指す「菜の花プロジェクト」に参加し、津波で塩害の被害を受けた農地や、放射線で耕作できなくなってしまった農地の再生プロジェクトを行なっている。役割分担を行ない、弊社は刈り取り作業、種選別や搾油作業が担当だ。種にセシウムは移行しないそうで、絞った油は安全なので、これから福島県の農地をどう再生させるかが課題となる中でBDFが有効ではないかと考えている。

BDFの原料となる菜の花でさまざまなつながりができ、いろいろな方々のご縁があった。菜の花プロジェクトに出会っていなければ「菜の花フェスティバルinおおさき」「菜の花プロジェクト」にもつながらなかった。BDF事業を展開していて本当によかったと感じている。

BDFの普及における課題

BDFの普及がなかなか進まなかったのは、粗悪なBDFが多かったからだと思う。弊社では分析室があり、品質にこだわったBDFを製造している。これまで高品質のBDFを作るにはどうすれば良いのが課題だったが、それはクリアした。次はどうコストダウンするかが課題だ。品質マニュアルをきちんと確立して、コストダウンを考えていきたい。

また、まだまだBDFの認知度が低いことも課題だ。そのため、県より宮城県環境教育リーダーの委嘱を受け、依頼があれば積極的に小学校をはじめとする教育現場へ環境出前講座に行っている。また、高校生のインターンシップや地域の団体の視察の受け入れを積極的に行なっている。2012年9月にも韓国の大学生30名が来てくれ、弊社のプラントなどの施設見学が行なわれた。「地球環境に国境はない」と話をさせていただき、心の通った良い視察研修になったのではないと思う。

こうした努力の甲斐あってか、廃食用油の回収量はどんどん増えており、BDFは大手ゼネコンの災害廃棄物処理施設の建設重機や発電機、破碎機の燃料としても使用されている。まだまだ始まったばかりではあるが、CSRやISOの観点から「うちの営業車やトラックに使いたい」と問い合わせも来ている。

大震災を振り返って

震災を機に再生可能エネルギーに対する社会の認識は大いに変わった。自分も変わるきっかけになった。2013年3月、「おおさき未来エネルギー株式会社」が誕生した。太陽光やバイオマスなどの自然エネルギーを利用した発電・発熱業務およ

び電力・熱・燃料の販売を目的とした会社だ。大崎市の再生可能エネルギーの勉強会をきっかけにプロジェクトチームが発足して、市内の企業の代表取締役が集まって発起人となり、会社設立に至った。エネルギーの地産地消に取り組もうとしている。現在、メガソーラーの建設に向けて準備中だ。将来的には地域の皆さんに出資していただき、市民ファンドを作りたい。その配当を地域の地場産品や鳴子温泉宿泊券にする事で、地域の絆を深めるきっかけを提供し、地域に貢献する事を最大の目的に考えている。

また、いかにリーダーを発掘して育てていくかが非常に重要だと感じた。成功の反対は失敗ではなく、何もしない事だ。リーダーは聞き上手になり、いかに多様な意見をまとめ、つなげるかが鍵になると思う。家族は家族でお父さんが守らなければならないし、会社は会社で社長が先頭に立って、社員を守らなければならない。どこかの誰かがしてくれるわけではないのだから、皆で協力していくべきだ。若い人には故郷を思っただけで働く場所を作ってあげたいと思う。「世のため、人のため、地球のため」にコミュニティ、人のつながりやご縁をもっと意識して、ライフワーク、ビジネスにつなげ、この地域を引っ張っていきたい。



撮影：2011.5.14 宮城県大崎市 菜の花フェスティバルinおおさき

個人

寒風沢へ来て、島の現状を見て欲しい

塩竈市

外川 晴信、外川 栄子、長南 正義 個人

取材日 2013.07.17

外川氏は民宿経営・漁師、長南氏は漁師をしている。寒風沢は宮城県塩竈市浦戸諸島最大の島。江戸時代に伊達藩の江戸廻米の港として栄え、当時の繁栄の歴史が語り継がれた文化財の指定も多い。産業は漁業、農業や観光（民宿等）。東日本大震災では島ならではのコミュニティと循環が活かされ、救援が来るまでの約1週間を凌いだ。

3月11日 14時46分

【外川さん（栄）】外にいる時、ものすごく強い揺れの地震が来た。1978年の宮城県沖地震を経験したが、その時の揺れとは比べ物にならない揺れだ。「これは尋常ではない」と思った。家にいる母が心配になり、家まで走った。道路脇の電信柱は柳のように揺れている。自宅前にあった島唯一の商店が地震で倒壊していた。状況が良く分からず、無我夢中で家に戻ると、茶箆筒が母の上に倒れそうになっていた。地震が来る前にたまたま付けた家具転倒防止チェーンがなかったら危なかったと思う。

津波を経験した事はなかったが「津波が来るかもしれない」と感じた。位牌と権利書を持ち、すぐに母と近所のおじいさんと一緒に避難所へ向かった。近くの避難所の旧浦戸第一小学校は水道や電気がないので、おじいさんの事を考え、別の避難所であるお寺を選んだ。ところが避難所へ向かう途中、第一波なのだろうか、真っ白い波が見えた。津波を初めて見たからか、夢中だったからなのか、不思議と恐怖心は無かった。真っ白い波を見て「危ない！」と感じ、危機一髪で津波から逃れた。今考えると本当にあと何十秒かの違いで危なかったと思う。

【長南さん】海の上で牡蠣収穫の最中だった。30ケースほどの収穫が終わり、すでに終盤だ。少しぐらぐらと揺れたので、最初は「地震だな。結構大きいかな」と思った。すると、海がぼこぼここと沸騰してきた。地震の揺れでさざ波のように海が波立ってきたのだ。これまでそうした海の様子を見た事がなかったので「おかしいな」と感じた。その瞬間にぐらっぐらっと大きな揺れが来た。内湾では支柱柵式で、船を竹の支柱にくくって牡蠣を獲っている。支柱につないでいる時に大きな地震が来ると、船と一緒に海に巻き込まれてしまうので、すぐにもやい綱（支柱と船とつなぐ綱）を切らなければならない。そのまま船をもやっている（つないでいる）と、揺すられて根こそぎ持っ



外川 晴信さん

ていかれるからだ。いかだも牡蠣の種も海に沈んでしまった。船がぐっと引っ張られたので「このままでは危ない」と思い、もやい綱を切った。周りを見渡すと崖が崩れている。1978年の宮城県沖地震を経験しているが、このような揺れは経験した事がない。怖かった。「おどげでねえ事が起こる（大変な事が起こる）」と感じたので、揺れが収まって、船に積んでいた牡蠣をすべて海に捨てた。家で作業をしている女性たちが心配になり、急いで帰った。陸に帰ってきた時には岸壁が1m近く地盤沈下していた。「絶対に津波が来る」と感じた。家に戻って、位牌と防寒用のレインウェアを持ち、高台に避難した。

【外川さん（栄）】高台にある旧浦戸第一小学校に避難し、入り江に何度も津波が来ているのを見た。地震から津波が来るまで30分くらいだったと思う。第一波は真っ白いきれいな波だったが、この辺りでは第二波が大きく、後の波は全て真っ黒だった。栈橋は津波にさらわれてしまい、防潮堤の上には知り合いの船が乗っかっていた。多くの島民がすぐに高台に避難したが、船を安全な場所に移すため海に出た方がいて、波の渦に巻き込まれてしまった。私達は助ける事もできず、高台から見ているしかなかった。その方はたまたま浮遊物につかまる事ができて助かった。また、避難し

てから葉を取りに家に戻り、津波に巻き込まれ、たまたま山に流されて助かった人もいます。

島ならではのコミュニティと循環

【外川さん（栄）】寒風沢は北区、中区、南区に分かれている。地震の翌日、明るくなってから消防団が様子を見に行った。消防団の皆が「南は全部無くなったんだ、何もねえ」と言ったのを聞いて「きっと海沿いに建っている自宅は無くなってしまったんだ。夫が不在だから、消防団の人、気を遣ってうちのこと言わないんだな」と思った。

【外川さん】地震が来た時は鳴子にいて、3日目に寒風沢へ帰ってきた。塩竈から寒風沢まで出る船はなかったので、松島にある姉の家へ行って船を借りた。

【外川さん（栄）】3日目に自宅へ戻ると、奇跡的に家が残っていた。もちろん家の周辺や家の中はヘドロや瓦礫だらけだ。ワカメの作業場の上にはどこかの家の2階部分が乗っかり、自宅前の道路にも流されてきた家の2階部分がほとんど落ちていた。

【外川さん】自衛隊が来たのは、地震から1週間くらいたってからだ。寒風沢では電気も水道もストップしたが、皆で協力して食べ物を持ち寄り、不自由する事はなかった。米やみそ、野菜は自分で作っている。備蓄まではいかないと思うが、1年間は食べていける米やみそなどが取ってある。津波で濡れてしまったが、家に米はあったので避難所に持って行って皆で食べた。また、冷蔵庫や冷凍庫は開けなければ1週間ほど中の食材が大丈夫なようだ。プロパンガスのボンベを煮炊きに使い、島ではガソリンや灯油をドラム缶で買っている。瓦礫の中から探し出して1か所に集め皆で使った。しかし、水には困った。塩水を真水に変える装置が島にあるが、飲むのは抵抗がある。洗い物などに使用し、防火用井水にストックしていた水を飲料水に使った。

【長南さん】島ではほとんどの家が漁業をしているので、各家庭に冷凍庫が必ずあり、家で魚を冷凍している。私の家でもその日まで牡蠣剥きをしていたし、米は作っている。食生活には困らなかった。島というコミュニティで成り立っている。もちろん非常時にはいろいろな人間模様が見えた。それは仕方ない事だと思うが、それらをまとめるリーダーは本当に大変だと思う。

【外川さん（栄）】自衛隊が来るまで島ならではの



外川 栄子さん

循環が活きたと思う。避難所でも普段と変わらない温かいおにぎりやみそ汁をいただいた。電話はつながらなかったものの、大きな発電機があったので、体育館に電気を引っ張って、テレビを見る事もできた。非常時には島の方が良いところもあるのではないかと考えた。

【外川さん】1週間以上、島民全員でご遺体の確認をした。船が残っていたので海は瓦礫だらけだったが、船で塩竈市の市役所へ行って寒風沢の様子を報告した。地震から1週間くらい経ち、自衛隊がヘリコプターで食料を運んでくれた。また、ホバークラフトで迎えに来て、沖に停泊している輸送船のブルーシートで作ったお風呂に入らせてくれた。お風呂には1ヶ月以上入る事ができなかった。久しぶりに入ったお風呂は極楽だった。ありがたいと思った。自衛隊は1ヶ月以上、島で捜索をしていたと思う。

10日ほどで避難所から自分の家へ戻った人もいます。片づけのため家に帰る人、発電機を買ってきて自分で電気を確保する人もいた。うちも自宅2階は大丈夫だったので、2階で寝泊まりし、朝晩は避難所にご飯を食べに行った。電気は復旧まで1ヶ月以上かかり、水道は2ヶ月近くかかった。2ヶ月ほどが経過し、だんだんとボランティアが来るようになった。この島ではボランティアが来る事は初めてだったので馴染みがなく、最初は「何とか自分達でやっから」と断っていた。申し訳ないと思ったからだ。しばらくそうした状況が続いたが、ボランティアの方々は何度も島へ来た。毎日1人で片づけなどをしていたので、大勢のボランティアの方々の「何でもやっから」という気持ちが嬉しく、ありがたかった。最初は食料も確保できず、お風呂もなかったので、泊まり込みでボランティアをする事はできなかったが、定期船が動くようになってからはボランティアの方々が頻繁に来るようになった。もしも自分がボランティアに来てもらう立場ではなく、逆の立場だったら、

果たして自分に行けるのかなと自問した。日本人には良いところが残っていると感じた。

東日本大震災による海の変化

【外川さん】震災後は2012年から海に潜っているが、大きな石や海藻が無くなってしまった。島の陰には海藻などが残っているが、津波が来たところはまっさらになっている。アワビは大きな石の下などに隠れるので、まっさらな状態ではアワビが付かない。島では5人が素潜りをしているのだが、産業としての危機感を抱いている。いろいろな養殖ならば何とかなるかもしれないが、自然を相手にしている潜りの我々にとって現在の海の状態は非常に厳しい。

【長南さん】震災以降、内湾が富栄養になっている。沖合の泥が流れ込んできたため泥質が変わった。これまでは見た事がなかったツチクジラが湾淵辺りにいる。内湾まで入ってくるなど、これまではない事だ。ワカメは少し増えたが、カジメなどが全部無くなってしまい、アワビが付きそうもない石になってしまった。また、ウニがいないので、雑ものを食べてくれない。潜水した時、石を伝っていくとアワビがいて、蜘蛛の巣がはった時（磯が汚れている状態）はウニが雑ものを食べ、ウニをどかすとアワビがいる環境が良い海の環境だ。どれか1つ欠けても駄目なのが自然だ。ウニは草を食べてしまうので邪魔だと言う人もいる。確かに邪魔する事もあるが、補ってくれるところを尊重した方がいい。

寒風沢が抱えている課題

【外川さん】現在、寒風沢に残っているのは仮設住宅を含めて50軒だ。塩竈市に避難した方々が戻って来られない状況が一番の課題である。歳をとったり、病気をしていたりして、島にいと緊急の場合は対応できないので、高齢者は安心して暮らす事ができない。お墓参りにいつでも行けるようにと、お墓を寒風沢から塩竈に移した方もいる。寒風沢に戻りたい気持ちはあるようだが、島の復興住宅は申込みが無いようで、避難した方々が戻ってくる可能性は少ない。おそらく若い人が戻ってくる事もないだろう。寒風沢に魅力ある産業が無くなってしまったからだ。震災以前は海苔と牡蠣と刺網漁が盛んだった。刺網漁の船は全部残っているが、海苔の機械は津波で駄目になってしまった。「もう一度、海苔をやりたい」と言う島民はいるが、設備を整えるためには莫大な資金が必要だ。いかだや網が流され



長南 正義さん

てしまったので、すべてそろえるには1億円以上かかる。3人で協業すれば、全体の約8割の融資を受けられるのだが、海苔事業に携っている島民は皆67歳前後だ。後継者がいれば違ったのだろうが、やりたい気持ちはあっても、この先の返済がネックになり、再開する事ができず、海苔の事業をしていた人は全員やめてしまった。現在、寒風沢の最若手事業者は牡蠣を事業にしている54歳だ。

次に防潮堤の問題だ。今回の震災のように津波を見てから逃げた人も大勢いる。もしも見えていなかったら、うちの母ちゃんは巻き込まれていた。防潮堤を高くしたら、波を見る事ができなくなる。海が見えないとおっかないし（怖いし）、かえって危険ではないか。岩手県田老の防潮堤でも津波を防げなかったのだから、もはや防潮堤では防げないと分かったはずだ。命があればよいのだから、財産はともかく、とにかく逃げる。地震が来たら、海を見て逃げる。津波が来たら、逃げるしかない。寒風沢は震災により沈下した漁港用地等のかさ上げ整備が復興計画に盛り込まれている。防潮堤が高くなれば、道路もかさ上げされる。それで、住宅地を低いままにしておくと、ポンプで排水する必要が出てくる。しかし、かさ上げには資金も労力もかかる。家の中の物を全部出して、床を壊して高くしなければならない。私の家も土地をかさ上げするために、1年近く空き家に住んでいた。それを80歳の島民にやれと言うのは無理がある。また、防潮堤と一緒にエプロン（接岸施設の水際線から上屋または野積場に至るまでの平坦な場所。）も高くする計画だそう。エプロンが高くなると、干潮時に船への乗り降りや荷揚げができなくなってしまう。使いやすいようになるなら良いのだが、これから歳をとっていくのに、おどげでねえ（大変な）事だ。住民の意向としては、現状を保ちながら水が上がらないようにしてほしい。

【長南さん】千年に1度と言われている大津波を防がなければならないのも分かるが、使い勝手の良いようにしてほしい。住む人が便利でなければ、誰のためか分からない。朝起きて海の様子を見てから今日の仕事の事を考える。海の様子が見えてなんぼの世界だ。島に来て海が見えないのもどうかと思うし、防潮堤ができれば閉じ込められた気分になると思う。また、これまで簡単に海へ出入りしていたが、防潮堤を大きくすれば人の手では水門が開けられなくなってしまう。島は高齢者ばかりなので大変だ。さらに、護岸整備と同時に避難経路も整えないと、もし今津波が来たらどうするのだろうかと考えてしまう。島だけの力では予算も人手もないので、できる事は限られているが、ある程度同時に進めなければならないと思う。寒風沢は震災前から課題が山積している状態だった。そこに震災が来た。元の状態に戻すのか、元の状態よりランクアップするのか。早く元の状態に復旧するのが先決だと思っている。現状は時間とお金をかけすぎではないだろうか。また、護岸整備などハード面ばかりが優先されて、生活基盤の産業が復興していない。第一次産業で食べているので、産業が復興しないと島にいる意味がなくなってしまう。牡蠣の産業は震災の年から何とか復旧し、1年目は頑張れたが、2年が経過し、牡蠣に従事する人は半分に減ってしまった。元の状態に戻してくれれば、塩竈市に避難した方々の中にも島へ戻る人がいるのではないと思う。しかし、戻ろうと思っても島の復興が進まなければどんどん先延ばしになり、避難先で生活基盤が固まってしまうのではないかと。復興計画などは大きく掲げられていても、現地では復旧復興が全然進んでいないように感じる。動いてはいるのだろうし大きなビジョンも必要だが、現在も自分達の生活は続いているのだから、住む人達に見えるようにしてほしい。

大震災を振り返って

【外川さん】地震が来たら、とにかく何も持たずに逃げる。それが大事な事だ。また、今振り返ると、米などの備蓄をしていた方が良いのだと感じる。大震災という非常時に島で確立していた循環が活かされた。これからは島の良いところとして、寒風沢ならではの循環を守らなければならないし、活かしていかなければならない。これから寒風沢へいろいろな方に来て、泊まっていただき、島の現状を見て、話を聞いてほしい。島民は海が見えるのが寒風沢らしいと思っている。海が見える事がどれだけ大事かは、見てもらわないと分からない。

【長南さん】寒風沢では11世帯が仮設住宅に住んでいる。夏は暑いし、冬は寒いし、絶対にストレスは溜まる。それが2年半も続いている。仮設住宅は避難生活の延長と言っても過言ではない程の大変さがある。震災で家や財産など全てを持っていかれ、生産もかなわないと思い、一時は島を出る覚悟もした。しかし、震災直後から早く自分の生活を立て直したい一心で、とにかく生産をしようと牡蠣養殖を1年目で再開した。海の中でヘドロ状態になっている種牡蠣の種子を探して、隣の島の方と組んで、桂島の処理場に通った。生活が成り立ったわけではないが、現在はこうして家族と頑張っている。おそらく島を出てしまっただけは何も残らなかっただろう。津波はどうしようもないと思っている。小さな不平不満は数えたらきりが無いが、それよりも早く元の生活に戻りたい。現在は自分の生活の立ち上げが一番だ。外川さんのように早く自分の家を建てたい。

牡蠣養殖に携わって10年以上になるが、産業的にはもう勢いが無い。今後は加工して付加価値をつけて売っていかねばならないと思っている。寒風沢のブランドも考えていきたい。地域性と閉鎖性はイコールだと思うので、時代の流れに合わせて、自分で切り開いていかねばならないと感じる。人を呼ぶ工夫も必要だ。こちらからも積極的に出ていき、寒風沢の良いところを上手くPRしたい。地元では当たり前すぎて見えない事も、外から来た人にとっては魅力的かもしれない。島に来た100人のうち1人でも興味を持ってくれ、やる気を出し、漁師をやりたいと言う人がいるかもしれない。そうしたある程度オープンな体制を作らなければ、寒風沢を含む浦戸諸島は生き残れないと思う。これから「したい」事はいろいろあるが、生活していくためには1人ひとりが生活の基盤を整えていかねばならない。先を見て頑張るしかない。まずは少しずつでも前と同じサイクルで仕事ができるように、良い方向に変わっていけば良いと思う。



撮影：2013.6.29 宮城県塩竈市寒風沢 島へ来たボランティアの様子

任意団体 一緒に亶理町の未来を考えていきたい

亶理町

松島 宏佑 わたりグリーンベルトプロジェクト運営委員会

取材日 2013.07.18

わたりグリーンベルトプロジェクト運営委員会代表理事。宮城県白石市出身。東京の大学を卒業後、島根県にある隠岐諸島の海士町でまちづくりについて学ぶ。被災地と支援者を繋ぐマッチングサイト、ふらっとーほくを立ち上げ後、わたりグリーンベルトプロジェクトを発足する。亶理町の防潮林再生と共に、亶理町の今後の復興を見ずえている。

3月11日 14時46分

大学卒業後はまちづくりの勉強のために島根県にある隠岐諸島の海士町に住んでいた。2011年3月11日は大学生が8人ほど勉強のために島に訪れていて、地震発生時は受け入れ対応をしていた。このとき海士町はまったく揺れなかった。地震があった20分後くらいに、たくさんの友人から届いたメールを見て、初めて地震の事を知った。その後、会社の社員全員で東北のお客様に安否確認等をした。

僕はその日のうちに実家のある東北に向かった。1日に2本出ているフェリーの運航は終わっていたので、貸し切りの船を借りて本土を目指した。ちょうど船に乗った18時30分くらいに両親からメールで連絡があり、元気である事を確認できて一安心した。

ふらっとーほく立ち上げ

亶理のボランティアセンターが3月19日に立ち上がったと聞いた。亶理には母の知人がいた事をきっかけに、3月22日くらいに初めて瓦礫撤去のお手伝いをさせてもらったことがすべての始まりだった。最初は何をやればいいのか分からなかったし、いつまで東北にいるかもまったく考えていなかった。

ネットで情報を収集していると、東京の人は東北に来たがっているが、宿がなくて困っていることがわかった。一方で、宮城野内陸には温泉宿があるが、震災の影響でお客さんが来なくなってしまった。これを解決するために温泉宿とボランティアのマッチングができないかと考えた。しかし、当初は温泉宿のネットワークを持っていなかった。遠刈田のとある温泉宿の支配人とつながりを持つ事ができたのはたまたまだ。支配人は、一緒に東北へ来ていた僕の知人が関わっていた、インターネット上の企画のファンで、そこからつながりを持つ事ができた。

ふらっとーほくの最初のサービスは4月7日に開



始した。当初はホームページが無かったのでブログに情報を掲載した。1回目はたいした集客はできなかったが、来ていただいた方の満足度は高くリピーターは多かった。その後も何度か企画し、来ていただいたボランティアは連泊でも1人とカウントした場合、延べ数で300人弱くらいだ。全員が亶理のボランティアセンターでお手伝いをしていた。

ふらっとーほくのプログラムで東北入りした方々の中には、復旧の段階ではボランティアとして動き、その後の復興の段階では事業として長期的な支援ができないかと考えている方々がいた。その方々と一緒になって、これからの亶理の支援をどうすべきか毎晩話し合った。亶理の今後を考えている中で、わたりグリーンベルトプロジェクトにつながる話が出てきた。

わたりグリーンベルトプロジェクト発足

わたりグリーンベルトプロジェクトは町民参加型のプロジェクトで、各分野の専門家と協力しつつ自ら調査・計画策定・苗木作り・植樹・管理と運営すべてに携わってまちづくりを行なう。100年後、未来の子ども達が自慢できる手づくりの森づくりと、町民としての誇りを受け継がせるプロジェクトになっている。

プロジェクトは大きく3つのステップに分かれていた。第1ステップとして最初の企画が出たのは2011年8月頃の事だった。この時は現地で何十年も仕事をしている苗木屋の方が「防災林が流されたので復活させる必要がある、それを市民の手でできないか」と仰っていた。この企画を自治体に提案したところ採用され、2011年12月に出された亶理町の復興計画に「30,000本の防潮林育成プロジェクト事業」として掲載された。

第2ステップでは、この事業は本質的な解決になるのかと地域で議論が起こった。防潮林は目的ではなく、あくまで町を守るためのものだ。沿岸部の農業は防潮林があったからできた。昔は防潮林から拾ってきた松ぼっくりや松葉でお風呂を沸かしていたし、戦後までさかのぼると籠を背負って行き防潮林でキノコを採っていた文化がある。資源的な循環はもちろんだが、人的にも生きる上での農地があって住宅があって、守る部分もある。それは手段であって、本質的な解決にはならないという意見が交わされる中で、わたりグリーンベルトの発起人会が2012年の4月に行なわれた。沿岸部の区長さんや被災者の方を交えて、プロジェクトを始めようとした。

第3ステップとして、わたりグリーンベルトのマスタープランを作成し、亶理町に総務省の緑の分権改革に公募していただけないかと提案をした。公募が通り国から自治体に委託され、2012年6月に採択団体として社団法人ふらっと一ほくが事業を受けた。

その後、住民を交えてのワークショップを行なったが、最初は僕達スタッフも含めてみなさん緊張して大変だった。当時の東北には市民参加型のまちづくりの事例がほとんど無くて分からないことが多かった。1回目のワークショップに参加した方の感想を見ていて、「自分では何もできない」と思っている方がたくさんいる事に気づいた。亶理は内陸も沿岸部も被災して、地域の方々は目の前の課題に向き合う事で精一杯だったはずだ。それなのにこの1年間は地域のために何もできていない、自分の身の回りの事しかできていない、それが申し訳ないと感じていた。しかし、ワークショップを重ねると、「初めからできないとは考えず、目の前の事に全力で取り組みたい」「亶理町が今までより好きになっている気がする」といった感想が出てきた。わたりグリーンベルトプロジェクトが住民の方々が前向きで物事を考えるきっかけを提供できたかなと思っている。

亶理の子ども達へ伝えたい

2012年から総合学習の一環として学校で苗木作りに取り組んでもらっている。今年は、年間を通

してグリーンベルトと一緒に亶理町の未来を考えようというテーマを設定した。最初、このテーマでやる事はすごく怖かった。沿岸部の事を考える事自体が持つメッセージ性は、いろいろなものがある。沿岸部では震災について一切触れない子どもがいる事はよく聞いていた。やるべきか迷い、先生達と相談しながら進めた。

実際に授業を行ない、子ども達に感想を書いてもらったら、「自分にできる事」という表現がでてきた事、「亶理を笑顔であふれた場所にしたい」など、前向きにいろいろな事を感じたり、考えていて驚いた。もちろん全員がポジティブになる事なんてあり得ない。だが事実として住んでいる子ども達が町の未来を作らなければいけない厳然たる事実もある。区長さんをはじめ地域の方のお話を聞いて、一緒に苗木を作るプロセスの中で、子ども達にはいろいろな事を感じてもらえたと思う。

これからのグリーンベルトプロジェクト

今後、シンプルに何をしなければいけないかを考えると、自分達で自分達の町を作るその一点に尽きと思う。防潮林や苗木作りは手段に過ぎない。そこで営まれてきた生活や暮らしをどう再興すべきかが本当の課題で、そもそも被災前から人口減少や少子高齢化などの地域課題があり、震災によってこれらの問題は加速化した。僕らは防潮林を中心において、持続可能な地域づくりをやろうと考えている。

今後の具体的な方向性としてまずは、住民自身が自分達で地域を担っていくという感覚を持ち、責任を持つように転換させる事が必要だ。一方で、町民自身が何かやりたいと言っても、県・国・法制度などの大きな壁が待っている。その壁を全力で突破する必要がある。僕達は町民参加型のワークショップですごく楽しそうな事をやっていると思われがちだが、実際はすごく堅い勉強会もしている。例えば、防潮林の基本計画は僕達で作ろうと、基本計画の策定に取り組んでいる。必然的に水門や地形気象生物、法制度を調べなければいけない。地域の方に調べてもらって僕達で評価し、その全体の方針をどうするか、植栽計画、配置計画、盛り土も含めて提案する。林野庁や霞が関の担当部署はもちろん、仙台市など関係部署にはすべて伝えている。なぜこのようなやり方で進めているかという、防潮林を作るまでは国が対応するが、その後の管理を担うのは自治体だからだ。このまま任せてしまう事に危うさを感じているので、防潮林の管理体制も僕達で作ろうとしている。地域の再興のために必要な事であり、地域で根差

すものにするべきだと提案して林野庁にも了承をいただいた。

こうした国と県と自治体を含めた協働の基盤を、あと1年で作りきりたいと思っている。協働は人間関係の泥臭い部分もあるだろう。そうしたところも僕らがコミュニケーションを取りながら作り上げたいと思っている。

そして最後に、事業性が課題となる。防潮林の管理のポイントとして、事業性がなければ今後の防潮林の管理を続ける事は難しいと考えている。理由の1つに、これまではコミュニティが管理していた側面がある。元々300世帯いた地域が、今は20世帯しか残っておらず、コミュニティが無くなってしまったためにこれまでのような管理はできない。沿岸部だけのコミュニティではなく+αで企業を加えてもう少し範囲を広げた『コミュニティ』で管理していく方法を考えている。もう1つの理由は、防潮林が目的ではビジネスにならない点だ。農業法人としての体験学習と合わせて、防潮林の管理体験を盛り込み、合わせて防潮林を管理していくような、農業を中心にした農業と防潮林の一体管理を構想に据えている。

まとめると、まずは自分達で自分達の事を責任と権限を持ってやっていく事。国・自治体・県・企業と協働体制を作っていく事。いずれにしろ資金がなければ継続できないので、現実的な部分で農業法人としてトライしていく事。とくに農業法人はトライしていかないと結局は物を作るだけで終わってしまい、後に続かないだろう。

大震災を振り返って

僕個人として、東北出身者として思うのは、震災が非常に厳しい事は事実だ。そもそも東北を含め、日本全体が少子高齢化で後継者不足に悩んでいて、どうしても自治体への依存強い地域が多かったと思う。震災がなくても十年後にはかなり苦しい未来が待っていたはずだ。2050年には日本の人口は9000万人ほどになると言われている。そうなると日本の経済力が落ちて、福祉に回すお金が減ってしまう可能性が高いと思う。このままでは社会福祉がどうなるのかも分からず、社会が回らなくなってしまう。先進国を見ても、ギリシャやスペインの若年層の失業率が高い。ギリシャは50%、スペインは26%と言われている。そもそも世界全体が苦しくなっていると思う。

震災は1つのきっかけとしてとらえる中で、これだけ地域の事を考える人がもう一度たくさん出てきて、いろいろな協働が生まれる事はないと思う。今まではNPOに見向きもしなかった自治体が委託を出し、企業の参加も含めてまったく新しいスタイルが東北で生まれてきているはずだ。東北に

おいて、新しい持続可能な地域に向けてのモデルを作る責任が、これだけの支援をいただいた東北にはあると思っている。日本全体に何が返せるの考えた時に、日本の将来に役立つものを東北で作り上げたい。それならば支援をいただいた意味もあるし、いろいろな方に力をいただいた意味もあるだろう。

先日、東北でコミットをしている20～30代の若者が集まり、今までの事を振り返った。被災地の問題は東北の問題であって、東北の問題は日本のものである。そしてその答えを持っている人がいない現実がこの3年間で気づいた。そこに現場で頑張っている皆さんを含めて、若い世代が自分達で答えを作っていかなければいけない。それが最先端という自負を持ちながら本当に未来を作っていく必要があると思う。僕にも社会を作る当事者として、まずはわたりグリーンベルトプロジェクトを1つの基盤として何かできないかと常に考えている。

企業

地域で自給できるエネルギー

気仙沼市

柏木 友浩、柏木 亜希子、村上 純之 マシンパーツ精密工業

取材日 2013.08.20

省力機械や自動機械などの精密部品の製造販売を行なっている。東日本大震災で会社の事務所が被災し、現在は社長の自宅にて営業を再開している。震災当時の各所における燃料不足を受けて、地域で自給できるバイオディーゼル燃料（BDF）の製造販売の取り組みを始め、現在活動が広がっている。

3月11日 14時46分

【柏木社長】事務所で仕事をしている時に地震が来た。突然で尋常ではない揺れだ。揺れている最中に何を思ったのか、事務所にあるパソコンを車へ積み込んだ。揺れが収まり、すぐに「津波が来るので避難してください」と避難を呼びかける放送が流れた。事務所は気仙沼市内を流れる大川のすぐそばにある。精密部品は傷ついてしまうと製品にならない。出荷の梱包が済んだ製品や検査器具など、持ち運べるものをすべて車に積み込んで出発した。多くの人が高台へ避難しようと、街の中はすごい渋滞が起きていた。渋滞で車が動かなくなり、乗り捨てている人も大勢いる。何とか渋滞を抜けて自宅に戻り、何も倒れてこない部屋の真ん中に精密部品を置いた。他の精密部品なども自宅に避難させるため再び事務所へ戻った。地震から30～40分ほど経っただろうか。あと少しで事務所に到着するという時、道路に水が迫ってきたのが見えた。このままでは車ごと津波に巻き込まれてしまう。しかし道路は渋滞していて、車は一向に前に進まない。どうしようもなかった。このままでは危ない！と感じ、とっさに反対車線を逆走して津波から逃れた。

お客様の声が再開の原動力に

【柏木社長】事務所は被災し、近寄れる状態ではない。すぐに携帯電話はつながらなくなり、停電した。とても寒かったので、暖を取るために、自宅の近くから木を持ってきて薪にした。ガスはプロパンガスで、市立病院が近いので水は止まらなかった。水が止まってしまった地域に住む友人達が水を汲みに来た。

【柏木さん（亜）】避難所に指定されている小学校へ行けば、おにぎりが支給されている。支援物資を必ずもらいに行くと決め、おかずは家に備蓄してある食材をやりくりした。家が津波で流されてしまった人は避難所で支援物資をもらえるけれ



ど、家がある人はもらいにくかった。しかし、買い物する事ができないので食料がないのは一緒だ。家族に食べさせなければと必死だった。1個のおにぎりをもらってきて、雑炊にして皆で食べた。

【柏木社長】電気は3週間ほどで復旧した。2011年4月頃、ようやく携帯電話がつながるようになり、「大丈夫ですか」とたくさんの友人や知人から連絡をもらった。そのうちにお客様から「そろそろ再開しないの？」と聞かれるようになった。そうした状況になっても他の企業に頼まず我々の営業再開を待ち、「早く再開して欲しい」と声をかけてくださったお客様の気持ちが原動力となった。2011年5月6日、仕事を再開した。

バイオディーゼル燃料（BDF）に取り組むきっかけ

【柏木社長】妻の実家は船大にあり、目の前は海だった。電話もつながらず、ずっと安否が確認できなかった。妻のためにも何とか大船渡へ行きたかったが、道路の状況も分からず、各所で燃料が不足しているので手に入らない。ガソリンを買に行っても、10ℓまでと制限されていた。そうした中でも、妻はつらい顔ひとつせずに家族のために頑張っていた。家族の安否を確認する事も

できないもどかしい気持ちや「自分達で燃料を用意する事ができれば…」と考えた事が、バイオディーゼル燃料（BDF）に取り組むきっかけとなった。

地震から10日目、盛岡で知り合った方の息子さんが大阪に住んでいたので、インターネットで避難所の情報を調べてくれた。妻の家族はおそらく無事だろうと分かった。ディーゼル車があったので、取引先の方から何とか灯油を分けていただき、大船渡にある妻の実家へ向かった。

【**柏木さん（重）**】家族は助からなかったのだろうと思っていた。母と妹は津波に巻き込まれてしまい、携帯電話は水没して使えなくなってしまったそうだ。

地域で自給できるエネルギー

【**村上さん**】2011年6月、BDFの製造を開始した。仮設商店街の飲食店では廃油の処理に困っていた。回収をお願いするために頑張って営業を行ったのだが、「あそこの店舗も廃油出ているよ」と口コミで情報を得る事も多かった。そして、商店街の会長さんが先頭に立って積極的に協力してくれた。気仙沼市内は復興に向けて建設企業のトラックや重機の出入りが増加していたため、製造したBDFは建設業者や廃棄処理業者へ販売していた。作業側側の燃料高騰によるコスト面の問題だけでなく、再生可能エネルギーであるBDFは環境面にも優しいと注目を集めている。原子力発電所の事故もあったため、地域の皆さんのエネルギーへの関心は高い。まだまだ復興に向かっていく段階なので再建が先決という雰囲気はあるが、BDFを知っている方が多いので、「環境の役に立つならば」と言って廃油を提供してくださるお客様も多い。「こんな廃油はどうですか？」と声をかけてくれる方も増えた。市役所にBDFに関する問い合わせがあると、弊社が紹介されるまでに取り組みは広がっている。製造量が追いつかないほどだ。市内だけでは廃油が足りないので、岩手県南と宮城県涌谷の方にも約2週間に1度ずつ回収に行っている。

BDFの品質向上に関しても研究中だ。BDF連絡協議会に入っており、品質向上について意見交換をしている。事業所によって製造方法はさまざななので、工夫もさまざまだ。全体的に底上げをしていこうという機運が高まっていて、全ての事業所でJIS規格に通る製造方法を目指している。今後より良い質のBDFを製造するために、新たに設備を導入する予定だ。また、原料や製造コストの削減も研究課題の1つだ。

大震災を振り返って

【**柏木社長**】何十年と生きてきた町が無くなってしまつてさびしい。以前の町の様子が脳裏に浮かぶ。震災前から感じている事なのだが、世の中の流れに人がついていけず、振り回されている状況があるのではないだろうか。30年前、町に大きなデパートは1つしかなかった。デパートも18時には閉店し、従業員も家に帰り、ご飯を食べて、寝て、また次の日が来る。しかし、現代の社会では24時間営業のお店が当たり前になった。物を供給するために工場も24時間体制だ。一生懸命物作りに励んでも、世の中にはたくさんの物が溢れている。そして、物が溢れているから価格で競争する。その結果、消費者は価格だけで物の価値を判断するようになってしまった。もしも壊れてしまつても、思いついたらすぐに行く。消費者はどんどん頭を使わなくなる。直して大切にすれば5年、10年使える物もたくさんある。どこかで歯止めをかけなければ、ますます人を駄目にする社会になっていくと思う。この大震災がそうした社会を食い止めるきっかけになるのではないかと思う。

【**村上さん**】震災後、心が折れそうな時、「津波でこんな不便な思いをしなければならなくて、俺は何か悪いことをしたかな…」といまだに思う事もある。これまで積み重ねてきた事が、無条件でストップさせられてしまった。もう戻れないし、戻せない。犠牲になった方々の事を思えば、生きているだけでありがたいのは分かる。だから、なかなか自分の本当の気持ちを言えない状況がある。大変な思いをした方がたくさんいる。自分は「大変だ」と言つてはいけないのだと分かっているが、やはり複雑な気持ちだ。

津波で被災した光景を見て「戦後のようだった」と言う方は多い。しかし親戚が、「戦後はこんなものではなかった、誰も助けにも来なかった」と言っていたのがとても印象に残っている。おそらく戦後の状況は非常に過酷だったのだろう。そう自分に言い聞かせて、これから頑張らなければと思っている。

企業

持続可能で安心安全な社会を目指して

仙台市

小野 寿光 株式会社馬淵工業所

取材日 2013.08.29

株式会社馬淵工業所の代表取締役。給排水、冷暖房、換気といった建築設備工事をはじめとして、道路埋設の水道管工事などライフラインの整備に深くかかわる総合設備工事会社である。東日本大震災後、「一般社団法人持続可能で安心安全な社会をめざす新エネルギー活用推進協議会（JASFA）」を設立し、復興支援活動に取り組む。

物を作る現場でこれまで感じた事

建築の世界に門外漢で入ったが、給排水や空調換気、冷暖房をはじめとする総合設備工事に取り組む馬淵工業所で「建築はインフラを整備する会社なのだ」と学んだ。給排水や空調換気、冷暖房は人間の生存に深く関わる事であり、非常に重要な仕事をしている認識がすぐに生まれた。また、物を作るプロセスは巨大なプラモデルのようで面白い。

だんだんと現場を覚えるうちに、作る人のモラルやアンテナの高さに品質が左右されていると感じた。これは建築の品質基準をきっちりと固めるべきという問題の前に、担い手の教育をきちんとする事が重要だと思った。そこで弊社ではISOを取得する事で社内教育に取り組んだ。

また、アメリカで古いビルでダクトの中に埃が溜まる事が原因のシックハウス症候群が問題になった。これをきっかけに、現在の建築設備で人はずっと健康なのだろうかという疑問を抱いた。日本では古いビルではなく、新しいビルでシックハウス症候群が出始めたからだ。さらに、建築現場で働く人々の環境が本当に安全なのかという疑問に思う事もあった。そうした経緯から、個人的に建築家の友人や日本建築学会の会長の吉野博東北大学大学院教授を訪ねて、シックハウスについて勉強したり、福島県にある化学物質過敏症の方のためのサナトリウムを訪問して化学物質過敏症の方にお会いした。化学物質過敏症とは、化学物質を浴びる事で僅かな量のあらゆる化学物質に反応して、体の不調を来すものだ。中でもシックハウス症候群は、建材・塗料・接着剤・家具などから出る揮発系有機化学物質が、体内に蓄積されて引き起こされる。面談時、我々に微量に残っている化学物質にすら反応してしまうり患した人々の症状を、建築が引き起こしている実態を突きつけられた。2004年、可能な限り化学物質を排除した住まいの提供促進を目的として「有限責任有限責任中間法人 脱・化学物質の住まい推進協会（CFHA）」を設立した。



3月11日 14時46分

仙台市太白区にある事務所で、経済産業省の事業の最終審査を受けている最中に地震が来た。ぐらーっという揺れはいつまでも収まらない。あっという間に棚から資料が落ち、分厚い本が4mほど先から飛んで来た。皆で夢中で棚を押さえた。窓の外を見ると、駐車場の車が飛び跳ねるように動いていた。ただ事ではないと感じ、室内は物が落ちてきて危ないと思ったので、少し揺れが落ち着いてから窓を開けて外に出た。事務所の中はぐちゃぐちゃになってしまった。

家族や家が心配だろうと思い、帰る事ができる職員から帰宅させた。私と妻は職員が全員帰宅するのを見届けるため、事務所に残る事にした。もし帰宅しても、大渋滞に巻き込まれるだろうと思った。余震が続いていたので、狭い部屋で待機した。停電で暖房が使えず、とても寒かったので毛布にくるまった。頭の中では「ただ事ではないだろう。これから山のような修繕依頼や緊急の対応をしなければ」と考えていた。21時頃に事務所を出発し、泉区の自宅に到着したのは夜中の12時頃だった。

ライフラインが止まって

自宅は仙台市泉区にあり、電気、水、ガスは止まった。近くの小学校に避難所が設営され、支援

物資が支給された。他地域では津波の映像をテレビで見たようだが、私達が津波の映像を見るのはずっとあとの事だ。津波があったと聞いてはいたが、規模がどのくらいなのかまったく想像できなかった。相当ひどい被害だと聞き、当社が所有する東松島市の工場が心配になった。ガスの復旧には1ヶ月程度時間がかかり、ずっとお風呂に入る事ができなかった。また、ガソリン不足が深刻だったので、社員同士で乗合をし、なるべく燃料を減らさないよう工夫した。

会社は翌日から全職員が出社して緊急対応に当たった。修繕依頼や緊急の対応に追われるだろうと予想していたが、連絡手段がないため数日は連絡がなかった。まずはめちゃくちゃになっていた事務所の片づけを始め、緊急体制をとれるようになり、修繕依頼の受付をした。班を編成し、毎朝全社員が事務所に出勤する事にし、点呼を取って、その日の予定を共有した。会社に届いた物資などはすべて通し番号で管理し、誰がどう処理をしたかを明確にした。夕方事務所に戻ったら、その日の報告をし合った。

これまで災害時対応の訓練をしていたし、阪神淡路大震災に支援に行った経験もあるので、どのような体制や道具が必要かは分かっていた。復旧するに当たって不足しそうな材料なども宮城県管工業協同組合や大手商社に対応してもらえるようにした。ガソリン不足が深刻になった頃、緊急対応をする企業が優先的に給油できるガソリンスタンドを指定された。しかし、情報が錯綜していてガソリンスタンドへ行っても並ばなければならないところ、「緊急」のステッカーを貼っていれば優先して入れてもらえるところなどさまたかった。自宅にあるガソリン用タンクを持ち寄り、ガソリンを確保するために営業社員をガソリン調達係に任命した。

地震から1～2週間はとても混乱していた。

初めて被災地を見て

地震から数日後、津波の被害を受けているかもしれない東松島市の工場が心配だったので、自宅のある仙台市泉区から鹿島台を通って東松島まで行こうとした。ところが、道路はところどころ地割れが発生し、橋に架かる道路は沈下して50～60cmの段差ができていた。橋の近くまで行けても普通の車ではどうしようもなかった。

自衛隊が被災地に入ると聞いて、再び東松島市まで行く事を決め、長町ICから高速道路に乗った。仙台東部道路に上った時、沿岸部側には車や船、瓦礫が散乱した荒涼とした景色が見えた。自分が生きているうちに、こんな風景を目にする事があ



撮影：2011.5.16 宮城県東松島市 東名地区の田園

ろうとは思わなかった。内陸部側は建物の倒壊被害などは、宮城県沖地震と比べるとはるかに少なかったもので、目に飛び込んできた津波の惨状には、世の中が壊れたと感じた。高速道路は通行止めになっており、仙台東ICで降ろされた。一般道路を通り、多賀城方面から道路の瓦礫を少しずつ避けていく自衛隊の後ろをついて行った。車が電信柱にぶら下がり、陸に船が乗り上げている光景を目の当たりにした。本当にショックで、心臓が高鳴るほどだった。相当数の尊い命が犠牲になった事が伺えた。松島海岸近くの道路は、地盤沈下して海水の水溜まりができていた。

旧鳴瀬役場に何とか到着したものの、そこは野戦病院のようだった。「〇〇がいない」「〇〇と連絡がつかない」と蜂の巣をつついたような騒ぎだ。いろいろな場所に安否確認の貼紙がしてあった。連絡の方法も整理されていなくて、誰が何を伝えたくて貼紙をしているのか理解できないほどの混乱だ。人々は魂が抜けたような表情でその辺りに座り込んでいた。東松島市教育委員会の方と市役所の方と再会した。教育委員会の方は外から来た我々を見た瞬間、ボロボロと涙をこぼした。泣いている彼を見て、相当ショックな事が起きているのだと感じた。彼らには東松島市の職員としてやらなければならない事がある。しかし、彼らも被災者であり、職員の中には家族を失った者も多い。そうした現実に変なショックを受け、帰りの道すがら「とにかくこの状況を何とかしなければならぬ」と感じた。しかし、同時に「ここにいる者だけでは絶対に何ともできないだろう」と思った。

3月末、バックパックを背負い東京行きのバスに乗り込んだ。これまでつながりのある仲間を訪ねて東北の状況を話し、「東北を何とかしよう」と声をかけた。

支援活動の始まり

2011年5月には被災各地で応急仮設住宅の建設が始まっていた。当社のお客様に仮設住宅建設に対応する企業があったので、連携する事を決めて給排水設備工事にあたった。岩手県の担当になったので、遠野市に拠点を置き、釜石市などに通った。約2年間、会社から常駐スタッフを派遣している。

2011年5月18日、名取市役所前にクリーンな自然エネルギーを活用したハイブリッド街路灯「マブチ・ハイブリッドポール」1号機を建てた。地元の皆さんからもご好評をいただいている。ハイブリッドポールは韓国企業との共同開発で実現したもので、太陽光発電と風力発電を組み合わせ内蔵型の高性能バッテリーに蓄電し、LED（発光ダイオード）照明の常夜灯（街灯）などに使用する独立自家発電複合機能街路灯のハイブリッドスマートデバイスだ。震災以前から持続可能型社会を目指して、再生可能エネルギーにも取り組んでいた。韓国から輸入する段取りをしている矢先に地震が起これ、タイミング良く名取市役所前に設置する事になった。環境事業に向けた取り組み、本来の設備工事、従来のお客様への対応が会社の事業の3本立てになった。

東松島市と連携したJASFAの取り組み

2011年7月、東北の研究者や中小企業などが中心となり「一般社団法人持続可能で安心安全な社会をめざす新エネルギー活用推進協議会（JASFA）」を設立した。「持続可能」で「安心安全な社会」形成を目指し、「新エネルギー」を個々の暮らしや事業体の改善、地域づくり・まちづくりに導入するため積極的に産学官の研究知財を応用するとともに、地域社会に普及促進が図れる技術の発掘と活用推進を目的としている。

当社が開発した発電装置「マブチ・ハイブリッドポール」を活用し、電力の地産地消を目指すエコタウンの社会実験を行なっている。東松島市の仮設住宅周辺で、太陽光パネルと風力発電用のプロペラを導入し、蓄電池を装備したLED（発光ダイオード）照明の街灯2号機、3号機を設置した。仙台高等専門学校が中心となって進めている「震災復興高専プロジェクト」※と連携して、電気を作るデバイスを何に活用するか相談し、無線LANのアンテナを搭載した。日頃から使えるようにしておく事で、いざという時にも使える。さらに、東松島市の農業関係者からの技術相談を受けて、津波浸水農地の土壌塩分除去等土壌改良のプロジェクトも取り組んでいる。



撮影：2011.6.5 宮城県七ヶ浜町 まだ片づいていない七ヶ浜

また、ジャパン・プラットフォーム（JPF）からご協力をいただき、東松島市と連携した就労支援事業を行なっている。この事業は被災した求職者の就労支援と地場の産業復興支援を目的としており、全15回の講座では各企業の代表から直接話を聞く事ができる。参加者からは感謝のお言葉を頂戴する事が多く、大変嬉しい。さらに、さまざまな企業や仕事を知り、いろいろな社長の考えを聞いて、「世の中には自分の知らない仕事がたくさんあるのだと気づいた」とコメントがあった。視野が広がる事で職業の選択の幅も広がると考えられる。この事業を行なっている意義を感じた。

※震災復興高専プロジェクト…東北地方をカバーする東北地区高専が、産学官連携により取り組むプロジェクト。東北地方の被災地が求めている震災復興へ向けて短期・長期ニーズに対応し課題解決できる人材を育成するシステムを構築し、地域社会に定着させる事を目的としている。

会社や地域に還元される人材

課題は人材が足りない事である。馬淵工業所としても、JASFAとしても、もっといろいろなリソースを持ち合わせた人が1人でも多くいれば、より発展した取り組みができると思う。「やりたい」と思い描いた事を完全な形でアウトプットしたいと思うが、すべてがうまくいくわけではない。物事を冷静に見る事ができる第三者的人材や組織をマネジメントできる人材が欲しい。育成していく事も課題である。知り合いの経営者と一緒に、互いの会社の職員をある程度の期間交換する取り組みをしている。学生だけがインターンシップをするのではなく、会社に勤めてからも別な世界を経験した方が良いと考えているからだ。違う生業で違う世界に生きている人と接する事で、人間を大

きくし、違う視点を持てるようになる。それは必ず会社や地域に還元されていく。

大震災を振り返って

人間はすごく小さな存在なのに、地球には大きな影響を及ぼしている。どのような環境にいる人でも生きている間は独りではない。自分の行ないが他人や他の生物、地球の迷惑になってはならないし、人間は驕り高ぶってはならないと思う。自他の存在を認め合い、一生懸命生きるしかない。自分の存在は、死ぬまで分からない事だ。死後、生きている間に何をしたのか、どのような人間だったのかを周りから評価される。

大震災では自分の小ささ、無力さを思い知った。自分だけの力ではできないからたくさんの人と協力する。建築の世界に門外漢で入ったが、これまでの経験や出会いが現在の取り組みにつながっていた。「脱・化学物質の住まい推進協会（CFHA）」のメンバーの何人かはJASFAの主体メンバーを

担っている。どなたとの出会いもまったくの偶然ではなく必然で、出会うべくして出会っているのだろう。一期一会と言うが、1つひとつの出会いにはいろいろな意味が織り込まれている。その上で人は出会うのだと思う。多くの連携が大きな輪になり、新しい東北につながればよい。たくさんの犠牲になった方がいる中で、生かされた人間としてはこうした想いを伝えていかなければならないと感じている。

2011年3月末、上野で見た桜が忘れられない。「これからスタートできるか」と不安を抱えていた。しかし、大震災が起きて、絶対に東北から発信できるものがあると感じた。JASFAの前文にすべてが集約している。確かに未曾有の体験であり、試練かもしれない。でも試練はチャンスだと思う。乗り越えられれば、必ず乗り越える前よりもステップアップできる。これからの東北は世界にも発信する力があるだろう。



撮影：2012.7.30 東松島市旧浜市小学校に設置したソーラーパネル



撮影：2013.7.28 夏祭りにてソーラークッカーでの子どもたちへの環境教育



撮影：2013.10.20 図書館まつりにてソーラークッカーでの子どもたちへの環境教育



撮影：2012.9.6 東松島市旧浜市小学校にて市民講座開催

大学

いぐねは仙台平野復活のシンボル

仙台市

小金澤 孝昭 宮城教育大学

取材日 2013.10.02

宮城教育大学教授。人文地理学、地域経済論、持続発展教育学が専門。自然に立脚した生業によって成り立つ農林漁村と、消費中心の都市とのつながりの重要性を説く。仙台いぐね研究会では、伝統的家屋と屋敷林から構成される「いぐね」の暮らしを体験し、学ぶための体験学校の運営や、環境に優しい暮らし方を現代生活に活かす活動を行なっている。

仙台いぐね研究会設立

地域の生活についての調査を取り扱う地域文化調査法ゼミの学生が主体となり、2001年12月から2002年1月にかけて、仙台平野に広がるいぐね（居久根）を調査した。いぐねとは、屋敷林の1つだ。仙台平野では奥羽山脈から吹き降ろす季節風を防ぐため、屋敷の北西部にいぐねが仕立てられている事が多く、他の屋敷林に比べて樹木を最も自然の形に近い状態で維持している。田植えの時期に水田の海原に浮かぶ、こんもりとした島のような樹木の塊は、いぐねの典型的な景観だ。維持の大変さから減少しつつあるが、都市の中の貴重な景観として辛うじて残っている。はじめは仙台市の長喜城にある、庄子さんの屋敷のいぐねを活用し、防風効果を測る実験を行なった。次の年からはいぐねを守っていくために活用する事にした。地域文化の問題を扱うにはお金がかかる。助成金を得るため2001年に団体を作った。それが仙台いぐね研究会だ。

いぐね研究会は、主に宮城教育大学の学生が中心となって活動している。主な活動は子どもを対象にした「いぐねの学校」だ。いぐねを活用した体験学習を通じて、人工的な里山であるいぐねと環境との関係や、自然の恵みを活かしていた昔の暮らしを体験する。この活動は2001年から行なっている。現在は宮城県名取市大曲にある国指定有形文化財建造物「洞口家住宅」にて開催している。2004年以降は田植えの学校も開催し、名取市にある7haの水田で米作りを行なった。秋には収穫祭を開催し、自然乾燥した稲を千歯こぎと足踏み脱穀機で脱穀し、蒸し竈でご飯を炊く体験学習も行なった。

このようなイベントは、学生達が自ら企画し運営をしている。学生時代にこのような体験をする事で、事業運営力を身につけるだけでなく、コミュニケーション能力の向上にもつながっている。



3月11日 14時46分

大地震によって発生した巨大津波により、仙台平野は甚大な被害を被った。仙台平野の海岸地域の多くは農業振興地域で、水田が卓越している。3月の乾いた水田の上を、津波は速い速度で駆け抜けた。後に仙台市の消防ヘリコプターが撮影した津波の様子を見てみると、その形状と到達状況から津波は海岸と平行に移動していない事が分かった。海岸林や屋敷林、家屋、その他建造物といった障害物の分布によって津波の到達スピードに差異が生じ、さらに津波の形状も異なったのだ。結果的に津波被害にも差異がみられた。海岸林や屋敷林が大津波の力を止める事はできなかったが、津波によって流出した瓦礫の拡散を防ぐ効果や、家屋の崩壊を止める効果を発揮した。仙台平野には屋敷林としていぐねが微高地に数多く点在している。海岸林のように密集しているわけではないが、いぐねが点在する事によって減災につながったと考えられる。

いぐねによる津波被害の軽減

いぐねによる津波被害の軽減効果を調査するために、国土地理院、Google earthの被災前後の航空写真から、いぐねと海岸林の残存や瓦礫がどこにどのように溜まっているかを分析した。その結

果、東部道路より東に位置するいぐねはその約3分の1が流出、あるいは一部損壊の被害を受けている事が分かった。海岸林は残っている事の方が珍しい。逆にいぐね被害が比較的少なかった地域は、海岸線から少し離れた地域だ。一方で、海岸線から離れていても、津波で運ばれてきた大量の瓦礫によって被害を受けた場合もある。

瓦礫の分布を調査すると、東部道路が堤防の役割を果たした事から、瓦礫の多くが東部道路の東側で塞ぎ止められていた。地域別に分布を調べると、基本的に水田に溜まっている例が多い。被災後に水が引かなかった地域では瓦礫が無数に散乱していた。津波の遡上限界に達し、水がすぐ引いた地域では水田の端に瓦礫が溜まっていた。ここでは押し波と引き波の違いを垣間見る事ができる。押し波では水田の西端に、引き波では水田の東端に瓦礫が溜まる傾向があった。水田は津波が走りやすく、建物も少ない。そのため津波の勢いがなかなか弱まらなかったと考えられる。押し波で集落の内部に瓦礫が多く溜まり、引き波では集落の背後に瓦礫が引っかかって溜まった場合が多い。仙台市ではいぐねのある集落によって瓦礫がひっきり、その集落の前方あるいは背後の水田に多く瓦礫が散布している。いぐねがある事で、ある程度瓦礫を引き留め、さらなる内陸部への侵入防止につながったと考えられる。加えて、いぐねがあった場合の建物の残存率の高さも多くの集落で確認できた。

いぐねのあるお宅でヒアリングを行なったところ、ほとんどのお宅で防災効果があったと回答を得られた。いぐねの存在により瓦礫が引っかかり、敷地内の被害が拡大したケースもあるが、家屋の建物被害は少ない。同じ微高地に立つ家屋でも、いぐねがない家屋は流出していた。海岸からある程度距離があり、微高地に建ち、加えていぐねがあれば、建物の被害が少なくて済む事が分かった。現在では、いぐねの存在によって津波被害を軽減した地区でも塩害が進行し、いぐねの伐採が始まっている(2012年9月28日現在)。調査によって、いぐねが津波や瓦礫から建物被害を軽減させ、後背地の被害を和らげる働きをした事が明らかになり、いぐねの復活の必要性を強く感じた。ヒアリング調査では「集落全体を囲うようないぐねを国や自治体で造っていくべきではないか」との意見も寄せられた。現代の居住構造やいぐねを手入れする手間を考えると、若い世代が個人でいぐねを設け管理していく事は難しい。浸水したが現在もいぐねを守り、そこに住んでいく人々には、国や自治体から何らかの補助をし、いぐねのある昔ながらの屋敷として復活してもらいたい。今後、集団移転などで新たな集落や人口密集地域を仙台平野の微高地に造る場合には、集落を一周する大



撮影：2011.5.24 宮城大学 学生ボランティアによる瓦礫撤去

きな島のようないぐねを造る事で、防災・防砂に加え、豊かな仙台平野というイメージの復活につながっていくのではないだろうか。いぐねは歴史ある緑豊かな仙台平野を復活させるシンボルになると考えている。

防災教育と復興教育の視点

防災教育においても、復興教育においても共通して、地域学習を基礎に置く事が肝要である。避難路の確認やハザードマップの作成、避難訓練も重要な項目だが、日常的な教科学習や総合的な学習の中で、地域を学ぶ学習も重要である。

例えば、防災教育の目標の1つに安全に避難する事が掲げられているが、災害の種類や地域によって避難の方法は大きく異なってくる。津波被害ならばとにかく逃げる事が重視されるが、津波の大きさやスピードは各地域の地形条件や海底の形状によって異なる。リアス式海岸の気仙沼市ではすぐ近くの山や丘、標高の高いところに必死で逃げる必要があった。しかし、遠浅海岸の仙台市では6m程度の津波であったが平坦地で標高の高いところがないため、海岸から4km内陸の高規格道路まで逃げるか、小学校の屋上に避難するしかなかった。防災教育において逃げる事は大切だが、そのためには地域の自然条件や社会条件をしっかりと理解する学習が必要である。

復興教育においても、地域経済や地域環境の構造と関係性の理解が求められる。地域の環境や景観を踏まえた復興を目指す時、生態系サービスの一環として300年以上管理維持されてきた海岸林やいぐねの仕組みを、現代の防災の土地利用にどのように組み入れるかは課題だ。単純に復旧する事は難しいが、環境を保全し、かつ歴史的遺産である黒松の海岸林やたくさんの樹種によって構成される仙台の伝統的な景観であるいぐねの考え方

を取り入れる事も、復興教育の教材作りに欠かせない。地域住民からのヒアリングや地元学を通じて、地域社会との連携を踏まえた地域学習に取り組んでもらいたい。

防災教育や復興教育の目標は、子ども達が地域で生きる展望を持つ事にある。自分達が住む地域の実態を明らかにし、持続不可能な地域の課題を整理し、持続可能な地域社会を創造できる学習プログラムを検討していく事が重要だと考えている。

振り返って

震災があろうがなかろうが日本は高齢化している。どうにかして地域を活性化しなければならない。例えば、復旧だ復興だと海岸地域に家建てて、おじいさんやおばあさんを住まわせても地域活性化はできない。高齢化している事には変わらない。復旧、復興とは前の高齢化社会をつくる事なのだろうか。そのような社会をつくっても、あと10年もすればその集落はなくなってしまう。今まで子ども達がたくさん育ってきた場所ではあるが、皆が地元に住むわけではない。東京や仙台など地域の外に行ってしまう。田舎に帰る事、住む事も流行っているが、地域のコミュニティに馴染めず出ていく事が多い。そこで、若者が来て、その地域が再構築される仕掛けを作る事で復興につながると考える。若者は近所や通勤圏にまだいる。高齢化集落であっても、息子達が週末に帰ってきて田植えや掃除などを手伝ってくれる環境がある。もしかしたら、その中の何人かは集落に残ってくれるかもしれない。子ども達、孫達と一緒に遊びに来てくれ、その地域に関心を持ってくれるかもしれない。地域を活性化させるために、例えば、子どもや孫や孫の友達が遊びに来た時に泊まれる施設を作っておくなど、帰ってきた人を受け入れられる態勢を整えておかなければならない。



撮影：2011.5.24 宮城大学 学生ボランティアによる瓦礫撤去

ネットワークを維持するために必要な事だ。もしかすると、登校拒否をしている孫が来る事があるかもしれない。子ども達が故郷に帰る習慣をつけると、帰ってきた時に地域が活性化する。さらに、受け入れ態勢を整えておく自分の家族だけでなく、他人を受け入れる仕掛けもできるようになる。受け皿を作っておく事が大切だ。被災地域も自分達の地域資源を評価し、地域資源を使って外に出ていった子ども達とのつながりを維持しておけば、地域は活性化できるかもしれない。活性化のビジョンを思い描く事は簡単だ。しかし、ビジョンを形にする事は難しい。ビジョンを実行するために何をやろうとしているのか、どんなシステムが必要なのかを明確にして、はじめて人が集まってくる。交流人口が大事なのは当たり前だ。交流人口を維持する仕組み作りが重要だ。地域活性化について考える事はすべて、持続可能な社会をつくる事に他ならない。



撮影：2011.4.5 震災直後のいぐね



撮影：2011.5.24 震災直後のいぐね

個人

人と人、人とコミュニティを「つなげる」

仙台市

鈴木 悦子 オフィス e

取材日 2013.11.12

宮城県仙台市の地域FM局「ラジオ3」において、番組制作プロデューサーやパーソナリティーを務める。人と人、人とコミュニティなどをつなげる事をコンセプトとして、さまざまな分野の「人」にスポットを当てた情報発信を行なっている。東日本大震災後、対話を通して多くの被災地を取材し、発信した。

3月11日 14時46分

3月は毎週木曜日に東京で仕事があり、金曜日は移動日だ。普段であれば新幹線か高速バスで移動している時間帯だったが、たまたま自宅にいて電話で仕事の打ち合わせをしている最中に地震が来た。受話器の向こうのお客様と「揺れているね」と笑いながら話し、最初はいつもの地震と同じ感覚でいたが、揺れが長くなってきたので電話を中断した。すぐに携帯電話とラジオを持って庭に出た。ラジオからは「地震です」と聞こえたが、詳しい事は分からなかった。すごい揺れで、何かの乗り物にでも乗っている感覚だ。身をどこに置けば安全なのかを考えた。隣の家の娘さんも外に出てきた。道路の真ん中が安全だろうと思い、隣の家の子と一緒にじっとしていた。地べたに手をついた状態で、立つ事ができなかった。倒れてくる物がないか心配で周りを見渡すと、家はさほど揺れているようには感じなかったが、電信柱と木がものすごく揺れていた。

たまたま地盤がしっかりした住宅地だったようで、自宅は何の被害もなかった。家具が倒れる事もなく、カウンターや出窓に置いてある物が落ちた程度だ。近所のお宅でも瓦が落ちた様子もない。他の地域はどうなっているのだろうと思った。宮城県沖地震では建物の倒壊被害が大きかったので、同様にひどい被害なのではないかと危惧した。少し時間が経って、ラジオから「津波が来る可能性があります」と流れてきたが、まったく危機感はなかった。携帯電話のワンセグでも情報収集をしていて、仙台空港に水が入ってきたというニュースを見た。ところがワンセグは画面が小さいので、その様子は膝下ぐらいの水位に見えた。電池が無くなってしまうと思ったので、そこで見るのをやめてしまった。

5～6年ほど前、近所のスーパーマーケットが無くなってしまったこともあり、普段から多めに買い物をしていた。缶詰やカップラーメンなどの食料を十分に備蓄している。また、非常時のためにカセットコンロ、石油ストーブ、ペットボトル



の水が備えてあり、浴槽にも水を溜めていた。そして、父が備えを怠らない人だったため、懐中電灯が家の各部屋に用意され、乾電池もきちんとストックされていた。支援が来るまで、最低でも3日は自分でしのげるように備えをすべきだと感じた。また、震災以前に宮城野区のまちづくりをお手伝いした時に「防災の日」の催事の司会をした事がある。毎年「防災の日」に非常時の対応や備えなどを取材して、その様子を生中継していた。その時の知識が刷り込まれているので、無意識のうちに非常時に対する意識が高まっていたのかもしれない。一度でも聞いておく事は役に立つのだと思った。

カセットコンロを使ってインスタントラーメンを作り、器にラップをして食べるのももったいないと思ったので、鍋からラーメンをすすった。主人と2人で「この年でこんな仲良くラーメン食べると思わなかったね」と話しながら過ごした。

大切な友人との再会と支援活動

地震の次の日、名取市閑上に住む40年来の友人が心配になり、電話をかけた。無事が分かり安堵していると「名取市文化会館に避難している」と言う。3月13日、友人に会いたい一心で避難所の文化会館へ向かった。友人から話を聞くと、地震後に花京院から閑上まで歩いて帰ったが、自宅

まではたどり着くことができず、文化会館に避難したそうだ。12日に見つかった娘さんは自宅の部屋のロフトに登って間一髪で津波から助かったらしい。避難所には家族や大切な人が見つからない方々が溢れていた。しかし、泣き崩れている人はいない。情報があまり無かったので、誰もが状況を受け入れられていないようだった。会話の中で「おばあちゃん見つからないの」「息子夫婦が見つからないのよ」と聞こえてくる会話が、あまりにも淡々としていて驚いた。地震のあとのラジオ放送で津波に関するニュースを聞いたが、これだけの被害とは思ってもよらなかった。避難所でたくさんお話を聞き、大変な事が起きたのだと認識したが、現実を受け止める事はできなかった。友人が背広に中学生のジャージを着て、革靴を履いた20代半ばの男性を連れて来た。「家に使っていないパーカーやスニーカーがないかしら」と言うので、明日持って行くと約束した。たまたま子どものスニーカー、新しい下着、靴下、タオル、セーターなどがあつたので、大きな袋に詰めて次の日も再び自転車で避難所へ向った。友人から電話で必要な物のリクエストも来た。また、たまたま田舎に知り合いがいて、段ボールいっぱいの野菜を届けてくれたので、おひたしや一夜漬けを作って届けたら、「菓子パンとおむすびの日々だったので、すごく嬉しい」と喜ばれた。そうした、自宅と避難所を行き来する生活が1週間ほど続いた。日本の機動力は素晴らしい。特に企業の対応には本当に驚いた。主人の会社は神戸に本社があるのだが、次の日にはトラック何台かを連れて食料や毛布、紙おむつなどの支援物資を届けてくれた。しかしながら、名取市文化会館に約1週間通い、自分の役目は終わったと感じていた。地震から5日ほど経つと、避難所には段ボールに詰められた古着などが山のように届いた。現地で必要な物は日が経つにつれてどんどん変わり、呼びかけた支援物資を持て余すこともあった。現地の方は簡単には「〇〇が欲しい」「もう〇〇は必要ない」と主張できないと思うので、そこは第三者のボランティアや地域のリーダーの力が必要だと感じた。これからはそうした部分を社会で構築していく必要があると思う。

ラジオで被災各地の様子を発信

大震災が発生してからのラジオ放送は、すべて震災関連の内容を放送する事になった。2011年3月11日～4月初旬までは、給水や食料を手に入られる場所など生活に必要な情報を流した。4月からスタートする予定だった新番組は、ほぼ決まっていた放送内容を変更し、音楽やトークの間に被災地の状況やボランティア活動、支援物資の



撮影：2011.4.26 宮城県名取市関上（EPO東北スタッフ撮影）

呼びかけなどを発信した。それぞれの番組のパーソナリティーが雄勝や女川などで支援活動に関わっている方々だったので、支援活動に携わる方をどんどんゲストに迎えた。担当していた5～6本の番組のすべての企画が当初とは変更になったけれど、パーソナリティーが活かされ、スポンサーも納得できる番組を制作しようと切り替えた。スポンサーの許可を得て、3月22日から収録を始め、4月1日から放送を開始した。1年以上に渡り、徹底して被災地関連の内容を放送し、現在でもコーナーとして残している。

また、自衛隊の支援活動について、支援活動の現場と電話でつないで放送した。2003年から県内5局で「自衛隊インビテーション」という特集番組をプロデュースしている。自衛隊宮城地方協力本部の放送する情報番組で、自衛官募集情報やイベントなどの紹介を行なっている。普段は自衛隊宮城地方協力本部広報が原稿を作り、検閲、許可を得てから放送している。しかし、震災時には広報班長と私が原稿を作成し、被災地で支援活動をする自衛官のインタビューなどを通じてスピーディーな情報発信を実施した。また、ラジオ3の放送時間内では週3日、現場と中継をつなぎ、他県からの支援部隊の隊員の方々へインタビューした。どちらから来たか、現在どこでどのような事をしているか、お話をもらった。インタビューはいくつか質問事項を用意しただけで、なるべく自衛官の方々の生の声を放送できるようにした。自衛隊がこの放送形態を許可した事は、すごい判断だったと思う。

被災された方々に寄り添うとは

地震から2週間後、多賀城、仙台港、関上の日和山、亘理、山元などの津波被害の大きかった地域を回った。被災地に入ると、津波が来た時にその

土地で何が起こり、人々はどのような気持ちだったのだろうと思いを巡らす。しかし、いくら被災地を見ても、津波被害に遭った方々のお話を聞いても理解できなかった。テレビなどでさまざまなシミュレーションが放送されているけれど、波の大きさは想像できない。おそらく実際は人の想像をはるかに超えたものなのだろう。

仮設住宅の集会所で取材をした時に、手仕事をしているおばちゃん達の中に、男性が1人いたのでお話を伺った。話を聞くと、震災で娘さんと奥様を亡くされたようだ。彼は「家において娘の写真を見るのが嫌だから、集会所に来て作業すると気が紛れる」と言った。この震災で大切な人を失ってしまった方々の事を考えると本当に心が痛い。気持ちの行き場がないだろうと思う。いつも一緒にご飯を食べている人を突然失う事は、身体の一部をもぎ取られるような苦しみだろう。もしも自分だったら、生きていくための気力をどう持てばいいのだろうか。そうした方々のために何もできない自分がもどかしい。

大切な人達を思い、これまでの思い出を支えにして生きてほしい。この方には何が必要なのだろうか。義援金やボランティアはもちろん必要かもしれないが、生きていくために自分を奮い立たせる精神的な支えを見つけ、作っていくサポートを周りの人がどうできるのかを、皆で考えていかなければならないと感じた。

情報を発信する側の課題

これからのコミュニティFM（災害FM）について考えていきたい。大震災後、多くの災害FMが開局した。ラジオでの情報発信の良い点はたくさんあるが、本開局は非常に資金がかかる事なので真剣に考えなければならない。これまで情報を得るにはテレビが主だった。少しでもラジオを身近にする必要がある。特にコミュニティFMは周波数が弱いので、工夫して使わなければならない。常日頃ラジオを聞いていない人が緊急時にコミュニティFMを聞くのだろうか。

災害発生後の時間経過に伴った情報発信のあり方も考えていかなければならない。直後の混乱期には道路事情もあるが、広報車のようなもので直接情報発信を行なう方が受け手に伝わりやすいかもしれない。また、その時期はコミュニティFMよりも、東北放送などの県内全域を放送対象とするラジオの方が、日頃ラジオを聞かない人も周波数を合わせやすい。コミュニティFMは1週間ほど経過してから、地域の状況や給水場所など細かい情報を発信するのに適しているとも思う。求められている情報をスピーディーに届けるために、ラジオの放送対象の広さによって、緊急時の役割を

考えていかなければならないと思う。

大震災を振り返って

これまで人と人、人とコミュニティなどを「つなげる」事をコンセプトとして掲げ、ラジオの番組制作やパーソナリティーに取り組んできた。どこかの局などには所属せずにフリーランサーだったのは、その方がいろいろな場所や組織に入っていけると思ったからだ。15年ほど前から制作を担当している番組「トーク&トーク」では、NPOで活動するボランティアやスタッフをピックアップして、その方の活動に取り組むきっかけや活動内容などを伺い、「人」にスポットを当てた情報発信を行なってきた。団体の代表はメディアに取り上げられる機会があるが、現場で動く方々が取り上げられる事は少ない。NPOとは一体何なのか完全には理解していないながらも、発信する必要があるとずっと感じていた。

同様に、震災に関連する情報発信も「人」にスポットを当てていきたい。2年半以上が経過し、被災された方々がどのような想いを抱えているのか、小さな声を伝えていきたいと思っている。震災後すぐにお話を伺った方に再び取材をして、変わった事や変わらない事を発信していきたい。現在、宮城県では求人が多いが、短期の仕事が多いようだ。しかし、被災した方々が求めているのは長く働ける職場だ。そうしたミスマッチが起きている事を多くの方に認識してもらいたい。皆で被災した方々が求めるものを長い目で考えなければならないと思う。また、現地で活動するボランティアの方の声も伝えていきたい。ニーズがなくなったから規模を縮小したのではなく、予算が切れてしまったためにやむを得ず縮小している活動も多いようだ。組織の代表の方からお話を伺う事はもちろんだが、現場で動いている方々の小さな声も発信したい。行ってみてお話を聞かないと分からない事が多い。そして、同じボランティアの立場でも、感じ方や想いは全く異なる。そうした光の当たらない部分にスポットを当てていきたいと思っている。

震災を通して、究極の場所で生きる人間の姿を見た。世の中は本当にいろいろな事があって、いろいろな人がいる。「想定」も「まさか」もない。人間ってやっぱり心だなと思う。災害は大きな被害をもたらしたが、一方で幸せは無限大だと感じた。ろうそくや懐中電灯の明かりのもとで缶詰のご飯を食べ、皆が小さな事で幸せを感じた。人間は裸で生まれ裸で亡くなるのだけれど、地位や名誉やブランド品で自分を飾る必要はなく、自分を飾るものが何も無くなってしまう事は怖い事ではないと分かった。

取材した中で、仕事を辞めて仙台にボランティアに来た20代後半の若い方にお話を伺った。その方のお話を聞いていたら、自分の仕事も何もかも投げ打って、被災地で一体自分に何ができるのかと、真摯に向き合っていてすごいと思う。同時に、これから若い人達に向き合い、背負っていかねばならない「3.11」はとても大きく重いものだと感じた。津波を経験した子ども達も「怖い」という感情だけではなく、何か抱えるものがあるのではないだろうか。子ども達、若者達を大人が良い方向に先導してあげなければならないと思う。

自分のこれまでを考えると、たくさんの疑問と混乱の中で生きているようだ。振り返りもせずに、無我夢中で走ってきた。震災の事が理解できない自分がいる一方で、街中での祭りや日々の楽しさを満喫している自分がいる。もしかしたらこう

した現実を見て、被災した方々は心では置き去りにされているように感じているかもしれない。温度差が生まれてくる事が心配だ。さまざまな立場の人が震災とどう向き合っていかなければならないのか。もう少し時間が経てば、また新たな課題が出てくると思う。この震災の経験を後世にどう残したらよいのか、私のように大きな被害もなく、大きな地震だったとしか感じなかった人にこの現状をどう伝えたらよいのか。自分にできる事は、1人でも多くの人の声を発信していく事だと確信している。私はその方々の想いを代弁する事はできない。だから、お許しをいただける限り、いろいろな体験をした方々の小さな声、想い、考え、生き様を多くの人に届けていきたい。「あ、鈴木さんにお話し聞いてもらったなあ」と少しでも取材を受けてくださった皆さんの心に残ればよいと思っている。



撮影：2011.3.13 避難所の仙台市立東仙台中学校で給水を求めて並ぶ人々…6時間待ち（相蘇裕之さん提供）



撮影：2011.3.17 温かいお湯でシャンプーサービス1,000円（足立千佳子さん提供）



撮影：2011.3.12 宮城県名取市 関上店（みやぎ生活協同組合提供）



撮影：2011.3.14 宮城県仙台市 富沢店の店頭販売（みやぎ生活協同組合提供）

NPO

震災後の生活をジブンゴトとして全国に伝える

仙台市

佐藤 正実 NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台

取材日 2013.12.02

NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台 副理事長。2006 年から「仙台の原風景を観る知る」をテーマに、懐古写真集や絵葉書・古地図復刻等を出版。2009 年 NPO 法人を 3 社で設立。2010 年 4 月市民が提供した昭和の写真を中心に「クラシカルセンダイ」出版。2011 年 4 月震災記録を Web に掲載。2012 年 3 月「3.11 キラクのキロク」出版。震災後の今を記録する「3.11 定点観測アーカイブ」の活動を行なっている。2013 年度仙台市震災メモリアル等検討委員会委員。

「NPO 法人 20 世紀アーカイブ 仙台」設立

仙台の古い写真や地図に興味があり、その出版に関わる仕事をしていた時、2つの会社と知り合った。1つは、NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台理事長の坂本が経営する（有）クリップクラブだ。テレシネという 8mm のアナログ映像をデジタルに変換する作業を仕事の 1 つとしていた。もう 1 つが、昭和 30 年代から仙台のテレビの CM ソングを作った東北放送施設（株）だ。どちらも昔の仙台について知る事ができる素材を持つ会社だった。

2008 年 10 月 18 日、3 社合同で「第 1 回ホームムービーの日」を仙台市歴史民俗史料館にて開催した。「ホームムービーの日」とは家庭で撮った 8mm フィルムなどのプライベート映像を持ち寄り、皆で観て楽しむイベントである。国際的な催しで毎年 10 月第 3 土曜日に世界中で開催されているが、東北ではほとんど知られていなかった。これに参加するかどうか 3 社が集まり相談した結果、仙台でも開催する事を決めた。このイベントの共催がきっかけで 2009 年 6 月に設立したのが、NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台だ。

NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台は、古き仙台はどのような街だったのかを分かりやすく市民に伝え、過去とのつながりを実感できるようアーカイブ（記録）化し、後世に引き継ぐ事を目的に活動している。それぞれの会社が持つ写真や映像を高齢者施設などで上映し昔の話を聞いたり、小学校では社会学級の一環として映像を観て楽しんでもらった。その後、三越や藤崎、さくら野など百貨店でも展示するようになった。

私は仙台を本の都にする事を目的とした「Book! Book! Sendai」という会のメンバーでもある。2010 年に、8mm 映像を流し写真を展示するイベントを行なった。年配の方だけではなく若い世代の参加者も多く、昭和 30 年代の仙台の映像を流すと、当時を知る年配の方々が解説役となり、若い世代はその解説を聞く役となった。どちらも同



じ参加者なのだが、同じ写真素材でも一方は懐かしく、一方は新鮮に思える。このような世代間交流を目の当たりにして、これは面白いと感じた。自分の親や祖父母の昔話は「また始まった」と思って素直に聞けない場合が多いかもしれないが、他の方の話なら興味深く聞く事ができる。真摯に話を聞いてくれるから年配の方々には嬉しいし、若い人達も見聞きした事がない話が聞けて楽しい。そうした、同じ写真だけでも、それぞれ違った楽しみ方ができる世代間交流を促す場を提供してきた。

3月11日 14時46分

足を骨折して入院しており、3月11日はちょうど退院日だった。着替えが済み、退院する準備を終えて、4人部屋の病室でお世話になった方々にあいさつをしながら妻の迎えを待っていた。ちょうどその時に地震が来た。とても長いし、どんどん揺れが大きくなる。通常、地震は1分で揺れが収まると言われているが、その時は3分も揺れていた。1回目の揺れよりも2回目の揺れの方が大きく、本当に地球が壊れてしまうのではないかと考えた。普通の健康な人でも立っているのが難しい状態で、松葉杖の私はベッドに投げ出された。そのあと妻が迎えに来て、車で自宅に帰った。帰宅中にラジオで6mの津波警報が発令されてい

る事を知った。入院していた病院が海岸線から約5kmの場所にあったので、津波が来て大丈夫なのかと心配になった。直後に津波の高さが10mに変わったとラジオから流れた。10mだったら4階建ての3階部分に住んでいる自宅も津波の被害を受けてしまうかもしれないと、妻と話しながら家路についた。

当時、子ども達は中学生と小学生で学校に行っていた。小学校からは保護者への子どもの引渡しはあとになると言われたため、とりあえず家に帰る事にした。帰る途中、コンビニエンスストアが開いていたので、立ち寄って家族4食分の食料を買った。調理をせずにそのまま食べられる冷たいソバやパンなどを買った。帰宅してみると予想通り家具や本棚などが倒れていた。相変わらず余震は続き、携帯電話の地震速報やサイレンがずっと鳴りっぱなしだった。自宅は川が合流する中洲のような場所にある。昭和61年の大雨の時に冠水しているので堤防は嵩上げしてあるが、川の水は黒色に変色して増水しながら逆流していた。目の前の光景を見て、決壊してしまうかもしれないと思った。

子どもが通う高砂中学校は津波によって冠水し、校庭に駐車していた車は使えなくなってしまうていた。発災当日、迎えに行こうと思っていたが、そうした学校の状況を近所のお母さん方の口コミで知り、学校には近寄れないと聞いたので、次の日に迎えに行く事にした。子どもの話を聞くと、残った先生と生徒達は3階に逃げ、一晚を過ごしたそうだ。

震災後、自宅は電気やガスが止まってしまった。電気が復旧したのは発災から1週間後の3月17日だった。住んでいたマンションは、電動ポンプで水を汲み上げるタイプだったので、電気が復旧しないと水も出ない。ガスも都市ガスだったため、3月末まで使う事ができなかった。それまでは灯油ストーブを活用した。灯油ストーブでお湯を沸かしてカップラーメンや鍋を食べる事ができたし、沸かしたお湯を使って体を拭く事もできたので、大活躍だった。

以前読んだ阪神淡路大震災の本の中に、発災から約1ヶ月間を指す「震災ユートピア」という言葉が書いてあった。隣近所と声をかけ合ったり、物々交換をしたり、そうした本来人間が持つ優しさがクローズアップされる時期をそう呼ぶのだ、と記されていた。電気やガスなどの社会インフラが戻ってくると次第にそのユートピアが薄らいでいくとあったが、読んだ当時はピンとこなかった。東日本大震災が起き、震災ユートピアは本当にあるのだと感じた。非常時でなければ、「皆が持っている野菜などを町内会の会長さんの家に持ち寄って炊き出しやろう」という事はまず起こらな



撮影：2011.3.14 停電の中での夕食
皿にはラップを敷いて食事（木谷智寿さん撮影）

い。水も食べ物も不足している生活で、助け合いの力を感じた。そして、確かに電気、ガス、水道が復旧してくると、声のかけ合いや物々交換は無くなっていった。

震災の画像を収集

私はツイッターをしていたので、携帯電話が使えるようになってから頻繁に自分の状況を掲載したし、他の方もさまざまな情報を掲載していた。ツイッター上で、開いているお店の情報や水が出る公園の情報など、仙台市内や身近な人達の情報がどんどん掲載された。当時、ラジオはそうした情報は流す事はなく、福島第一原子力発電所の事故に関するニュースや「〇〇さんがいません」「△△さんを知りませんか」という話を中心だった。そうした情報が必要な方もいたのだろうが、私はどこで食料が手に入り、どこで水が出ているのかなど、生活に関わる身近な情報が欲しかった。同じように感じている方々がツイッターに生活情報をあげてくれたのは助かった。

ツイッターには情報やコメントの他、写真も刻々とアップされた。それを見ていて、1995年の阪神淡路大震災発災後、震災の様子が写った写真を大量に集めたけれども、いつ、どこで撮影したかの情報が乏しかったために、活用しにくい資料になった事例をふと思い出した。その当時はフィルムカメラを使っていた時代で、携帯電話どころかデジタルカメラもない。写真を集め始めたのは、阪神淡路大震災が起きてから5年も経てからだった。5年も経ってしまうと、建物が倒れていた場所は更地になり新しい建物が建つ。そうなるからでは、どの場所を写した写真か分からなくなってしまう。写真を撮った本人が分かればよいが、本人ですらその場所が分からなくなるかもしれない。撮った場所と日付という最低限の撮影情報が分からなければ、その写真の資料的価値は無く

なってしまう。そして、このツイッターに掲載される画像は集めておく必要があるのではないかと思ったのが、2011年3月22日の事だった。

3月22日の夜に仙台市内および周辺市町村で撮った写真を撮影者名（ハンドルネームでも可）、撮影場所、撮影日時の情報と共に私宛に送って欲しい旨をツイッターに投稿した。その後、何名かの方が反応してくれて、写真を送ってくれた。

2011年4月1日、震災後、初めて事務所に行った。簡単でもよいから、まずは提供してもらった東日本大震災の画像を掲載するウェブサイトを作ろうと思った。最初に集まった約350枚の画像を地域ごとに分けて、日付順に並べ整理をし、4月8日にウェブサイトを立ち上げた。

震災の写真というと、津波被災や損壊した建物の写真をイメージすると思うが、そうした写真は新聞記者やテレビ局が集めている。私達が集めなければならないのは、震災の中の生活ぶりが見える写真ではないかと思った。しかし、震災の写真を募集してみると、提供を受けるのは被害の様子を写した写真が多かった。そこで私自身が携帯電話で撮った、震災の中の生活が分かる写真をウェブサイトに掲載した。

震災の中の生活の写真を集めた理由は、3月11日を境に非日常の生活があった事実を残しておきたいと思ったからだ。例えば、昭和20年の仙台空襲に遭った焼け野原の写真を見て、戦争を体験したおじいちゃんやおばあちゃんは、私達に戦争の話をしてくれる。戦争を体験した世代の方々に話を聞くと、今回の震災よりも戦後の方が大変だったと言う。食べ物や全く無かったからだそう。しかし、戦後を知らない私達は、どのような生活をしていたのかが実感として湧いてこない。映画やドラマのような、いかにも作られた映像だと現実味がなく、肌感覚として伝わってこない。だからこそ、生活ぶりが分かる生の画像や映像が大事だと感じた。

防災マニュアルには、3日分の食料や水を用意すべきと書いてある。これは震災の経験から作られたマニュアルだ。しかし、被災していない地域の方々には、これらが必要な理由が十分に伝わっているとは思えない。例えば、集めた写真の中にバスユニットの中に雪を入れている写真がある。これは、雪を溶かして生活用水にするためだ。他にも、ろうそくやランタンを灯して家族で夕食をとっている写真や、食器洗いに水を使わなくても済むように皿にラップを敷いている写真もある。マニュアルにラップが必要と書いてあるが、何に使うのか分からない人でも、この写真を見れば一目瞭然だ。普段ならば年中24時間開いているコンビニエンスストアが、震災時は段ボールなどで目張りして閉店している事も写真から分か

る。被写体にカメラを向けて写真を撮るという事は、当然何らかの意味がある。その写真の裏には嬉しかったり、辛かったり、苦しかったり、という撮った人の何かがあるはずだ。それらを撮った背景を紐解けば、災害時に何が必要だったのかという防災マニュアルの裏づけにもなると思っている。

東日本大震災で終わりではない。非常時は全国で起こり得る事だ。その時にどのような生活が強いられるのかをイメージしてもらう事は、とても大事だと思う。

震災後の生活ぶりを全国に伝える

2011年の冬、集めた画像をパネル化し、展示会の開催をFacebookで呼びかけた。パネルは被災の様子が分かるものと、非常時の生活の様子が分かるものを半分ずつ用意した。北海道から沖縄まで全国から希望する声があり、累計110か所で展示を行なった。パネル展示を行なった事で、全国から多くのコメントをいただいた。一番嬉しかったのは「震災時の生活ぶりがよく分かった」というコメントだった。

パネル展を行なう会場で時々お話をさせていただく機会があり、震災の中の生活をテーマにした写真を見てもらいながら話をした。関西で展示会を行なった時は、震災後の美容室の写真をお見せした。扉に「シャンプーサービスを行ないます」と貼紙がある。ところが、その写真を見ても、皆さんピンとこない顔つきで、なぜこの写真が震災の写真なのかと聞かれた。プロパンガスではない都市ガスの一般家庭では、1ヶ月以上ガスが復旧しなかった。そのため、お風呂に入れない人が多く、プロパンガスを使っている理美容室で髪を洗うサービスが行なわれたと話し、やっと納得して



撮影：2011.11 宮城県仙台市 藤崎での上映・展示会

いただけた。生活ぶりを伝えて初めて分かる事も多い。だからこそ具体例として写真をお見せし、言葉を付け加える。自分も逆の立場だったらそう思うのだろう。多くの人が、自分の地域ではまさか起こるわけがないと思っている。これは、健康体の人が自分は病気になるとは考えないのと同じだ。震災後の生活の写真を見る事で、初めて“ジブンゴト”にするきっかけになるのではないかと考えている。

2013年3月、集めた画像と震災体験をまとめた書籍「3.11キヲクのキロク～市民が撮った3.11大震災 記憶の記録」を発刊した。マスメディアが市民生活に入り込む事はあまりない。だから、出版するものには悲惨な画像が多く、当然ながら生活を写したものはほとんどない。マスメディアと市民メディア、それぞれの役割はあるのだが、東日本大震災の壊滅的なまちの様子の写真、泣き崩れる家族の姿、自衛隊の救援活動、避難所での不安な生活、最後に公園で子ども達が元気に走る写真で希望を示す…ような、作ったストーリーに合わせて震災写真をはめ込んでいく編集に、私は馴染めない。

東日本大震災で起きた事実にストーリーをつけるほど、まだ年数は経っていない。全体像を把握してきちんと編集する事ができるようになるのは、おそらく10年～20年後の事だろう。事実を客観的に見る事ができる時代が来て、初めてできるのだと思う。将来の人々が3.11を振り返った時にミスリードをしないよう、注意が必要だ。脚色された震災に関する本や資料の方が見慣れている全国の方々は、「こんなにひどかったのね」「かわいそうだったね」と思ってくくださるかもしれない。しかし、それでは非常時の生活ぶりは伝わらないままだ。だから、「3.11キヲクのキロク」では編集でほとんど手を加えず、地域毎に日付順に並べ、生の状態のままパッケージにした。

本の後半に、写真を提供してくださった方々へのインタビュー記事を書いている。東京の方にライターとして協力していただいた。震災を経験した地元ライターに依頼しなかったのは、1つはまだ発災から半年後で気持ち的に大変だろうと思った事。もう1つは「震災ってこういうもの」という体験や先入観を持っていない方が客観的な体験談になると思ったからだ。お願いした方は毎週仙台に足を運んでくださった。決してお涙頂戴的な内容にするのではなく、その方のありのままの体験談としてまとめようと話し合った。

全国の方にこの震災を自分の事のように考えて欲しいし、次世代に伝え、未来に課題を託したいからこそ、写真を残さなければいけないと思っている。“非”被災地の人と次世代は、「震災を体験していない」という点で共通していると思う。よく



撮影：2013.9.28 宮城県仙台市
もういちど見てみよう3.11ツアー（若林区荒浜）

後世に残すと言うが、私は「後世の人」と「非被災地の人」に伝える事は同義だと思っている。

震災を後世に伝えるには

伝える活動は、20世紀アーカイブ仙台のスタッフや同世代のみの活動であってはならない。大学生など若い人達と共にプロジェクトを立ち上げて行なうべきだと思っている。一緒に考えて、なぜやらなければならないのか、私達がなぜそう思っているのかを伝えつつ、どう解釈して活動につなげていくのか。互いに影響し合いながらプロジェクトを起こす事が必要だと思う。

2013年1月と4月に、大学のインターン生3人と「もう一度見てみよう3.11ツアー」を企画し、プロジェクトを立ち上げた。震災直後に撮られた写真と現在を見比べる、定点撮影を使った被災地ツアーだ。学生はどのようなコースをたどり、ツアーゲストに何を伝えたいのか、半年間かけてツアー企画を練った。仙台の街中から車で約20分の場所にある若林区荒浜地区や、訪れる度に変化する名取市閑上の日和山周辺など、仙台中心部からの距離感を考えながら、震災後に変化したところとほとんど変わらないところがツアーコースに盛り込まれた。そして、彼らは主催者としてツアーで語るべき事を考えるために、震災の事や地域の歴史など多くの事を学んだ。プロジェクトの立ち上げから半年後、仙台市内の留学生や県外の学生を対象に、全部で5回のツアーを行なった。ツアーを組み立てた彼らが半年間、被災地や地域について学んだ事は、震災に向き合った重要な時間だったと思う。彼らはまた誰かに、このプロジェクトで学んだ事を伝えるだろう。このような取り組みを、繰り返しいろいろな人達と行なう事ができるのなら、次世代にきちんと震災を伝えられると思う。後世に残す手段は写真だけではない。こうした活動で人々の思いや地域の変化を残していく

事ができると思う。だからこそ、世代に関係なく取り組む事が重要になってくる。

仙台を震災アーカイブの先進都市に

今後、3.11のための拠点が必要になってくと思う。いろいろな人達が自由に集まって語れる、資料を持ち寄れる、語る、見る、聞く、の常設の拠点だ。震災アーカイブに関わる団体が集まる機会はあるが、常駐スタッフがいて、震災について話す事ができる、自由に出入り可能な市民の交流の場が仙台にはまだない。「震災メモリアルセンター」のような施設はいずれできると思うが、それを待たずに、小さくても皆が集まって震災を語れる場所が必要だと思っている。

今後の一番の課題は「活動の継続」だ。そのためには活動費用も必要になってくる。震災後、さまざまな補助金や助成金が出されたが、2年半以上が経ち減少もしている。目新しい活動には活動助成もあるだろうが、震災を語り合う事や写真を撮り続ける事はルーティンワークの1つと見なされやすく、継続的に活動をする事が難しいのが現状だ。数十年規模で市民と一緒にやる震災アーカイブという活動を、やる気だけで続けていく事はできない。その意味では震災から3年を迎える今が正念場なのかもしれない。

継続する事で大きな意味を持つ活動もある。集めた写真の定点撮影を行なうために、去年も同じ場所で写真を撮った。変化のあるところ、変化のないところははっきりしている。3年後、5年後、どう変化していくのかを撮り続ける事で、将来的に防災・減災、まちづくり、教育などの分野で研究される素材にもなると思う。

被災3県の中で、政令指定都市は仙台市だけだ。仙台市が東北6県の経済、そして復興の牽引役を担うと同時に、震災復興アーカイブの先進的役割を担うべきだと思っている。仙台は過去何度も地震・津波被害に遭いながら、その度に立ち直ってきた。

19年前の阪神淡路大震災を例に挙げれば、非体験者がすでに人口の4割を超えたそう。今取り組まなければ、どんどん世代交代してしまう。「防災のまち仙台」のかけ声で終わるのではなく、100万人の体験と知恵を集め、今度こそ後世に震災の記憶と記録を残し、アーカイブを活用した全国一の防災都市になる事を願っている。



【定点観測】2011.3.21 海岸線から約3キロ先の仙台東部道路まで一面漂流物（名取）（撮影／三浦隆一さん）



【定点観測】2012.4.29 一年後、塩害処理作業が進む。まだ田植えはできない（撮影／NPO法人20世紀アーカイブ仙台）



【定点観測】2013.9.14 震災から2年目、除塩を終え青々とした田が広がる（撮影／NPO法人20世紀アーカイブ仙台）

協同組合

仙台市

忘れず、つながりをきらず、
伝え続ける事の大事さ

齋藤 昭子 みやぎ生活協同組合

取材日 2014.01.30

みやぎ生協は協同の力で人間らしい暮らしを創造し、平和で持続可能な社会の実現を目指している。人と人との多様なふれあう活動や暮らしを守る活動、子育て支援、食育活動、環境や平和を守る取り組み、ユニセフ活動、社会的弱者への支援など多岐にわたる活動に他団体と連携して取り組む。大震災後は被災者・被災地支援に継続して取り組んでいる。

3月11日 14時46分

みやぎ生協本部の理事長執務室にいた。今は建物が新しくなったが、当時は棟が2つあった。悲鳴と、バリバリとした音が聞こえた。つかまっていなければ立っていられないほどの大きな揺れだった。

本部には200人以上の職員がいる。3分近くの長い揺れだった。大きな揺れが収まったらまずは職員の安全の確保のために広場に集合した。全員が身1つで避難したため、寒い中でコートもなく、車の中に避難する事もできずにいた。ロッカーが倒れ、机や椅子が飛び、天井が落ち、階段が通り抜けできなくなるなど、一部が立ち入り禁止になるほどの被害だった。そこへ貴重品を探しに戻る、あるいは自宅へ戻るなど1人ひとりが行動をとるとリスクが高い。その間にも余震は続く。すぐには車の鍵、家の鍵、財布を取りに戻る事もできなかった。

みやぎ生協は当時48店舗あり、揺れが起きた時は店内にお客様もたくさんいた時間帯だ。職員が適切にお客様の誘導を行ない、来店中のお客様に1人のけが人も出なかった。宅配では配送の車400台が動いており、多くの職員が各地域を回っていたが、配達を中断し支部に戻るか、高台に自主的に避難していた。

夕方には災害対策本部を立ち上げた。ここには自家発電を備えており非常用電源がある。ここで初めて津波の映像を見た。第1波が来て、第2波、第3波が来て、しかも押して引いての津波の状況だった事は、その時点では分からなかった。通信手段が途絶えたために家族の安否を確認する事が大変だった。連絡がとれない事がどんなに不安かを思い知った。

まずは事業継続を

通信ができないため、2人1組の職員が各事業所の状況、職員の安否について情報収集にあたった。事業所の状況確認と共に、本部の指示を伝え



てもらった。まずは事業の継続だ。店判断で可能な限り店頭での商品供給を続けた。店舗は停電のため、レジが動かせない。余震も続いている。職員が店舗内から商品を運び出し、3月11日は発電機や車のライトを頼りに店頭販売を実施した店舗もあった。翌朝までに安否確認がとれたのは全10支部、48店舗中44店舗で、うち27店舗は地震発生当日も商品供給のために営業を続けた。私自身は対策本部に2日間ほど詰めていた。自宅はマンションの14階にあり、住める状態に戻すには1週間ほどかかった。それまでは車の中や友人宅で眠った。

みやぎ生協は県内22の自治体と災害時の応急生活物資協定を結んでいる。3月11日のうちに、津波で被災した亘理町からの要請でパン2,000個、水500ml 2,000本を届けた。あまりに被害が甚大で電話もつながらないため、当日のうちに衛星携帯電話などで要請が入ったのは亘理町と仙台市だけだった。翌日からは自治体の要請により、共同購入のトラックが水やパン、カップ麺、毛布などを各地へ届けている。行政からの依頼で店舗集会室を避難所として開放した店舗もあった。こうした行政からの支援物資要請へ迅速に対応するため、すぐに派遣常駐体制を敷いた。宮城県の災害対策本部で情報収集と調整を行ない、通行可能な道路情報を提供してもらうと同時に、宮城県警察からは災害時の支援活動に必要な緊急車両登録

を出してもらった。また、仙台市とは応急生活物資協定の他に女性や高齢者の避難所生活を想定した協定も結んでいる。赤ちゃんのおむつ、おしりふき、大人用おむつ、生理用品などを仙台市が購入し、みやぎ生協がそれらを備蓄して、必要が生じたら仙台市指定の7か所に搬送する、全国でもあまり例のない協定だ。

近いうちに宮城県沖地震が高い確率で起こると言われており、マグニチュード7.2、震度6の対応マニュアルはあった。今回はそのマニュアルでは不十分だった。通信ができず情報が把握できない、自家発電が不十分で燃料が確保できていなかった。メンバー宅の暖房用灯油を確保するために毎日県に通った事を覚えている。

そして、今回の震災で被害を大きくしたのは津波だった。名取市閑上地区の日和山のすぐ近くにみやぎ生協閑上店がある。2週間ほど過ぎてから閑上に行ってみた。実際に現場を見て、大変な災害であったと感じた。言葉が出なかった。暮らしがあり、希望があり、未来があったのに、一瞬にして失われた。表現できる言葉を見つけれなかった。あの災害で生き残った私達は、命を大事にしていかなければいけない。

印象に残っている全国からの応援

仕事柄、行政とのさまざまなパートナーシップがある。6月末から津波被災地を中心に、12市町の首長さんへお見舞いに伺った。各自治体には、全国の自治体から職員が応援に来ていた。被災者はまず自分達で何とかしようと頑張るが、どうしても生活の再建が難しい場合は自治体へ行く。その時に一番に訪れる1階の窓口に、「兵庫県」「佐賀県」などの腕章をつけた、イントネーションの違う方々がいた。被災された住民の方々にどんな支援ができるか、相談に来た住民をどこの部署に案内したらよいか、ボランティアが判断できる事ではない。まさに自治体同士のネットワークでしかない事であったと思う。どこの自治体に行っても、最初に被災者が行く、入ってすぐの1階窓口にいたのは、全国から応援に来ていた職員であった事が最も印象に残っている。

これは生協間も一緒だ。お店を開くにしても、商品が入荷して来たら陳列をしなければならない。それも安否確認や店の復旧をしながらの作業だ。同じ生協の職員だからこそできる支援であったと思う。また配達では、道路が寸断され、治安も悪く、配達員のほとんどは女性だったので、1人では配達や安否確認に行かせられなかった。そこで全国の生協から応援に来てくれた職員と一緒にトラックに乗り、共同購入登録者のもとへ水やバナナを届けるお見舞い活動をスタートした。



撮影：2011.3.12 みやぎ生協本部 救援物資配送

被災地で一番目にしたトラックは全国生協のトラックだ。大震災発生から1週間後には、全国からの支援がトラックごとやって来た。灯油、それからガソリンを積んだタンクローリーが来てくれた。全国の支援に先駆けてコープこうべの先遣隊が宮城に入ったのは、大震災発生から2日後の3月13日の事だ。現地で何が必要かを把握するために、自分達の寝袋や食糧、燃料などを全部持ってやって来た。そしてその2日後には、トラックで20名ほどの職員が応援に駆けつけてくれた。この全国のコープグループとしての支援体制は大きかった。これを可能にしたのは、日本生活協同組合連合会という全国規模のコーディネート機能があったからだ。そして、お取引先各社からの支援も忘れられない。それは現在も続いている。

大震災からの学び

3月一杯はガソリン、軽油・灯油が不足し、市民生活はもちろん復旧作業へも影響した。家庭内備蓄は1週間分、多いところでは3週間分と示している国家政策は多い。日本はそれを国として言っていなかった。最低3日分、ひもじくてもなんとか1週間分の備蓄は必要だ。ぜひ皆さんに、1週間分の家庭内備蓄をお願いしたい。そしてそれを無駄なく消化していくようにしてほしい。これは教訓だ。野外生活を体験する事も大事かもしれない。ライフラインが途絶えたその中で生活した経験は大きい。生活の知恵、生きる術は受け継がれていかなければならない。

そして、より協同組合の社会的役割を再認識した。支え合う事、人と人とのつながりが大事だという事、日常の活動がいざという時に大きな力になる事、これらを実感した大震災であった。大震災時はどういう人が地域にいるかが分からない。配達員など地域の皆さんの顔を知っている人達が地域の隅々まで入って行けるのは、生活協同組合ならではの事だと思う。みやぎ生協の場合は組合

員の加入率が7割で、宮城の多くの方が組合員になってくださっているため、生協を通じてのつながりが広く、密である。これから社会は1人暮らし、2人暮らしの高齢者が増えていく。人口は減っていくけれども世帯数は増えていく。地域コミュニティを維持していくうえでも生協の役割は大きい。

これはいつも職員に言っている事だが、支援をする人と支援を受ける人はいつでもその立場ではない。支援を受けているつもりでも、支援する人への勇気を与えている。支援をする側に立った人は、いつ受ける側に立つのか分からない。それが自然災害だ。支援をする人達が継続的にずっと現地に来ている事は、支援する人達にとっても、その体験や行動が自分にとって大切なものになっているはずだ。大震災からの復旧・復興の中で支援をする人も支援を受ける人も、その立場を越えて、友人として、仲間としてお互いに思いやる。その事が、人間として大事な事だと身を以て体験した。みやぎ生協では県内4か所にボランティアセンターを設置し、3年間継続して仮設住宅でお茶会を催している。最初は固い顔で参加していた被災者の皆さんが、お茶会が終わる頃には良い笑顔で帰っていく。センターで活動するスタッフはおそらく、支援しているという気持ちだけで活動しているのではないだろう。それが、今の社会ではとても大事な事だと思う。

宮城の場合、震災復興に10年かかる。仮設住宅に住む最後のお1人がそこを出るまで、私達はなんらかの支援を継続していこうと思っている。そしてそれは地域でのつながりや地域での活動がない限り、長続きするものではないとも考えている。

大震災を振り返って

生協を宮城県内で広く大きく展開していてよかった。生活協同組合があつてよかった。生協のお店やセンター、それらのつながりがあつてよかったと思う。災害は、予測しても防ぐ事はできない。減災しかない。日常から備えをし、発生した時は命を守る。そのためには1人ひとりに日頃から支え合う、協力し合う、優しさと強さが必要だ。行政はさらに強くなければならないと思う。起きてしまったからこそ、分かった事がある。あの日、あるパート職員は店長不在の状況の中、みやぎ生協のスローガン「1人は万人のために、万人は1人のために」を思い起こし、「阪神淡路大震災の時のコープこうべの職員のように動こう」と考えたという。私達は阪神淡路大震災で研修中に被災した職員や復旧応援で神戸に派遣された職員から報告を聞き、記録を読んでコープこうべの活動を学んでいた。その時の学びの記憶が、多く

の職員をこうした思いに駆り立てた事と思う。これが記録の力だ。これから、さらに大きな災害が起きるであろうと予測されている。その時のために私達が東日本大震災の中で体験した事を教訓としてお伝えしたい。そのために、みやぎ生協文化会館Withの中に「東日本大震災学習・資料室」を作った。忘れない事、伝える事、伝え続ける事、つながりをきらない事、そして情報を発信し続ける事、これらが今は一番大事な事だと思っている。特に福島のことを伝え続けなければならない。原子力発電所の事故で、エネルギーの問題は国民全体のものとなった。リスクのない、安全で安心なエネルギーでない限り、誰も責任を負えない。それを私達は教訓としなければならない。原子力発電がなければ、本当に暮らしも経済も回せないのだろうか。推進する側はバランスだと言うが、私達は原子力発電をやめる道筋をつけなければならないのではないのか。それは政治の責任である一方で、全国民が真剣に考えなければならない問題だ。人々の心を動かすものは何だろうと考えた時、人々の気持ちに強く印象づけるには絶えず伝え続ける事が大事なのだと思った。



撮影：2011.3.12 宮城県仙台市
みやぎ生協南光台店 店頭販売（みやぎ生活協同組合提供）



撮影：2011.5.16 みやぎ生協石巻大橋店 ふれあいお茶会

NPO

秋田で一緒に地域を考える仲間を増やしたい

横手市

奥 ちひろ NPO法人秋田県南NPOセンター

取材日 2013.08.22

NPO法人秋田県南NPOセンター職員。子どもの居場所作りに関心があり、玉川大学在学中の2005年からNPO活動に参加。大学卒業後は地元に戻り、同団体にて市民活動サポートセンターの運営、若者会議の企画・運営等を担当する。東日本大震災発生後は秋田県内のNPO、行政、企業、個人をコーディネートし、支援活動に取り組む。

秋田で中間支援に取り組む経緯

秋田県横手市で生まれ育ったのだが、地元で窮屈さを感じていたため、大学は東京都にある玉川大学を選んだ。しかし、いざ地元を出てみると、いかに秋田をアイデンティティーにしていたかに気がついた。自己紹介をする時は「秋田の私」を語るし、周りからもそう認知されていたと思う。自分とは何だろうと考え、最終的には自分は地元で育てられたのだと行き着いた。いずれは秋田のためになる仕事がしたいと思った。

一方、幼少期から抱えていた課題があり、自分と同じような境遇の子どもを増やしたくないと思っていたので、何か活動をしたかった。東京にはたまたまそうした課題を解決するために立ち上がった団体があり、すぐにその団体でボランティアをさせていただいて、大学時代は子育て支援の活動をした。世の中には行政と企業しかないと思っていたので、NPOという働き方がある事を初めて知った。行政ではできない、企業では利益にならないのでしない、隙間の事に取り組む組織がNPOだ。将来はそうした仕事に就きたいと思った。

活動していたNPOのスタッフから中間支援団体をご紹介いただいた。東京の子ども達は光化学スモッグの影響で気管支炎や喘息の子が多い。そうした子ども達を、福島県猪苗代に遠地療養させる活動のスタッフが足りないので、手伝ってほしいと言われた。そこで初めてNPOや行政と企業をつなぐ活動をする中間支援団体がある事を知った。その後、中間支援団体の代表が秋田県横手市で講演をすると聞き、「地元なので一緒に行かせてください」とお願いをした。その訪問先がたまたま現在勤めているNPO法人秋田県南NPOセンターだった。地元にもNPOや中間支援団体がある事を知って、とても驚いた。幸運な事にNPO法人秋田県南NPOセンターの方から「うちで働かないか」と声をかけていただき、大学卒業後は地元に戻る決断をした。



3月11日 14時46分

秋田県北、中央、県南地区の中間支援組織の集まりのため、秋田市内の公共施設「遊学舎」にいた。情報交換をしている時、急に揺れ始めた。電気はすべて消えたが、施設には非常時の電源があったので、テレビを見る事ができた。すると、テレビでは太平洋側の混乱した様子が報道され、「津波が予想されるので避難してください」と呼びかけられている。周囲では携帯電話で連絡を取り合う人やSNSで津波の情報を発信する人がいた。横手市の状況がまったく分からなかったので、家に帰れるか心配になった。公共交通はすべて止まっていたが、車で来ていたので横手市の自宅まで帰る事にした。街の灯りは消え、信号は機能しておらず、警察官が交差点で誘導を始めた。信号がないのですべての車が恐る恐る運転している。夜遅くにセンターに到着したが、すでに閉まっていたので帰宅した。

自宅は震災直前にオール電化に建て替えたばかりだった。停電のため暖房は使えない。とても寒かったが毛布にくるまるしかなかった。翌日は「若者会議」事業の活動発表会を控えていたので、明日はどうしようかと考えていた。

地域の若者のための場「若者会議」

「若者会議」は平成21年度から取り組んでいる事業だ。秋田県南地区（仙北、平鹿、雄勝の3地域）で中間支援に関わって驚いた事は、活動している方の多くが高齢者で、ボランティアや地域の事は高齢者が余暇でやるものと認識をしている方が多い事だった。東京では大学生も20～30代も学業や仕事をしながら活動し、それを仕事をしている方もいたので、ギャップを感じた。私は秋田を何とかしたいと思って地元に戻ってきたが、同じような志のある仲間が見つからなかった。そうした中で決まったのが「若者会議」だった。少子高齢化が進む中で、将来を担う若者が自分の住む地域について考え、話し合い、行動に移すプログラムだ。高校生から30代までを対象に市町村ごとに開催した。それまで若者が集まって地域の事を考え行動する土壌がなく、「若者会議」が動いた事で地域への波及効果が生まれた。地震があった翌日は、初めて市町村を超えて若者が集まる活動発表会を行なう予定だった。

翌日、センターに出勤したが、街のすべてがストップしていたので、委託元である秋田県と協議し、センターを閉めると決め、スタッフには自宅待機の指示が出た。「まずは自分、身内の安全を確保してください」という指示だった。誰も来ないだろうと思いつつも、念のため若者会議の会場に「延期」と貼紙をした。また、携帯電話が使えたので、メンバーにその旨をメール送信した。

コミュニティFMラジオの重要性

横手市は電気、水道、ガスはすべてストップした。大学時代の友人が心配して連絡くれたが、混乱していたためほとんど出られず、返信もできなかった。また、携帯電話は充電の問題があるので使う事に抵抗があった。インターネット回線はつながっていたので、SNSで情報交換や安否確認を行なった。市役所は非常用電源があり電気が通っていたので、たくさんの方が携帯電話の充電をしていた。電気は2～3日で復旧した。給水車が市内を走っていたので、水はバケツなどを持って汲みに行く人の姿があった。自宅には食料の備蓄が無いので調達しようとしたが、スーパーマーケットやコンビニエンスストアは長蛇の列ができており、商品はほとんど無くなっていた。備蓄していないと大変だとその時に初めて感じた。また、ガソリン不足が深刻だった。行きたい場所はあってもガソリンスタンドが閉まっていて給油できないので、何かあった時のために取っておくしかなかった。

横手市のコミュニティFMラジオは開局してまだ

数年しか経っていないが、身近な情報を得る事ができて便利だった。おそらくコミュニティFMが無かったら、全国や秋田県全域の情報しか得られなかっただろう。給水車が来る場所などローカル情報が得られたので、停電でテレビが見られない中、ラジオで情報収集をした。

常日頃のネットワークが重要

秋田県南地区では、企業が一番早くに動き始めたと思う。2011年3月19日、「やらねばね！横手(地震・災害支援の会)」が発足した。企業の方々の既存のコミュニティがベースとなって立ち上がった団体だ。車やトラック、食料などを所有していたところも多く、いち早く被災地の炊き出しや物資支援に向かっていた。特に印象に残っているのは、横手市の眼鏡店「レ・メエル秋田」が行なった「メガネ支援隊」の活動だ。被災した方々が見えづらそうにしている様子をテレビで見た同社の社員が、着の身着のまま逃げたため眼鏡がないのだと気づき、地震から2日後の3月13日、お店の商品を全部持って宮城県気仙沼市へと向かった。災害本部で活動許可と情報を得ると、避難所で眼鏡を必要とする方に呼びかけ、1人ひとりに合うものを手渡した。微調整が必要な方の眼鏡は持ち帰り、再度訪問して届けたという。支援隊の活動は、その後、他の被災地にも広がっている。企業の底力を感じた。

NPOでは福祉分野で活動をしている湯沢あかねの会がいち早く動いた。震災直後、何かできる事はないかと何度も湯沢市役所を訪問したらしい。最初は行政も混乱していたが、何度も通ううちに「避難してきた方々が引きこもりがちになり、困っていても声を発する事ができずにいる」と市から相談を受けたという。そこで避難者の家を一軒一軒訪問し、コミュニケーションを取りながら聞き取りを行なって、顔の見える関係を築いた。県南地区では、震災以前から支え合いの地域づくりを目的としたNPOや行政、社会福祉協議会などによる福祉のネットワークを作る動きが活発で、湯沢市でも「ゆざわフレンズネット」というネットワークがある。湯沢あかねの会もこのネットワークの構成員だ。ゆざわフレンズネットでは2011年4月、湯沢市で「一品持ち寄り交流会」と題して、避難者との交流会を開催した。持ち寄り形式にしたのは、参加する皆さんが申し訳なく感じてしまう事を防ぐためだ。交流会では避難者同士だけではなく、地元の方との関わりも生まれた。被災者同士は体験談を打ち明けられないそうだ。「おめえだけ大変な思いしたと思って（あなただけ大変な思いをしているわけではないのよ）」と非難される事もあり、心の中に閉じ込めていた方も少

なくなかった。第三者に震災当時の事やその後の事を話せる場が求められていた。この交流会は湯沢市だけではなく、横手市や大仙市などへも広がり、現在も継続的に開催されている。

「ゆぎわフレンズネット」では、震災前から福祉に関わる多様な機関との顔の見える関係、協働しやすい環境が整っており、交流会の開催もスムーズに行なう事ができた。「やらねばね! 横手 (地震・災害支援の会)」も既存のコミュニティがあったからこそ即座に発足し、スピーディーな動きにつながったのだと思う。非常時だからと急にスペシャルバージョンの支援ができるわけではない。日頃の取り組みやネットワークの延長線上に、非常時の対応があるのだと痛感した。

「県境なき市民団 AKITA」

震災直後、行政と民間の間には情報や支援のギャップがあったように感じた。物資は足りていると言う行政に対して、現場の情報収集へ向かったスタッフからは物資が行き届いていない方々がいると、全く違う情報が入ってきた。また、行政が行なう物資の支給では、100人いる避難所に対して物資が99人分しかない場合、それらが支給されなかったという。柔軟で目の行き届く民間の支援の必要性を強く感じた。被災地で築いたネットワークから、2011年4月、清掃や泥出しのお手伝いをするため岩手県大槌町の幼稚園を訪れた。その後、市民活動サポートセンターにも「ボランティアに行きたい」と相談が多く寄せられるようになった。6月からは秋田県平鹿地域振興局と協働で「県境なき市民団 AKITA」を立ち上げ、ボランティアを募り、バスを出して被災地に派遣するプロジェクトを実施した。多くの方が被災地のために何かをしたいと思っていたようだ。ボランティアに関する問い合わせや寄附金が爆発的に増えた。「県境なき市民団 AKITA」には約4ヶ月間で42チーム475人が参加した。

宮城県名取市と秋田県東成瀬村の交流

震災直後、若者会議を通じて知り合った半田純さん (株式会社栗駒食彩倶楽部代表取締役社長) とのご縁で、宮城県名取市を訪れた。私はボランティア・NPO活動情報紙「ハンサン」の編集を担当しており、被災地で起きている事を秋田の人達に伝えるため、現地の方からお話を伺った。この取材をもとに2011年8月、大震災を記録し、防災についてもう一度見つめ直す事を目的とした写真展「支え合おう日本〜3.11 東日本大震災が教えるもの〜」が、名取市の協力のもと東成瀬村

で開催された。展示は写真1枚1枚に丁寧な説明をつけた。秋田県にいる私達が知りうる被災地の情報はテレビなど、メディアで放送される一部分だけだ。実際に被災地で起きている事を記録した写真展には、震災が起きてから被災地に行った方、避難者と関わりのある方なども多く訪れ、中には泣いてしまう方もいた。写真展は東成瀬村だけでなく横手市など村外でも行なわれた。

東成瀬村では半田さんが中心となり、現在に至るまでさまざまな支援に取り組んでいる。きっかけは半田さんが代表となって取り組んでいる「低炭素村づくり」だった。このアドバイザーが宮城県名取市の方だ。震災発生直後、半田さんはアドバイザーの方の安否確認の連絡を取り、混乱の中でもすぐに名取市へ向かった。その後も東成瀬村の協力のもと、半田さんは何度も炊き出し支援に訪れた。その中で地元の方とのつながりができたそう。このつながりが信頼となって、2011年4月からは村の宿泊施設で名取市の方々の短期受け入れを行なっている。長期的な避難はできないが、短期であれば町を出て気分転換をしたいとの希望を受けて実現した。東成瀬村がバスを出して皆さんを迎えに行き、村全体でおもてなしが行なわれた。炊き出しや一時受け入れを繰り返す中で、名取市と東成瀬村の関係は発展し、名取市で復活した朝市を東成瀬村でも開催したり、東成瀬村の特産物を名取市で販売する、お互いが活きる取り組みが始まっている。

震災から見えた中間支援団体の役割

震災直後、市民活動サポートセンターには、行政や民間など、いろいろなネットワークから情報が集まってきた。また、職員1名が被災地の災害ボランティアセンターや避難所を回り、現地の情報を入手する事ができた。それらの情報をベースに、支援したい企業や市民からの相談を承り、コーディネートを行なった。

しかし、被災地とのマッチングでうまくいかなかった事例もある。横手市のある地域から、集落として被災者の受け入れを行ないたいと申し出があった。地域の集会所に畳を敷き、滞在できる体制を整えたという。この情報を現地にいる職員に伝え、避難所などに届けてもらった。ところが、現地では車が流され、ガソリンもない。秋田県内でもガソリンが不足しており、迎えに行く体制が整わなかった。同時に現地からは「今秋田に避難してしまうと、地元 (被災地) の情報が入らなくなり、支援が受けられなくなる」と避難をためらう声も聞こえてきた。被災された方々は、出たくとも出られない状況があった。中には、人口減に

つながるため県外への避難を推奨していない行政もあり、避難者受入の支援でうまく連携できなかった事例もある。

もし車両を多く所有する企業をコーディネートできていれば、集落として受け入れたいと申し出てくれた、被災地を想う気持ちに応える事ができたかもしれない。せつかく地域の方々が申し出てくれたのに、うまくマッチングする事ができなかった事が悔やまれる。震災を経験して改めて実感したのは、つながりの力だ。普段から顔の見える関係の団体とはスピーディーに協力し合う事ができたが、そうでない団体と連携する事は難しい。その意味で、当法人では企業とのつながりが弱いと改めて気づかされた。今後の課題である。

また、私個人が感じたのは、中間支援組織同士がもっと連携できなかったかという事だ。秋田県内にいると、被災地で何が起きているのか、情報はなかなか手に入らない。被災地の支援センターなどからもっと状況を伺い情報交換をしていれば、できる支援活動も増えただろうし、取り組みの広がりももっと大きかったのではないだろうか。これは、県外の団体とのつながりに限った事ではない。秋田県には県北地区、県央地区、県南地区の3か所に県が設置する市民活動サポートセンターがあるが、役割分担として中央地区のセンターが県外とのつながりを持ち、それを3つのセンターで情報共有してNPO支援に活かしていく体制があった。ところが、最近ではその中間支援組織同士の情報共有も十分にできていなかったと感じている。今後は、自分達で情報を取りに行き、県外の団体とのつながりも作っていくべきだと感じた。震災後はつながり作りのために、他県で行なわれる中間支援組織の集まりに積極的に顔を出すようにしている。

大震災を振り返って

秋田県南地区では行政とNPOによる「避難者支援連絡協議会」が立ち上がり、平成25年度から新たな支援活動をスタートした。仙北地域、雄勝地域では避難者交流会が実施されているほか、平鹿地域では避難生活を送る子ども達の学習支援を行なっている。避難してきた子どもの中には、地元と秋田の学習内容の差に驚き、授業中に泣いてしまう子どももいるという。彼らをケアするために、行政とNPO、学習塾が連携して無償で学習支援を実施している。秋田県としての支援も続いている一方で、震災直後に比べて地元に戻る避難者は多い。母子避難で父親が地元に残る事が多く、財政的に二重生活が厳しくなり、帰らざるを得ない状況もある。私達にはどうする事もできず、見送るしかない。難しいのだろうが、支援できる仕

組みがあればよいと感じている。

被災地で発生している問題の中には、高齢化が進む地域で起こっている問題と類似するものがあると感じている。秋田県は高齢化率が全国1位だ。ここで暮らすすべての人達が豊かに生きていけるように、地域の事を考える人、考えて行動する人を増やし、助け合えるつながりを構築していく必要があると感じる。それは特に、これからこのまちで暮らす私達若手世代に求められている。若手世代、仕事をしている現役世代がもっと地域に目を向けるようになれば、この地域はさらに良くなると思う。そのために、若手世代が参画できる機会を増やし、一緒に取り組んでいく事が今の自分の役割であると考えている。課題は多いが、誰もが豊かに暮らせる地域にするために、中間支援組織の一員として励んでいきたい。



被災地支援ボランティア



「県境なき市民団AKITA」の取り組み



名取市と東成瀬村の交流イベント

NPO

福島から避難した母子に寄り添う息の長い支援を

米沢市

佐藤 洋 NPO りとる福島避難者支援ネットワーク

取材日 2013.12.20

NPO りとる福島避難者支援ネットワーク代表。福島県から山形県に避難してきた人同士と一緒に助け合いながら前に進んでいくためのメーリングリスト「りとる福島」をベースに誕生した自主避難者による団体。山形県米沢市では、NPO 法人おいたまサロンとの協働により、福島県から避難している方々のフリースペース「ふわっと」を開設し、避難者に寄り添った支援を続けている。

3月11日 14時46分

山形市の商店街でバイオディーゼル燃料を製造する仕事をしていました。コンビニで油を回収している時に揺れたので、びっくりして思わず声をあげた。経験上、地震はすぐに収まるものだと思っていたが、揺れが長く続いたのでだんだん不安になっていった。

職場に戻ると停電していて、立体駐車場の蛍光灯は消え、ゲートも一切作動しなかった。困っていると管理員の方が手でゲートを開けてくれた。同僚達と今日の勤務をどうするか話し合った結果、停電でインターネットにつながらず仕事にならないため帰る事にした。この時点ではまだ地震についての詳しい被害状況を把握しておらず、停電が起こったくらいにしか思っていなかった。しかし、停電は3日ほど続き、オール電化住宅の人はトイレのふたも開かず大変だったようだ。自宅の水道は無事で、ガスもプロパンガスだったので使う事ができた。明かりはろうそくを利用し、薪ストーブで暖を取った。

携帯電話でワンセグを見る事ができたので、その日のうちに津波の被害が甚大だと分かっていた。仙台市の荒浜で数百の死体があるようだという情報を聞いた時はびっくりした。もしかして現場が混乱していて、表現を間違っただけなのではないだろうかと思った。少し怖いと感じたが、なるべく考えないようにした。停電している間は車で携帯電話を充電しながら、ワンセグを見て情報を得ていた。

3月12日、福島第一原子力発電所事故の事を知って緊迫した空気に包まれた。もしもの事が起きた時はどうするか、すぐに夫婦でシミュレーションを行なった。

「毎週末山形」のネーミング

原発事故の後、福島の友人に、うちへ避難しに来てはどうかと連絡をした。3月19日くらいから友人達が避難するためにやって来て、一番多い時



で20人ほどが我が家に滞在していた。3月14日から20日まで会社を休み、原発問題について調べた。インターネット上にはたくさんの情報が溢れ、どれが正しい情報なのかを、東京の友人と相談しながら情報を集めていった。結果的に、即時に壊滅的な事態にはならなかった。予断が許される状態ではなかったが、大爆発とはならず、風向きも大部分が海に向かっていった。もっともっと最悪の事態もあり得ると感じていたので、不幸中の幸いとも感じている。やがて僕の家へ避難していた知人達は、山形にアパートを借りる、親戚や知人を頼って九州に避難するなど、それぞれ身の振り方を決めた。

うちには誰もいなくなったが、福島周辺の詳しい情報だけが残った。今後は福島の人々が山形に避難しに来るだろうと思った。小さな子どもほど放射能の影響が心配だ。幼い子どもを持つ親を中心とした避難の動きがあると考え、4月にはサポートができるよう体制を整え始めた。「避難」は難しい家庭でも、福島を少しでも離れたいたいと考える親子が毎週末山形に来る事は難しくないだろう。週末に山形へ遊びに来てもらうような滞在をイメージした。公的な無償の借り上げ住宅がない頃だったので、農家の方に協力をお願いしてコソコソとステイ先を増やし、ショートステイやホームステイを斡旋する市民活動をしようと考えた。自宅に避難してきていた福島の友人が、「職場の放射線量が高いので仕事を辞めたい。」と電話で

上司に切り出す事に苦悩していたのを思い出す。これまでに例がなかったため、口に出す事はとてもためらわれたようだ。上司だってそこで働き続ける事が悩ましいかもしれない。最終的には上司に理解されたそうだが、この現実を見ていて放射能の話はデリケートであり、考えながら話さなければならないのだと思った。放射能は目に見えない。そして、怖がる事も安心する事もすべて本人の判断にゆだねられる。だからもしかしたら、放射能について話しぶらい、避難しに来づらいつと感じている人がいるかもしれないと考えた。山形に避難先を作るにしても、「避難」という言葉をタイトルにつけての周知では来づらい人もいるかもしれない。「毎週末山形」というネーミングは、悩んだ末に落ち着いた名前だった。

避難者のネットワークを形成

震災直後はガソリンスタンドでの給油や物資の確保など、緊急時の生活で精一杯だった。放射能の問題に対応するには、頭の切り替えに時間がかかった部分もあっただろう。米沢市には5月、南相馬市の警戒区域の人も自主避難の方も入れる唯一の避難住宅が早くも存在していた。定員は250名ほどで、あっという間に埋まってしまった。この避難住宅に入れた避難者は、情報に鋭く、早い段階で気づいて滑りこんだ人だ。ほとんどの人がこの情報を知らぬ間に、避難住宅は定員に達してしまっただ。東北の気質であろうか、あまり故郷を離れたくない気持ちの強い人が多い。山形は、子どもを守りながらも何かあった時にはすぐに故郷へ帰れる、福島からとても身近な場所である。翌6月、山形県が福島県の全住民に対する無償借り上げ住宅の提供を発表した。6月16日から入居が始まると、堰を切ったように避難者がなだれ込み、賃貸住宅などはあっという間にいっぱいになってしまった。溢れた人は親子で1Kの部屋を借りるなど、大変な状況に追いやられている問題も浮上していた。県庁所在地である山形市でも借り上げを行なったが、5千人ほどの希望者があり、すぐに打ち止めになってしまった。2012年2月には、避難者数が約1万3千人になった。震災当初の山形では、福島に関する活動をしている方が少なかった。宮城に近い事もあり、大津波の被害が連日報道されていた事から、沿岸部の瓦礫撤去のボランティアに向かう方がほとんどだった。福島に縁があり、事情を知ってしまったのだから、福島の事は僕がサポートしなければ、という意識が自分の中にあつた。毎週末山形で進めていたホームステイ先のリサーチは、無償借り上げ住宅ができてからは終わりにして、最終的に山形での保養を助ける支援内容とした。そして避難し

ている皆さんがバラバラにならないよう、避難者のネットワークを作ろうと考えた。6月頃、出会った避難者の1人からメーリングリストを作ってもらえないかと相談を受けた。そうして作ったのが「りとる福島」というメーリングリストだ。最初の登録人数は7人だけだったが、どんどん増えて現在は400人ほどが登録している。登録者数を増やす事にこだわりはなかったが、自然と口コミで増えていった。

メーリングリストではさまざまな情報が行き交っていた。思い切って避難してきたものの、本当にこれでよかったのかと悩む方が多かった。あまりにも未知の世界である原発事故を、自分が人生で体験するとは誰もが思っていなかった事や、自分が今、マイノリティーになっている現実などを共有し合っていた。直感的に危険と判断して避難した人もいれば、よくよく調べてから避難の判断をした人もいた。そして誰もがこれでよかったのだろうかと思いを葛藤を抱えていた。いろいろな認識の人がいると思う。国の制度で何とかかなと思っている人もいれば、そうではないと思っている人もいて、実際のところ多くの事態に収拾がついていない。被災者の高速料金の無料化など、部分的な援助はあるが、避難者が本当に求めている事はいまだに解決されていない。避難してよかったとお墨付きをもらう事はできず、むしろ周囲からメンタル的におかしな人と誤解されてしまう可能性もある。不安だけが募り、塞ぎがちになる気持ちを明るく気持ちへと向かわせるきっかけが欲しいと考え、みんなで寄り添い話し合う会を催したところ、60人程が集まった。想いを共有してみると、原発事故で急な判断を求められる中で「距離を取る」という選択をした事は「間違いではなかった。」「よくやった。」と、参加者同士が互いを励まし合い、いつの間にか人のネットワークができていった。

おいたまサロンとの出会い

米沢市に避難した母子のために、一時託児や交流ができる施設「ふわっと」の開設をコーディネートした。震災前から障がい者や高齢者を対象にしたふれあいサロンを運営しているNPO法人おいたまサロンが、事務所の2階を避難者向けサロンにリフォームする事を決断してくれた。それまで、2階は廃材が積まれた物置の状態だった。おいたまサロンと出会うきっかけとなったのは、避難者の除雪について相談した事だった。米沢は雪の多い地域だが、福島の沿岸は暖かく雪があまり降らないため除雪の経験がない。そこで除雪ボランティアのプロを探していたところ、おいたまサロンの代表を紹介された。ボランティアで独居老人宅の除雪を組織的に取り組んでいるという。

避難者宅の除雪の相談に乗ってくれた後、「今後はサロンを避難者のためにもっと使おう、一緒に支えようじゃないか」と提案してくださった。

それまでりとる福島企画は山形市で行なっていたが、メーグリストは山形県全域に拡大しており、中でも山形市と米沢市にいる避難者の登録が多かった。米沢市の方々の登録は多いが、なかなか交流ができていなかったのでちょうど良い機会だと思い、2011年の冬においたまサロンの1階で避難者の親睦会を開催させてもらった。

その後、おいたまサロンの2階を改装して常設のサロンを設置するために、福島県の地域づくり総合支援事業に応募し補助対象事業として選ばれた。申請はおいたまサロンが行なった。りとる福島は小さな任意団体だが、おいたまサロンと一緒にいてくれる事で、米沢では手厚い支援体制が形成できていると思う。最初の助成金では2階の半分を改装して、避難者のフリースペースを確保する事ができた。現在はもう半分の改装も済んだところで、子ども達が元気に走り回っている。サロン運営は避難者のお母さん達が行っており、通常の運営以外で過剰な援助は受けないようにしつつ、当事者が話し合いながらゆっくりと活動のアイデアを出し合っている。山形市でフリースペースを作る事ができなかったが、米沢市では居場所作りに参加できた。山形市はいろいろな団体が活動しているから、結果的に米沢市で活動してよかったと感じている。

現在抱えている課題

どうにもならない事だが、福島へ戻る方とまだ戻らない方がいる。それについて、団体の中でそれに特定の方向性を示すようなコメントはしない。どちらにも事情があるし、それぞれに葛藤があると思う。さまざまな考えで自分の立ち位置を決めた彼らにどう寄り添っていくかは悩ましい課題だ。ふわっとの利用者は増え、サロンの中での盛り上がりは感じるけれど、日に日に世間の関心が薄くなってきている事も感じている。フリースペース開設から1年が経過し、来年も継続するだろうけれど、もう少し息の長い、中長期的視点で考えた寄り添いの仕組みが必要なのだと感じている。山形に住む事を決めた方も一定の割合存在するので、継続的な支援は必要だと感じる。一方で我々のような小さな団体は、公的な機関の理解がなければすぐに限界がきてしまうだろう。支援スタッフを派遣してもらう必要はない。今後、避難者サロンを避難者自らが運営する事はできる。しかし、インフラまで自分の家計から出すには無理がある。例えば、「ふわっと」では集まった皆で料理をして、一緒にランチを食べながら交流を深

めている。現在は県から助成金をいただき、1日約2000円の予算で20人以上の副菜を用意する他、愛知県日進市の団体からお米を支援していただき、そのお米を毎日炊いている。活動を継続していくためには、その他にもインフラを維持するための支援が必要だ。

震災を振り返って

震災をバネにして人生を変えられる人もいる。それはとてもすごい事だ。私はそこまで立派な人ではなく、震災をバネにするような下地は、自分にはないと思った。ただ、震災を機に大きな決断をした皆さんと関わる事で、自分も変わりたい、と無意識に思ったかもしれない。震災後に原発について必死で情報を集めた自分の経験は、避難者の方々をサポートする取り組みには、活きた。

子どものために自主避難をした皆さんは、ものすごい決断力と行動力のある方々だと思う。いろいろな思いが頭を駆け巡る中、彼らは車を走らせて山形にやってきた。しかしながら、その決断を自分で褒める機会を奪われたまま、時間だけが過ぎて去っている。僕は彼らの決断は間違っていなかったと思っている。起こった出来事に対する高い柔軟性と、素早い対応力、そして何より、必要だと思った事を実行に移す決断力を見せてくれた自主避難者の方々は、僕にとってはヒーローであり、尊敬すべき存在である。なるべく彼らに寄り添いながら、震災後の東北と一緒に生きていきたいと思っている。



撮影：2012.9.21 おいたまサロン「ふわっと」ランチで交流会

自分で考え行動するための「生きる力」を学んでほしい

南相馬市

半谷 栄寿 一般社団法人福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会

取材日 2013.07.25

元東京電力執行役員。福島県南相馬市出身。加害者と被害者の両側に立つ者として震災直後から南相馬市に支援物資を運ぶ活動を行っていた。その後は復興のための継続的な仕組みが必要だと考え、一般社団法人福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会を設立。仕事体験を通じて「生きる力」を学ぶ施設「南相馬ソーラー・アグリパーク」を運営する。

3月11日 14時46分

東京電力のグループ会社である尾瀬林業株式会社（現：東京パワーテクノロジー株式会社）の代表取締役常務として仕事の打ち合わせを終え、外で関係者をお見送りしている時に大きな揺れが起きた。ビルの目の前にはモノレールが通っている。3階ほどの高さにあるモノレールの車体が、安全のための柵を超えて転げ落ちてくるのではないかと思うほどに大きく揺れた。街中が悲鳴の渦だった。

揺れが収まってから職場のある5階に戻った。尾瀬林業は、福島県・新潟県・群馬県の3県にまたがる尾瀬地区の観光という利用面と環境を守る面を両立させる仕事をしている。当時、尾瀬は山開き前だったため登山などを行っているお客様はおらず、安全確認の必要性はなかった。そのため、すぐに従業員と従業員の家族の安否確認を行なった。従業員の安否確認は容易ではなかった。携帯電話がつかならず、通信手段がなかったためだ。南相馬に1人で住む自分の母親の事も気になっていたが、電話はつながらなかった。12日の朝、従業員の安否確認が完了した。安心し、ふと思いついて母親に電話したところ奇跡的につながった。従業員と母親の安否確認ができ、大変な中ではあったが、よかったと安堵する思いだった。

南相馬へ物資支援

2011年6月まで東京電力の新規事業部の担当役員をしており、原子力発電の安全性を信じていた。だが、大震災後の水素爆発、放射性物質の飛散によって原子力発電所のある福島県双葉郡や南相馬市から多くの方が避難しなくてはならなかった。役員だったのだから、この事故には私にも責任がある。一方で、私自身も南相馬の出身者だ。従業員の安否確認が終わった瞬間から東京電力の元役員として、そして南相馬の出身者として何ができるかを考え始めた。南相馬の放射線量は現在も当時も低いのだが、風



評被害が激しかった。例えば、タンクローリーは郡山まで運転してくれるが、南相馬までは入ってくれない。大震災の被害に加えて風評被害が激しかった事で物流は途絶えた。物資が足りない危機的な現実が、間違いなく目の前にあった。

そうした状況を知って、多くの企業から支援物資を頂戴し、東京から南相馬まで物資を運んだ。初めて南相馬に入ったのは2011年3月19日だった。東京から南相馬まで往復約800km。縁があって借りる事ができた2tトラックで、週末を利用して計6回に渡って支援物資を運んだ。毎週のように物資を運んでいたため、ガソリンスタンドやコンビニエンスストア、スーパーマーケットが再開したなど、現地の様子が把握できた。物流が回復すれば物資支援の役割は終わる。トラックを運転しながら、復興のための継続的な支援の仕組みを新たに作る事が不可欠だと思うようになった。

子ども達のための体験の場作り

物資支援活動のさなか、懇意になった菓子店「栄泉堂」の女将さんが常々「地元の子ども達のために何かしてほしい」と仰っていた。その言葉を聞いてから、東京と南相馬を往復するトラックの中で、子ども達のためになる支援の仕組み作りを考えるようになっていた。被災した子ども達の中には、全国からの支援に対する感謝の気持ち、自分

も人のために働きたいという気持ちが生まれている。この貴重な気持ちを「自ら考えて行動する力」に発展させる事ができれば、子ども達の人生はより充実したものになるのではないかと考えた。さらに、原発事故によって岩手や宮城よりも福島の復興は長期化するため、今の子ども達の中から復興を担う人材が現れてほしいと考えた。

子ども達への成長へのプロセスには何が必要かを考えた時、「キッザニア^{※1}」を思い浮かべた。震災前から、私が運営するNPOがキッザニアで林業体験ができるパビリオンを出展している。その際、子ども達が多くの仕事を体験する事によって達成感や責任感を覚え、高いモチベーションを持つ事を感じていた。継続的な支援の仕組み、菓子店の女将さんから託された想い、そして縁のあったキッザニアの事を思い浮かべ、仕事体験を通じて子ども達の成長を支援する仕組みが良いと考えた。原発事故を踏まえ、誰もが賛同する自然エネルギーの仕事体験ができる新しい仕組みを作る構想が、2011年5～6月頃には固まった。そうした構想をキッザニアの住谷社長に相談したところ、その場で全面的な協力を約束していただいた。

※1 子どもの職業・社会体験施設。子ども達が好きな仕事にチャレンジできる、子どもが主役の街。楽しみながら社会の仕組みを学ぶ事ができ、リアルな社会体験を通して子ども達の未来を生き抜く力を育てる事ができる。

官民一体で推進するプロジェクト

構想を現実のものにするために、まずは小さくても会社を立ち上げなければならなかった。そこで、2011年9月に私が代表取締役となって、太陽光発電所の建設・運営を行なう「福島復興ソーラー株式会社」を設立した。南相馬市は再生可能エネルギー推進ビジョンを掲げているため、自然エネルギーの仕事体験ができる新しい仕組みを作る構想に賛同し、協働で「南相馬ソーラー・アグリパーク推進事業」を進める事になった。用地確保や開発許可など行政に求められる業務は、市に主体となって進めてもらう事ができた。市と協働する中で地元住民の農業復興に寄せる想いが浮かび上がってきた。その想いを反映するとともに、発電した電気を活用する施設として、市が復興庁の補助金でパーク内に植物工場を建設する事になった。太陽光発電所の建設構想も、株式会社東芝からの出資と農林水産省からの補助金が決定し、現実のものにする準備は整った。

2012年12月21日、南相馬市と共に「南相馬ソーラー・アグリパーク」の建設着工を発表した。津波被災地の約2.4haを活用し、太陽光発電と植物



撮影：2013.5.9
太陽光発電と植物工場の仕事体験ができる「グリーンアカデミー」

工場による地域再生の先駆けになるとともに、子ども達の自然エネルギーや新しい農業についての体験学習と全国の人々との交流を行なう復興拠点となる事を目指しており、教育委員会や学校と連携する、まさに官民一体となった復興事業だ。

2013年3月11日、南相馬ソーラー・アグリパークが完成した。どうしてもこの日に間に合わせたかった。植物工場では地元の農業法人が野菜を栽培し、収穫した野菜はヨークベニマルの店舗で販売している。風評被害に負けない、安心安全な新しいブランドを作って定着させたい。2013年5月9日には、太陽光発電と植物工場の仕事体験を通じて子ども達の成長を支援する「グリーンアカデミー」を開講した。市と協力し、教育委員会や学校の賛同を得て、すでに32回、延べ880人以上の生徒が体験学習に訪れた（2014年2月末現在）。生徒や先生からは、非常に楽しくなったと好評をいただいている。

体験学習は、「福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会」が運営する。複数の企業・団体に支援を求め、協働スポンサー体制を構築している。体験装置や運営プログラムはキッザニアと協働で制作した。

継続的な人材育成に貢献するために

今後の課題は、子ども達の成長を継続的に支援していくため、この社団法人が存続できる仕組みの構築だ。太陽光発電所は国の固定価格買取制度を活用し、植物工場は野菜をヨークベニマルに卸す事で、自立して継続できる仕組みになっている。しかし、これらは別組織である。体験学習を継続するためには、社団法人として独自に継続できる仕組みを確立しなければならない。現在は個人、企業、団体の寄付によって成り立っている。しか

し、今後も活動を継続し続けていくためには寄付だけに頼らず、事業活動を行なっていく必要がある。

絶対に大切な事は、事業内容が本来の目的である「子ども達のためになる」ものである事だ。だから、「子ども達のためになる」コンテンツや体験プログラムを徹底的に研究し、充実させていく必要があると考える。そして、設備やコンテンツなどを作るハード面だけではなく、スタッフのレベルアップも欠かせない。これを踏まえ、今後は太陽光発電だけでなく、2014年2月末までに風力、水力発電などを完成させ、自然エネルギーについての仕事体験の装置やプログラムを充実させる。また、子ども達と一緒に体験学習を行ない、「自ら考えて行動する力」を育むためには、「自ら発表する力」も重要だという考えに至った。それを実現するために、2014年5月からは体験や学びに意欲的な子ども達のために、発表する力を育むための週末オープンスクールを継続して開催していく予定だ。環境ジャーナリストの枝廣淳子さんなどの識者の方や、東北大学、いわき明星大学、三菱商事エネルギー部門、東芝未来科学館など、産学民と連携したパートナーシップで運営をする。成長した子ども達がスクールの運営役として参画し、後輩の育成に携わる事で社会経験を積み、復興を担い得る人材として成長する事を期待している。

その上で、さまざまな方法を取り入れて、寄付以外の受益者負担の仕組みを作っていきたい。受益者負担があるならば、寄付は続いていくと考えている。個人も企業、団体も、復興に役立っているところに寄付したいと考えるのだから、当事者の私が「復興に役立っている」と言うよりも、受益者負担の存在そのものの方が説得力がある。

目的はソーシャルだが、仕組みはビジネスでなければ継続できない。長い時間のかかる復興となる事は誰の目にも明らかだ。活動が継続できる仕組みを作る事が、私がこれから責任を持って取り組む事の中で一番大きな仕事だ。

原点は子ども達の成長支援

地震と津波に加えて、福島県には原子力の災害がある。私は2010年まで東京電力の役員の端くれだった。だから、原子力発電所の事故による災害に対する責任は免れない。そうした意味で加害者側だ。一方で生まれは南相馬で、実家もある。母親は1人暮らしだったが南相馬で隣近所の皆さんや親戚と元気に暮らしていた。そうした意味では被害者側の立場にもあると言える。大震災以降、加害者側と被害者側の狭間の中でいかに復興に取り組んでいくのかを考え続ける原点は、体験学習

による子ども達の成長支援だ。南相馬市、団体や企業、パネルオーナーの個人の皆さん、パークに花を植えてくれた地域の皆さんなどのご協力を得ながら、スタッフと共に福島の復興を担う人材の育成に邁進していこうと思う。原子力発電所の災害は償いきれない責任だけれども、復興に向かって少しでも前進する事によってその責任を果たしていきたい。



撮影：2013.6.17
太陽光パネルの方角と角度を動かして発電研究体験



撮影：2013.11.27 太陽光発電で使った植物工場の野菜で食育

企業

郡山市

福島の「今」を発信して、「自分の暮らし」について考えられる社会を作りたい

日塔 マキ 女子の暮らしの研究所(株式会社 GIRLSLIFELABO)

取材日 2013.08.01

福島県郡山市出身。東日本大震災後、放射能の影響を危惧し自主的に県外に避難した。避難中、福島で起きている事がきちんと伝わっていないと感じ、福島を発信するため「女子の暮らしの研究所」を設立。ラジオ放送やイベントカフェの開催、会津木綿を使用したピアスの販売など「福島の今」を伝える活動をしている。

3月11日 14時46分

当時はイベント制作会社に勤務しており、イベントの買い出しをするためにスーパーマーケットにいた。お昼過ぎだったため、あまりお客さんはいなかった。近くには70歳くらいのおばあさん、ウィナーを焼いている店員、そして5歳くらいの子ども2人が手をつないでいた。携帯電話の緊急地震速報が鳴り、地震が発生する事が分かったけれど、揺れは想像よりとても大きかった。とりあえず子ども達を抱えて座らせた。揺れはすぐに収まるだろうと思い、子ども達に「大丈夫だから」と声をかけた。しかし揺れは収まらず、天井や蛍光灯、棚にある商品が落ちてきた。ここで死ぬかもしれないと思った。一緒にいる子ども達の事も不安に思った。

入口から最も遠い場所にいたため、避難もできずに取り残されていたようだ。お店の男性店員が駆けつけてくれて、外への避難を促されたけれど、子ども達は怖くて立ち上がる事ができなかった。男性店員が1人、私が1人、それぞれ子どもを抱えて従業員用のバックヤードへ行くと、裏口が地震の影響で開かなくなっていた。女性店員が蹴破って入って来てくれたので、無事に外に出る事ができた。

外は真っ暗で、吹雪いていた。このまま日本が沈んでしまうのではないかと思う程の恐怖を覚えた。駐車場まで行くと、買い物客やパート職員がたくさんいた。地震の揺れが少し収まると皆帰っていった。私はイベントの買い出しの途中だった事を思い出し、店内に商品を取りに行こうとしたが、入れてはもらえなかった。仕方がないのでそのまま会社に戻ろうとしたが、近くに住む祖母が心配になり駆けつけた。家に着くと祖母は外に出ていて無事だった。家も被害はほとんどなかったが、落ち着くまでしばらく祖母のそばにいた。その後、親戚が祖母の家に来たので祖母の事は任せる事にした。今度は自宅が心配になり一旦帰る事にした。自宅は揺れの大きかった郡山市大槻町にある。建物自体は無事だったが家の中が悲惨な



状態になっていた。ピアノは約1m、食器棚も約50cm移動していた。食器棚は中の物はすべて床に飛び出していた。本だけが置いてある部屋ではアルミ製の本棚が曲がり、本の雪崩が起きていた。この部屋の様子を見た時は、思わずすぐに扉を閉めた。当時、母と2人暮らしをしていたが、母は出張中だった。この状況を1人でなんとかしなければならぬと思うと不安になった。

とりあえず会社に戻った。会社はコピー機が壁に突き刺さり、スチール棚が倒れてガラスが割れ、ファイルとガラスで散らかっていた。次の日はイベントの開催日で、イベント開催の有無を確認したかったが、クライアントと電話が繋がらない。社長と話し合った結果、イベントを開催するにしてもアルバイトスタッフの人員の確保ができないため開催を断る事に決めた。スタッフ全員の安否確認をしつつ、次の日は休みだと連絡を入れ、その日は帰る事になった。

自宅は停電していて自分1人しかいない。祖母の事も心配だったので、祖母の家で一晩過ごした。祖母の家は電気もガスも水道も被害がなく、野菜を作っていて、お米も味噌も蓄えがあったので食料にも困らなかった。しかし、隣の地区は私の自宅も含めて停電していたので、住民はコミュニティセンターに避難していた。

福島第一原子力発電所3号機爆発

2013年3月14日、福島第一原子力発電所3号機で水素爆発が起きた。彼から連絡があり爆発を知った。彼が祖母の家まで迎えに来てくれ、自主避難するかどうか相談した。祖母や叔母、皆と一緒に避難したかったが、福島に残ると断られた。出張の帰りに被災し、姉のいる神奈川に避難していた母は、祖母や家、会社の事を心配して福島に帰りがついていた。夜に避難区域が発表されるため、それを聞いてから母を連れて福島に戻るか避難するかを考える事にした。14日の夜、彼の車に乗って南へ向かった。夜のラジオで直ちに健康に被害はないとの発表を聞き、とりあえず母を迎えに行く事にした。その頃、神奈川から埼玉までの電車が数本だけ運行していた。運良く母もその電車に乗る事ができ、15日の朝に埼玉で母と合流し福島へ向かった。原子力発電所爆発の情報はとても早く広まったようで、車で移動している最中、4号線沿いには「福島ナンバーお断り」のお店を見かけた。ガソリンの入手が難しく、コンビニエンスストアも食料がほとんど無かった。福島に戻ったのは15日の夜の事だ。

帰ってきてから放射線量の発表を見るようになった。みるみる放射線量が高くなっていき、危機感を覚えた。会社の片づけをしなければならないが、外に出たくない。マスクをして、ベンチコートのような上着を着て会社に通った。人が通れるくらい会社を片づけた頃、予定されているすべてのイベントを中止し、3月末まで自宅待機が決まった。当時、ラジオの情報番組のパーソナリティーもしていた。木曜日の担当で、次は3月17日に放送しなければならない。ラジオでは緊急放送を流していて、24時間体制だった。せめて自分の担当の時間だけは放送しなければならないと思った。しかし、1度県外へ逃げているため負い目も感じていた。放送1時間前にスタジオに入ると、ラジオ局のスタッフに「今まで何していたの」と聞かれた。震災後から24時間体制で放送している人達を前にして申し訳なく思い、すぐに謝った。そして、自分の時間だけ放送をして帰った。そのラジオ局ではお子さんのいるパーソナリティーが多く、避難していて局に来られない方が多いと聞いた。残って放送をしてくれた皆に感謝している。

福島の今を聞いて欲しい

以前より、全国規模で事業を展開している会社に転職しないかと誘われていた。震災前の3月頭に浜松の支店長にお声がけいただき、1ヶ月や2ヶ月でもいいから手伝いに来ないかと誘われていた。3月は忙しいからとお断りしていたが、震災

後に再び支店長からお電話をいただいた。私が「イベントも中止している、放射能も怖いし、どうしたらよいのか分からない」と話すと、「浜松なら今のところ安全だし、水も出るし電気もある。1ヶ月くらい出向してこないか」と誘ってくださった。それでもう一度福島を出る事を決め、4月中旬から6月中旬まで浜松でその会社のお手伝いをした。

外から見た福島は異常な状態だった。私が放射能を怖いと思っている事は、普通の事だ。けれども、福島県内では「怖い」と言う事さえもはばかられる。「怖いと言う人は逃げればいい、放射能があっても頑張ると言う人だけ残ればいい」という風潮があった。しかし、怖い事には変わらない。放射能から子どもを守れ、妊婦を守れという声はたくさん上がっていた。行政や民間も含めて多くのサポートがあったが、そこに支援が集中する事に違和感を覚えた。私には子どもはいないが、これから子どもを産みたいと思っている。これから子どもを産む世代の女性達は守られなくてもよいのだろうか。友人と話をしてみると同じ事を感じていたけれど、私達は仕事をしているため、今の生活を投げ出して避難する事はとても難しい。当時は国が安全だと言っていた事もあり、そもそも放射能や原発の話に触れる事がなんとなくタブーになってしまっていた。

2011年12月に東京の制作会社に転職した。福島の復興を支援する案件がたくさんあった。仕事をするうちに、本当に必要なところに手が届いていない気がした。例えば、被災地の子どもに対する支援が必要なのに、なぜか東京で笑顔を届けるプロジェクト企画がある。今起きている事や福島にある複雑な思いが伝わっていないと感じた。同時に、すっかり東日本大震災を忘れたように営まれている東京の生活に対して怒りを感じていた。彼らの生活を支えるために福島の原子力発電所があり、今大変な事になっているはずなのに、なぜこんなに人ごとなのだろうと思うと、とても悲しかった。結局その会社を2ヶ月で退職し、きちんと福島の声を発信していく事業に取り組もうと決めた。

女子の暮らしの研究所設立

2012年12月、原子力発電所の事故を受け、1人ひとりが「自分の暮らし」について考え、行動できる社会を作るため「女子の暮らしの研究所」を設立した。株式会社にしたのはこの会社だけで運営できるようにしたかったからだ。さらに決定権が自分にあるため、やろうと思ったらすぐにできる。個人事業主でもよかったが、契約する際に法人格が必要なので株式会社にした。

設立当時から行なっている事業で「女子の暮らしの研究所 LABOLABO ラジオ」というラジオ番組がある。以前、私が郡山のコミュニティラジオで放送していた枠をいただいて、継続して行なっている。若い女の子達が、放射能や原発を含む社会問題や政治など、多くの若者が無関心になっている事をテーマに放送している。「どうしたら皆で考えていく社会が作れるか」を大きなテーマとして、いろいろな人が考え始めるきっかけになるような番組にしたいと思っている。若い女の子達が選挙などについて話しているので、リスナーからは面白いと好評だ。コミュニティ放送ではあるものの、サイマルラジオ^{※1}やUSTREAMでも同時配信をしており、全国でも聞けるようになっている。そのおかげもあり、各地から応援メッセージをいただいている。

他にはイベントカフェを開催した。放射能だけでなく添加物や農薬も気をつけていきたいものだと伝えるために、それらを排除した安心安全な食べ物を提供するカフェを企画した。開催時期が2月だったため、知人が児童労働とフェアトレードをテーマに作った「バレンタイン一揆」という映画の上映会とセットにした。世界の児童労働について考え、今の福島の子どもの置かれている状況を考え、自分のこれからを考えるイベントだ。児童労働やフェアトレードは自分にとって遠い世界の事だと考えている参加者が多かった。何気なく買ってしまったチョコレートは、地球の裏側で子ども達が泣きながら採ったカカオかもしれない。今福島で、母子で自主避難しているためお父さんに会えないと泣いている子ども達がいる一方で、地球の裏側では売られてしまって、一生親に会えず、こき使われて、教育の場も与えられず自分で選択して生きていく事ができない子ども達がいる。「はじめてそんな事を知りました」と泣いてしまう女の子もいたが、このイベントを開催してとても良かったと感じている。今まで考えてこなかった問題に思いを馳せる事によって、自分のこれからの生活を考えるきっかけにしてもらいたい。買い物は一番の意思表示だと思う。少し高くても、本来の値段をきちんと知っている若者が増えて欲しい。こうしたイベントカフェは2ヶ月に1度、福島県内の各地で開催している。

他にも「Fukushima Piece プロジェクト」を立ち上げ、福島の伝統工芸品である会津木綿を使用したピアス「ふくいろピアス」を2013年3月8日より販売している。これは株式会社電通の「GAL LABO」とヤフー株式会社の「復興デパートメント」との共同プロジェクトだ。制作費はクラウドファンディング^{※2}を使って集めた。福島で暮らしている女の子の思いを聞いてくださいと言っても、唐突過ぎて聞いてもらえない。けれど



撮影：2013.3.10 ふくいろピアス出展販売

も、今福島で暮らす女の子が何を考えているのかを聞いて欲しいし、知って欲しい。そこで、福島の話をするきっかけにするために、物に想いを乗せて発信する事を考えた。可愛いものを身につけていれば「それ可愛いね」「これ福島のなんだよ」と会話が生まれる。私がいなくても、そんな風に福島の話が始まって欲しい。

時々でいいから福島のことを思い出して欲しい。そして、今もなお災害や放射能の被害が続いている事を気にかけてくれればと思う。ふくいろピアスはこれまでに約2000個を販売した（2013年8月1日現在）。買ってしまった方は、福島のことを応援したい、原子力発電に対してきちんと考えていきたいと思っている方が多い。福島のことを話し出すきっかけになってよいとも言われた。県内には会津木綿以外にも素晴らしいものがたくさんあるので、福島の自慢できる資源や素材を見つめ直して、自分達のアイデンティティとして確立しつつ、福島のことを伝えるきっかけづくりをしていきたい。

※1サイマルラジオ…コミュニティ放送局が自ら作成した番組を放送と同時にストリーミング配信するラジオ。

※2クラウドファンディング…インターネットを通じてアイデアに共感した不特定多数の人々から資金を収集する手法。

発信の難しさ

「女の子も不安なんです」と声を出し始めた時、「将来、障がいのある子を産んでしまうかもしれないと思うと不安なんです」と言っていた。それは今、障がいを持ちながら生きている人達に対してとても失礼な事だ。しかし、当時はその一言で彼らを傷つけている事を想像できていなかった。自分の

事しか考えていなかった。それを猛烈に反省している。「障がいのある子を産んでしまうのが不安」と言っているのだから、障がいがあっても暮らしやすい社会を作っていけばよいのだ。その事に気づいたのは、ある会議の分科会で話した時だ。私は「福島の女の子は障がいのある子を産んでしまうのではないかと不安なのです」と発言した。その私の目の前に、障がいを持っている方がいた。その時、私は今までなんて事をしてきたのだろうと気づいた。でも、その方はうんうんと頷いて私の話を聞いてくれた。

この事はとても反省しているが、「原因が放射性物質によるものならば別の問題だから、不安な気持ちと言ってもいいのではないか」と言ってくれる方もいる。どんな言葉で伝えるのか、本当に発信の仕方は難しい。

大震災を振り返って

あれだけの大きな震災が起きて、原子力発電所の事故が起きて、その被害を受けてしまった事はある意味で不幸だ。原発事故や津波、地震の被害によって福島はコミュニティを分断されたなど、いろいろ言われている。しかし、原発やコミュニティ、高齢過疎化など多くの課題は、近い将来直面しなければならない問題だった。大震災によってそれが一気に起こってしまっただけだ。大きな



撮影：2013.4.20 ふくいるピアス出展販売

ストレスがかかったが、問題が顕になる事で考え始める事ができた。その点ではとても良い事だと思う。例えば、原発がこのまま何十年も事故がないまま稼働して、私が50歳や60歳になってから爆発したら。もしかしたら、その時は80歳かもしれない。身体的にも精神的にも動けなくて「さあどうしよう」とたじろぐしかない。しかし、今なら動ける。何とか自分の世代から歯止めをかけていく動きができる。今この年齢だからこそ動き出せている事は、ある意味で幸せだと感じる。だからこそ、できる限りの事を精一杯やっていきたい。



撮影：2014.2.19 福島県双葉郡富岡町 富岡駅 (EPOスタッフ撮影)



撮影：2014.2.19 福島県双葉郡富岡町 線路 (EPOスタッフ撮影)

個人

第三者目線に立つという事

京都市

米村 真悟 個人

取材日 2013.05.17

同志社大学大学院総合政策科学研究科所属。2012年の春、震災ボランティアプログラムの参加をきっかけに、宮城県浦戸諸島寒風沢島に深く関わるようになる。何度も足を運び、現地の団体と共に農地復興、島の復興にボランティアとして携わる。地元・京都でも寒風沢に関する情報発信のために、寒風沢のお米を活用したイベント開催などを企画した。

3月11日 14時46分

地震が起きた時は京都の自宅にいた。大きさは震度3〜4くらいだったが、揺れが長く、異変と感じたので、このあと大きな揺れが来るのではないかと警戒をしていた。テレビを見ていたらニュースが流れ、大変な事が起きていると知った。そのあとはテレビにかじりつくようにニュースを見ていた。

実家は神奈川にあり、横浜でも地震による被害が出ていると聞いたので、両親が心配になって実家に電話をかけたがつながらなかった。実家は神奈川県平塚市で沿岸部に近い。被害があったのではないかと心配していた。この時点では正直、東北の事より実家に連絡できない事の方が不安だった。

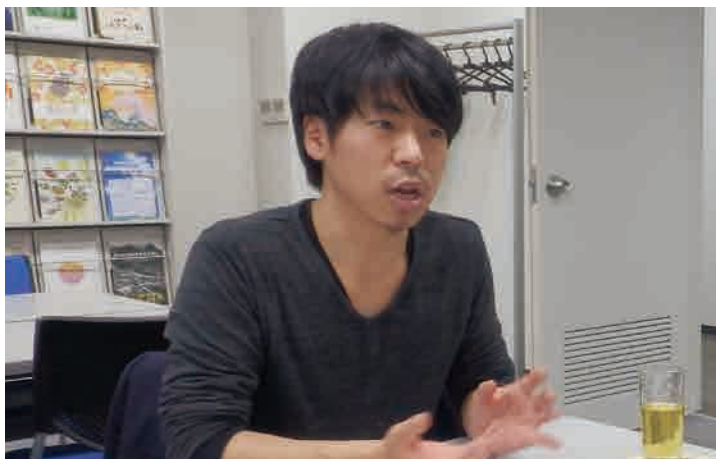
震災から1年後、東北へ

実は、震災後の1年間は東北へ行く機会は1度もなかった。もちろんニュースでは被災地の現状を聞いていたが、京都からは遠く、東北に行く事はなかった。東北に行ってみたいとは思っていたので、2012年5月に「Youth for 3.11」が行っていた学生ボランティア派遣に参加して初めて東北を訪れた。それが浦戸諸島の寒風沢島で、田植えをするボランティアだった。

東北の事を何も知らなかった。本塩釜駅周辺は、例えば気仙沼のように、すべてが更地になっていたわけではなかったため、想定していた被災地のイメージとの間にギャップを感じた。多少の崩れや建物の上の方に津波の跡はあったが、想像していたほどではなかった。

2年目以降の復興の形

このボランティアプログラムは僕が参加する半年以上前から何度も行なわれていた。津波で流され田んぼに乗りあげていた車の引き上げ作業や、手作業で1つひとつ細かな瓦礫を取り除く作業を学



生達が行なっていた。田植えのボランティアは、自分達が大いに楽しんだボランティアプログラムだったのだが、その背景には、他の人が苦勞して築いてきたプロセスがあった。田植えができる田んぼの状態にするまでに、肉体的に辛い作業を行っていた事はあとで知った。

この背景を知った事は、2年目以降の復興の違いを意識した機会でもあった。初めてのボランティアを終えた後、自分なりに復興の現状について調べてみると、震災後は瓦礫やインフラの復興など最低限の生活は確保されて、1年程で復旧段階はある程度は終わった。2年目以降になると、住民が自主的に立ち上がり、10年以上続くまちづくりを意識しなければならない、とても大事な復興の局面である事を知った。

そして同じ事が、浦戸諸島・寒風沢島でも起きていると実感した。なによりも、復興の経過がとても見えにくいと思った。問題が目で見えていた「瓦礫の有る無し」とは違い、そこに住んでいる人達のこれからの生活を不安に思う心境、住民の人間関係など、ただ島に行っただけでは見えにくい問題が現場にはあるのだと痛感した。

そうすると、ボランティアの支援内容も現場の状況に合わせて変えていかなければならない。その変化のタイミングの1つが、自分がプログラムに参加した時期だったのだと思う。ボランティアプログラムを実施している Youth for 3.11 の学生

達や関係団体の方といろいろな話をして、これからのボランティアの在り方について深く考えた。復興関係者の中には、ボランティアへ行く学生数の減少に悩んでいる方も多かった。参加する学生達がもっと被災地の現状を見つめる機会を作らなければならない。根本的な課題解決につながる活動をしなければならないと感じていて、より現状を知るためにもう一度島に行く事にした。

他人目線で大震災を見る

初めて浦戸を訪れたあとに、松島で島の住民が意見交換をする場があると聞き、一個人として参加した。話が聞きたかったのは寒風沢島の住民だったが、その場に寒風沢島の住民は出席していなかった。こうした場に寒風沢島の住民が参加していない事も、寒風沢島の復興の難しさかもしれないと思った。被災地でまず必要なのは、他の被災地の現状を聞き、被災地の方々が集まってこれからの復興、まちづくりを考えるために、コミュニケーションを取り合う事だと思う。そして住民達がコミュニケーションを取る機会を持てるように何かアクションを起こした方が良いのではないだろうかと考えていた。

島の稲刈りが終わった後、ある団体から、来年度グリーンツーリズムと一緒にやらないかとお誘いを受けた。復興支援というくくりではなく、あくまで島に来て楽しむことを目的に、島へ多くの方が来てくれるプログラムを作ろうと話合った。しかし、ただ実施するのではなく、島の復興に合わせてグリーンツーリズムを行なう必要があると思ったため、まずは島の皆さんの考えをもっと聞きたいと思った。島には、僕のような島外の方との接触が多く、コミュニケーションに慣れている方もいれば、島外の方との接し方がわからない方も多かった。皆さんから話を聞くうちに、自分が耳にしている意見は、自分とたまたまコミュニケーションを取る機会が多かった方の意見に偏ったものである事を痛感した。結局ツーリズムは、島外の方を受け入れる準備を整える事ができず、実施には至らなかった。

よそものが寒風沢島にできる事

特定の被災地の復興に取り組むためには、現地に住む事が理想的だと思う。いろいろな支援の形があるが、復興としてやりがいを感じる一番の機会だ。しかし、学生の立場である今、それは難しい。だから、現地で島の皆さんと一番近い距離で話をしている関係者や団体と上手に情報を共有しながら、よそ者なりに島の発信をしていきたい。島の外にいるからこそ、少し広い目線でできる事だとも思う。

と思う。

一口に「復興」と言っても、現地では復興の意味合いが幅広くなり、課題が複雑化している。その分、京都のように東北から離れた場所では、ことさら復興という言葉が風化してきている一面もある。そんな中、復興に関心を持つ人を増やそうと、2013年5月12日に「食」をテーマとしたイベントを京都で開催した。タイトルは「コミュニケーションイベント 寒風沢島の贈り物」だ。2012年に寒風沢島で収穫したお米で参加者におにぎりを握ってもらい、少しでも寒風沢島を体感してもらおうと考えた。イベントゲストには食育の啓発を行なう京都の老舗料亭職人と、有機農業の促進を通じて持続型の社会を築こうとする社会企業家を招いた。前者にはおいしいおにぎりの作り方や食文化、食育の話をしてもらい、後者には有機農業まつわる自社の取り組みについて話をもらった。ニュースなどで伝えられる情報とは違う角度から復興を見つめるきっかけを作れたかった。イベント参加者から関心が高まったと感想を聞いた事も、とても良い経験だった。

当然ながら、真に自分が被災者と同じ当事者意識を持つ事はできない。被災者でもなければ身内に被害が出たわけでもない。無理に被災者と同じ当事者意識を持たなければならないと自分にハードルを上げるよりは、ある程度の他人目線を持った方が、長く続く復興には重要かもしれないとも思っている。現地の復興関係者の中には、地域の生活再建に急ぐあまり、1人ひとりの住民への細やかな目配りが難しい時もある。そんな時こそ、第三者目線の外部の人間の指摘や、補完も大事ではないか。その点では、京都にいる僕のようによそものの方が関わりやすい。復興は日本の地域社会全般の問題でもあり、農業や環境などさまざまな問題とつながっている。そこに自分なりの関わり方を見出し、当事者意識を持ちながら、自分の



撮影：2013.5.12 京都府京都市
「コミュニケーションイベント 寒風沢島の贈り物」会場

役割を考える事が大事だと思う。

自分がやりたいからやる

東北の復興に携わるまで、ボランティアはした事がなかった。当初ボランティアは、瓦礫の片づけのような肉体労働がメインであるイメージを持っていた。被災から2年が経ち、ボランティアの内容も瓦礫撤去から、人と関わる地域のソフトな活動に多様化していった。そうした変化の中で、一緒に活動していた学生の中には「ボランティアは必要なのか、なぜボランティアをやっているのだろう」と悩む人もいた。寒風沢島に関わる中で、「ボランティア」は、他人のための活動でありながらも、自分がやりたいと思った動機、「自分のため」である想いを大切にしなければと思うようになった。誰かに誘われて参加するのではなく、自ら自発的に、困っている方に対して自分なりの役割を見つける事が、ボランティア精神の在り方ではないだろうか。その気持ちは東北の被災地での活動に限らず、日々の日常の中でもごく普通に見られるものだと思う。稲刈りや田植えを通じて、被災地のためだけではなく、自分自身が楽しんでいるから参加しているのだと思うようになった。逆に、そうでなければ活動を続ける事はできないだろうと感じた。

稲刈り時に集まった学生や社会人を再び集めて、浦戸諸島開発総合センターの体育館で手巻き寿司大会を企画した。用意してくれたお米を炊いて、学生達で酢飯にし、浦戸の海苔と、現地の方が調達してくれた海産物で手巻き寿司を作った。誰かに言われたのではなく、あくまで自分が手巻き寿司を食べただけだった。半分はこうしたワイワイ楽しい事をやりたくて、もう半分は、寒風沢島に集まった皆さんがつながるきっかけにしたいと思って企画した。そういう自分自身の動機を大事にする事が、ボランティア精神を持ったボランティア活動の前提になると思っている。

活動を振り返って

ツーリズム企画の経験から、一部の関係者による内々の進め方ではなく、いかに多くの人の意見を聞きながら調整し、合意を得ていく事が重要であるかを学んだ。地域全体の復興を考えた時、1人の意見のみを聞き過ぎる事は良くない。なんとかしてあげたい気持ちを持ちつつ、そこをぐっと堪えて、多くの人の意見を聞きながら、復興課題の本質を捉え、なるべく被災地の皆さん全員の総意を構築していかなければならないのだと気づいた。地域のコミュニケーションを調整する事は難しく、だからこそ重要だ。



撮影：2012秋 宮城県塩竈市寒風沢
稲刈りに集まったボランティアの皆さん



撮影：2013.6.29 宮城県塩竈市寒風沢（EPOスタッフ撮影）

島の皆さんにアンケートを取る機会があったのだが、誤解を恐れず言えば、他人頼りになっている傾向があると思った。もちろん仕方がない面もある。一方で、中期的に自立していく必要もある。自分自身でできる事と、他人に任せの方が良い事かは、第三者目線に立てる者の方が目が利く。冷静にさまざまな意見を聞いて、物事の本質を見極める事が重要である事を、復興の現場が教えてくれた。

企業

裸足で歩けるきれいな砂浜を残したい

札幌市

鈴木 将之 パタゴニア

取材日 2013.07.19

現パタゴニア札幌北店店長。パタゴニアは「最高の製品を作り、環境に与える不必要な悪影響を最小限に抑える。そして、ビジネスを手段として環境機器に警鐘を鳴らし、解決に向けて実行する」をミッション・ステートメントに掲げている。東日本大震災では石巻市での支援活動を積極的に展開し、その活動は現在も続いている。

パタゴニアとの出会い

前職は建設コンサルタントだが、自分にしかできない事をしたいと思い、パタゴニアに転職した。大学生の頃、サーフィンの雑誌でパタゴニアの意見広告を発見してから面白い会社だと感じていた。

出身地である静岡県久能海岸の砂浜で、小学校の頃に遊んだ記憶がある。少し大きくなってから自転車で行ったら、砂浜が無くなっていた。「えー！そういうことがあるんだ！」と非常に驚いた。その後、海岸に擬岩ブロックを置く事で砂浜を戻すプロジェクトに取り組んだ先生がいて、砂浜に積んである擬岩ブロックに興味を湧いた。大学ではこれについて勉強した。

そうした中、サーフィンの雑誌のパタゴニアの意見広告を見て、擬岩ブロックを置くとサーフィンができなくなってしまうと分かった。「そんな事にも気づかなかったのか！」と衝撃を受けた。アウトドアが好きだし、サーフィンをやりたかったし、面白い会社なので、良い意味で会社を利用したいと思っている。

3月11日 14時46分

仙台のパタゴニアの店舗1階にいる時に地震が起きた。最初は「揺れたな」と思う程度だったが、揺れはとても長くだんだんと大きくなる。1階にお客様はおらず、もう1人のスタッフと一緒に商品の転倒を心配していた。すると4階の休憩室で昼食中のスタッフが走って降りてきた。彼女は取り乱して外に飛び出そうとするので、「何か落ちてきたら危ないから！」と必死に彼女を落ち着かせようとした。揺れが収まり、3階にいたお客様がスタッフと1階まで降りてきた。全員の無事が確認できたので会社に連絡をしようとしたら、電話がつかない。電気はバチンッと音を立てて停電した。1階は被害がなかったが、3階は商品が落ちてひどい状態だった。お店の隣の公園にたくさん人が集まっていたので、ただ事ではないと



感じた。

その日は明るいうちに帰ろうと判断し、電気が通った時のために火元を確認してから家路についた。45号線を歩いて帰る途中、宮城テレビ放送のビルの電気と信号機がついていたので、自宅は停電していないかもしれないと期待した。家が近所のスタッフと「帰ったら電気つくといいね」と話しながら歩いた。テレビ局の方も情報が無いようで、歩いていたら「どのような状況ですか」と聞かれたのだが、僕達も何も知らないのでも「歩いて帰るしかなかったの、歩いてきました」と答えるだけだった。

リーダーの重要性を実感

家が福田町にあり、警察や消防が「海岸の方に行かないでください」とアナウンスをしていた。家を見に行ったが、すでに辺りは真っ暗でよく見えない。家がある事を確認して、近くの小学校に避難した。どうしたら良いか分からなかったし、また津波が来る可能性があるの、避難するよう呼びかけられていたからだ。梅田川で真っ黒な水が上下するのが見えた。大学では奥尻の地震について水槽を使って青苗の実験をしていたし、以前は海岸公安の仕事をしていたので、津波に関する知識があった。川底まで見えたかと思ったら、急に堤防ぎりぎりまで水が上がってきたのを見た時、

「これはすごい津波が来たんだ!」と思った。その夜、避難所で携帯電話のワンセグを見ている人達がいて、津波被害を知った。想像以上だった。しかし、僕は意外と冷静に津波の映像を見ていた。小さな携帯電話の画面でしか見ていないので、津波の映像はまったく現実味がなかった。

小学校で2日間を過ごした。人がたくさん押し寄せ、体育館に入りきらなくなり、住む地区ごとに教室へ移動の指示が出されたので、途中から教室へ移った。避難所は食べ物も水もあまりなく、2人でおむすび1個と500mlのペットボトル1本が配られただけだった。それが1日分だ。全然足りなくて、お腹が空いた。そして、避難所はあまり良い雰囲気ではなかった。1日目は犬に、2日目の夜は子どもが泣く事に対して「出てけ!寝られない!」と怒鳴る人もいた。さらに、家が壊れてしまった人と家に戻れる人の間に差が出てきてしまった。食べ物が少ないので家に戻る人には食料を分配しないと誰かが言い出し、「お前らは帰るところがあるじゃないか!」と喧嘩になった。それを見て、僕はとてもいたたまれなくなった。そのあと、別の小学校に行くと、神戸の震災を経験した方がたまたまいたらしく、その方が上手にリーダーシップをとっていた。部屋のドアには避難者の名前を書き、役割分担をして皆が協力する体制が築かれ、避難所の雰囲気はまったく違った。そうした様子を見て、リーダーは重要なのだと心底実感した。

みんなで協力し合った1週間

3日目に他の地区で水が出るらしいと噂を聞いて、自転車で探しに行った。避難所は飲み水も足りない状態で、限界だった。僕はお店の確認も兼ねて仙台駅の方に向かった。すると、街に近づくにつれて、道端で自動販売機のコードを抜いて、携帯電話を充電している人を見かけた。「電気使えますか?」と聞くと「ここは使えるよ」と返ってきて、電気が復旧した事が分かった。お店へ行くと、電気と水が使えた。それから約1週間は他のスタッフとお店で合宿生活をした。とにかく食料がないので、「〇〇で〇〇時に売るらしい」という情報を頼りに皆で買い出しに行った。家族がいるスタッフのために、買った物をいったん集めてから分配した。そうした中で、電気と水が使えた事は本当に恵まれていたとを感じる。

街は異様な雰囲気だった。セキュリティが鳴りっぱなしで、セキュリティ会社に問い合わせても「手が回らない」と言われた。そんな状況でもお店の商品を勝手に持っていく人がいないのはすごいと思う。被災地の支援に持って行ったのと、物流が止まり新しい商品が入荷しないために商品棚はス



カスカだった。それでも営業したい気持ちが強く、4月頃からは必要とするお客様が訪れたらオープンした。ドアに「電話をくれればお店を開けます」とメッセージと電話番号を書いて対応した。物資が回り始めたのは4月中旬に入ってからだ。僕は札幌から仙台に単身赴任していた。会社の上司に、子どもの小学校の卒業式があると伝えたら、「絶対に行くべきだ」とチケットを取ってくれ、皆がガソリンをかき集めて福島空港に送ってくれた。だから3月20日頃から約1週間は札幌に返っていた。北海道は揺れ自体あまり大きくなかったようで、普通の様子だった。その後、仙台に戻ったが、仙台の自宅には3月11日からほとんど帰っていなかった。僕しか住んでいなかったし、一度土足で入ってしまった上にひどい散乱状態だったので、また4月に大きな地震があった時までそのままだった。

石巻での支援活動

避難所でお年寄りがとても寒そうにしていたので、お店の物資を提供した。支社長に報告すると、支社長も「何か支援をしたい」と現地に来た。その時の被災地の案内役の息子さんが石巻専修大学でボランティアをしていて、人が足りないと聞いた。それで、石巻に行きたい社員に行ってもらう案が出た。会社として社員を派遣するには社員の安全を確保しなければならない。専修大学の場所ならば、もしもまた津波が来ても、そこまでは来ないだろうと判断された。僕は社員がボランティアに来る前に現場の様子を把握するため、3月末から5月いっぱい石巻に通った。主に住宅の泥出しを行なった。また、5月は自宅近所の岡田小学校の近くにあるボランティアセンターにも行った。

2011年4月、計約50名の社員が「ボランティアインターンシップ・プログラム」を利用して「石

巻市災害ボランティアセンター（石巻市社会福祉協議会）」をベースに活動した。社員は3グループに分かれ、主に家屋の泥出しや清掃活動の支援を行なった。また2011年6月と9月に「ボランティアサポート・プログラム」を利用して、「津波復興支援センター（旧仙台市社会福祉協議会 岡田・蒲生地区サテライト）」、「四万十塾：高知リスpons協会」の2団体から希望の団体を選び、計25名の社員がそれぞれ支援活動を行なった。2012年4月以降はグループで短期滞在する方式ではなく、1名がある程度長い期間キーパーソンとなって「OPEN JAPAN オープンジャパン」の事務局を支えるボランティアに参加している。人数は多くはないが、会社として有給休暇でボランティアに行けるプログラムを作っていて、現在も支援活動は続いている。

自然の力を 100%抑えることは不可能

海の近くに見上げるような防潮堤を作ったら、海が見えなくなってしまう。津波に力で対抗するのはもう無理だと分かったはずだ。防潮堤はもっと地元の住民と行政が話し合っ、結論を出してから作るべきだ。作る事ありきで進んでいるように感じる。もっと安い方法でできるはずだし、人が住まないようにするか、逃げるルートを作る方がよいと思う。それに震災後は防災ではなく減災と言われたが、最近はまだ聞かない。津波を100%抑える事はもう無理だと思う。

大震災を振り返って

大震災を経験して、日本人である事がすごくよく分かった。話さないけれど、分かり合うようなところだ。外国だったらおそろくないだろう。自分から言わなければ相手には通じない。日本人としてお互いの気持ちを察しながら過ごした。一方で、そうした日本人としての絆や人とのつながりを試されたようにも感じる。

また、店舗の責任者として自分が試されたようにも感じている。ほとんどのスタッフが東北出身者で、それぞれに異なるいろいろな不安を抱えていたと思う。両親と何日も連絡がとれず、テレビでは実家の近所が津波で流された映像が映り、果たして無事なのか気が気ではない日々を過ごしたスタッフもいる。そうした状況下で、ストアの責任者として彼らに対して何をしなければいけないのかを考えて行動する事は、先々が分からない中で答えを出し続ける事であり、自分が試されていると感じた。



撮影：2011.6.19 宮城県名取市 関上海岸（EPO東北スタッフ撮影）

きれいな砂浜を残したい

2011年11月には、七ヶ浜町でビーチ開放の式典が開かれ、サーフィンができるようになった。七ヶ浜は車で砂浜近くまで行けたため、早い時期からサーファーがゴミ拾いを始めた。そうしているうちに、地元の皆さんから「浜の瓦礫がなくなってやる気が出た」と言ってもらえたらしい。その取り組みを見て、七ヶ浜町長は「震災で急にサーフィンができなくなり、現在もやっではない状況なのは不自然ではないか」とビーチ開放に理解を示してくれたそうだ。

震災後は時代が変わると思った。あれから2年以上が経過し、あまりにも普通に帰りすぎている気がする。僕は海からアプローチして何かしたいと思う。今回の津波で仙台新港の砂浜の幅もずいぶん狭くなってしまった。全体が1mほど沈下したけれど、波の力で砂が戻っているところもある。砂は水質の浄化にも役立っていて、自然環境の中で循環している。見た目は変わらなくても、昨日までとは違う砂なのだ。僕は裸足で歩けるきれいな砂浜を孫の代まで残したいと思っている。

企業

ネットワークから生まれた復興支援

横浜市

前田 圭一郎 有限会社 GMP 創房

取材日 2013.11.08

技術士。東日本大震災後、「持続可能で安心安全な社会をめざす新エネルギー活用推進協議会（JASFA）」で東松島市の復興支援活動に取り組む。阪神・淡路大震災では神戸市の長田地区の産業復興支援にも関わった。

1995年1月17日 5時46分 (阪神・淡路大震災)

大学を卒業するまで大阪で過ごしたが、仕事の関係から横浜市で生活していた。たまたま朝早く目覚め、ニュースを見ると「淡路島を震源地とするマグニチュード7.2の大地震が発生した」と速報が入った。家族や友人の安否が心配になり、すぐに家族や知人に電話をかけると、電話はつながり、無事を確認する事ができた。無事が分かった事で安堵し、その時点では事態の深刻さを意識していなかったと思う。

さらに今思えば、当時は設計事務所に在籍し、建物の耐震性能などの情報に触れる機会が多かったものの、地震の怖さを一面的、それも頭で理解していただけで、地震による被害の深刻さや生活への影響についてまったく想像力が及んでいなかったと思う。しかし、次第に阪神高速がぼったりと倒れている様子など地震の被害状況が分かるにつれて、「大変な事が起きたのだ」と認識した。

発災後、当時、専修大学商学部助教授だった地域産業論・中小企業論の専門家の関満博先生（現在は明星大学経済学部教授・一橋大学名誉教授／フルセット型産業構造を越えて（中公新書）など著作多数）と地域の産業支援に関わっていた事から、「ボランティアで復興支援をしよう」と声をかけてくださった。神戸市の長田地区を中心に本格的に復興支援へ携わる事になった。

長田地区は靴の生産が盛んな地域である。当時、長田で生産されていた靴は、人工皮革や樹脂を用いた量販店に並ぶような安価な靴である。零細な家内工業を中心とした複数の中小企業の分業による生産構造で、個々の企業が有機的に結びつき、町全体が工場ようになっていた。阪神・淡路大震災で壊滅的な被害からどう復興するかを考えた時、新しい靴のブランド化・靴の町としての再生を目指す事をビジョンとした。関先生が気心の知れた仲間を集め、神戸市や企業も巻き込みながらチームを作り、復興のビジョンや計画に対してさまざまな提案を行なった。地域の産業振興、起業



の促進、地域コミュニティ活動の拠点となる事を目的に、靴を中心にした産業支援機関である「くつのまちながた／シューズプラザ」を立案した。展示スペース、ショップ、オフィスなどから構成される施設である。

神戸市の担当の方と調整しながら、地域の中小企業の方に集まってもらい、意見交換会を開いて、「今後、我々はどんなまちを目指すか」を議論した。当時の想いからは変わっている事もあるが、この施設は現在も稼働中である。

阪神・淡路大震災で復興支援に携わり、地域産業と地域コミュニティがどれだけ結びついているかを思い知らされた。震災を機に区画整理が行なわれた事で、震災以前まで住んでいた方々が住めなくなってしまった地区もある。産業を担っていた「人」がいなくなると、産業は衰退し、地域がまさしく壊れてしまう。そうした問題が現実起こった。地域の経済は地域のコミュニティで成り立っている。地域コミュニティを残して活性化させる事への想いが強くなった。地域のコミュニティの重要性はよく指摘されるが、阪神・淡路大震災の経験によって、自分の考えの浅薄さや思慮の足りなさを感じた。生業とはいろいろな要素と複雑に絡み合っているのだと改めて思う。

3月11日 14時46分

川崎市の仕事先で打ち合わせをしている最中に地震が来た。相当揺れたため「大きい」と感じたが、揺れ方から震源地は離れた場所だと思った。棚から物が落ちる事もなく、たいして慌てなかった。その時は震源地も分からず、「震源地の近くでは被害が大きいかもしれない」と想像したが、深刻には考えていなかった。

すぐにテレビをつけると、「東日本で大地震が発生した」と速報が出ていた。津波の映像を目の当たりにした時は、言葉が無かった。もちろん知識として頭では分かっていたが、「こんな事が起こるのか!」と我が目を疑った。

東日本大震災の事態を知って、すぐに神戸の事を思い出した。何かきっかけがあり、もし自分がお手伝いできる事があれば、ぜひ役に立ちたいと思った。神戸における活動では、知恵が足りなかったと感じていて、神戸でできなかった事や神戸で得た教訓を活かせるのではないかと考えた。

中小企業の新たな協議会

地震後、仙台に本社を構える株式会社馬淵工業所の小野代表取締役役に、安否確認のメールを送った。おそらくしばらくはメールも通じないだろうと思ったのだが、「今度上京する」と返信が来た。馬淵工業所は建築やライフラインなどの設備工事を行なう会社だ。復旧支援に追われるかもしれない厳しい状況の中で、わざわざ東京に来るとは、小野さんには何か考えがあるのだろうと思った。まだ新幹線が復旧していない頃、小野さんは高速バスに乗って東京にやって来た。「東京で久しぶりに風呂に入ったよ」と笑った。本当に東京へ来た小野さんを見て、「向こうはまだ大変だろうに、こんな事をする人なのか!なんて人だ!」と驚いた。その後、小野さんから「東北の研究者や中小企業などを中心とした『持続可能で安心安全な社会をめざす新エネルギー活用推進協議会(JASFA)※』を立ち上げる」と聞いた。話を聞いて、はじめは、一緒に取り組むつもりはなかった。NPOや協議会など、非営利の組織に良い印象を持っていなかった。なぜなら多くは責任の所在が曖昧で、うまくいっていない例が多いと感じていたからだ。

※持続可能で安心安全な社会をめざす新エネルギー活用推進協議会(JASFA) …「持続可能」で「安心安全な社会」形成を目指す。「新エネルギー」を個々の暮らしや事業体の改善、地域づくり・まちづくりに導入するため積極的に産学官の研究知財を応用し、地域社会に普及促進が図れる技術の発掘と活用推進を目的として、宮城県東松島市を中心に活動している。



宮城県東松島市 浜市小学校体育館（被災後）



撮影：2012.6.5 東松島市旧浜市小学校
NPO法人児童養護施設支援の会とともに整備

想いの結びつき

東日本大震災が発生してから半年後、小野さんと一緒に宮城県の東松島市野蒜地域を訪れた。発災してすぐの頃より瓦礫はある程度片づいているのだろう。道路も普通に走る事ができた。しかし、多くの建物が破壊された状態で残り、まだまだ片づいていない状況だった。街がパッサリと平面的になり、広範囲で被害を受けている。野蒜地域を訪れた時の衝撃は大きかった。現地を見る事は重要だと思う。

被災した直後の緊急支援については、僕は力にならない。しかし、神戸の産業復興支援の経験がある僕は、復旧の後の復興にどう関わる事ができるだろうか。小野さんと一緒に野蒜地域に入ってブレインストーミングする中で、JASFAについても「この人は本気なのだな」と感じ始めた。また、実際に被災地を見た事で、自分の中でだんだんJASFAの取り組みと「何かできる事があるなら、

とにかくやってみようかな」という想いが結びついてきた。

再生のプロセス

JASFAは被災地域で求職中の方々を対象に、就労支援講座を開催してきた。2012年7月、東松島市の被災した浜市小学校で、太陽光発電システム施工の基本技術を学ぶ市民講座が開講した。太陽光発電は今後、需要の高まりが期待されており、講座開設を通じて環境先進地作りに弾みをつけると共に、新たな雇用の確保も目指している。

太陽光発電工事専門の学校を作ると計画した時、東松島市の協力で浜市小学校の体育館と教室を施行実習の会場とする事となった。最初に小野さんと見に行った浜市小学校の衝撃的な光景は忘れられない。体育館の床は泥だらけで波打ったように歪み、14時46分で止まったままの時計が残されていた。NPO法人児童養護施設支援の会の高橋事務局長をはじめとするたくさんのボランティアが協力し、床板の撤去や床を支える基礎の撤去、ヘドロの除去を行なった。その後、床をコンクリートにして模擬の屋根を設置し、東北地方の屋根材に合わせた太陽光発電システム施工技術が学べる実習会場を作った。その再生のプロセスは非常に心に残っている。具体的な形となって学校として動き出した事は、大変嬉しい事だ。これまでの就労支援事業には多くの企業が講師として参加し、受講生の就職に結びついている。

互いの資源を組み合わせ より良いビジネスを

僕が最初にJASFAへ抱いた印象は間違っていた。JASFAの活動は良い方向へ向かい、成果が出始めている。小野さんのキャラクターによるところは相当大きい、良い仲間が集まり、シナジー効果が生まれている。

一方で、まだまだ仲間が足りないと感じている。気持ちを一緒にして取り組める仲間がもっとたくさん欲しい。被災地と全国から想いのあるたくさんの方に集まって欲しい。そして、ビジネスを生み出し、食べていく事ができる場を作りたい。関西、九州、東北など全国各地の企業が集い、それぞれ足りないものがあるならば、互いの資源を組み合わせ、より良いビジネスを生み出していきたい。それが、JASFAや僕の会社の目指しているところだ。そのためにネットワークをもっと大きく広げていきたい。



宮城県東松島市 浜市小学校（学校開校準備）



撮影：2013.12.16 東松島市旧浜市小学校
就労支援講座のための模擬屋根視察



撮影：2013.3.11 HOPE連絡会

おわりにかけて

スタッフ対談

東日本大震災の混乱の中で

井 上 2011年3月11日、東日本大震災が起こった。混乱の中で、EPO東北は国の中間支援組織として一体何をすべきなのか。正直、分からなかった。スタッフ間で話し合い、EPO東北が情報を提供するプラットフォームの役割を担う事を目指してはどうかと検討した。

鈴 木 地震から1週間は事務所を閉館した。開館後すぐにWeb-siteでの情報発信を始め、EPO東北とつながりのある皆さんの支援活動状況を発信した。次に、必要とされる支援物資やボランティア募集情報をEPO東北のWeb-siteに集約できないかと考えた。現実には午前中に集めたニーズが午後には変わってしまうほど事態は刻々と変わり、さらに被災範囲が広すぎて、すぐに情報受発信のプラットフォームは難しいと判断した。

井 上 被災現場に行かなければ必要な情報は手に入らないと思った。最初に被災現場へ行ったのは地震から3週間後だ。これまで連携した事がある知り合いを訪ねて、気仙沼と石巻へ向かった。被災した現場を見て回り、話を聞いた。「歯ブラシが足りない」と声を上げれば、全国から次々に歯ブラシが届き、必要以上の支援物資が溢れている。目まぐるしく変わる被災地の現状にショックを受け、現地を見てもEPO東北として何をすべきなのか分からないままだった。非常時にEPOが担う役割の指針はない。地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）から「この非常時の中でのEPO東北の動きは、全国各地のEPOの非常時対応の指針になるだろう」と言われ、プレッシャーを感じた。当時EPO東北の担当職員であった東北地方環境事務所の白迫正志さんを交えて事務局内で何度も話し合った。白迫さんから「被災された方々は自分の体験を話したいのではないだろうか」と提案があった。大変な体験をした人々が「話す」事で、感情や思考を整理できるのではないかと考えたそう。白迫さんの考えを聞いて、その通りではないかと感じた。

「3.11 あの時」の誕生

井 上 EPO東北は環境分野を専門とする中間支援組織だ。環境活動に携わる方々に当時の様子と、震災を受けて感じている事、今後の活動についてヒアリングを行なう事に決めた。最初に、震災以前によく連絡を取り合っていた名取ハマボウフウの会の大橋信彦さんが頭に浮かんだ。壊滅的な被害を受けた名取市閑上に住んでいたの、安否も分からなかった。おそろおそろ電話をすると、ご本人が電話をとってくださった。すぐに会いに行く事になった。

三 浦 井上さんと2人でヒアリングに向かう道中、何を聞いたらよいだろうか、心配りを十分にしようと話し合った。名取市役所で大橋さんにお会いすると、僕が想像していたよりも元気である様子が伺われた。

井 上 意外と大橋さんが平然とした様子だったので、ヒアリングをしても大丈夫そうだとおぼせてくれた。しかし、中には取材中に落泪する方もいた。口には出さなかったが、おそらくたくさん辛い現場を見たのだと思う。何を聞いたら良いのか、いけないのかをすごく考えた。その中でも、涙を浮かべながら「環境教育の意味を考え直さなければいけない」と仰った言葉が今も心に残っている。

三 浦 あの取材は僕にとっても衝撃だった。

井 上 この2件のヒアリングによって、「3.11 あの時」の両極を見た気がした。それからはヒアリングを受けてくださる方によって聞く内容を考えようと思った。事前に活動内容を調べ、質問事項を考えてからヒアリングにのぞんだ。ヒアリングを始めた当初は大震災の経験を後世に残そうなどという大それた考えはなく、EPO東北として何をすべきか分からない混乱の中で、藁にもすがりたい気持ちだった。EPO東北は環境省の公的な機関であり、民間団体が協働で運営しているためNPOのネットワークも持っている。この立場であるからこそ「3.11 あの時」ヒアリングはできたのだと思う。

鈴 木 はじめからWeb-siteにヒアリングの簡単な報告を



掲載しようと考えていた。実際に話を聞くと、しっかりレポートにまとめて発信の方がよいと思った。2011年5月から掲載を始め、多くの方が読めるよう全国の各EPOのWeb-siteにリンクを貼ってもらい、メールマガジンでも発信をお願いした。最初のレポートは三浦さんが書いてくれたのだが、すごい勢いでかつ高いクオリティで書いてくださった。

三 浦 初めてのヒアリングだった事、震災が起こって1ヶ月しかたっていなかった事が手伝って力が入った。語り手の皆さんが訴えた事を読み手の皆さんに伝えるためにはどうしたらよいのかを必死に考えた。

鈴 木 レポートは、現地に入るボランティアにとって事前情報として非常に参考になるので続けてほしいと、全国から好評だった。現地の状況と、話して下さる皆さんの抱えている想いが、全国の多くの方に伝わってほしいと思いを込めてレポートを書いている。

井 上 面と向かって話をする事で、語り手の皆さんの感情を感じ取る事ができる。考え方は十人十色だ。それぞれの感じた事や考えた事が大事であり、「想い」や「気持ち」の部分をきちんと伝えていかなければならないと思っている。ヒアリングを続ける中でEPO東北の「伝える」使命に気づき、後世の人に残したいという想いが生まれた。後世の人々が「3.11 あの時」を読んだ時に、何かを感じてほしいと思う。

「3.11 あの時」が果たした役割

井 上 EPO東北のネットワークは「3.11 あの時」ヒアリングを通して一気に広がった。震災の共通体験を共有する事で、気心が知れる。このヒアリングはつながりを作り、ネットワークを広げる重要な手立てになると感じた。

鈴 木 基本的にスタッフ2人1組でヒアリングを行なった。1人が聞き役、もう1人は写真撮影と記録役に分担した。EPO東北のスタッフは特異な形で震災を経験していると思う。ご本人からお話を直接聞

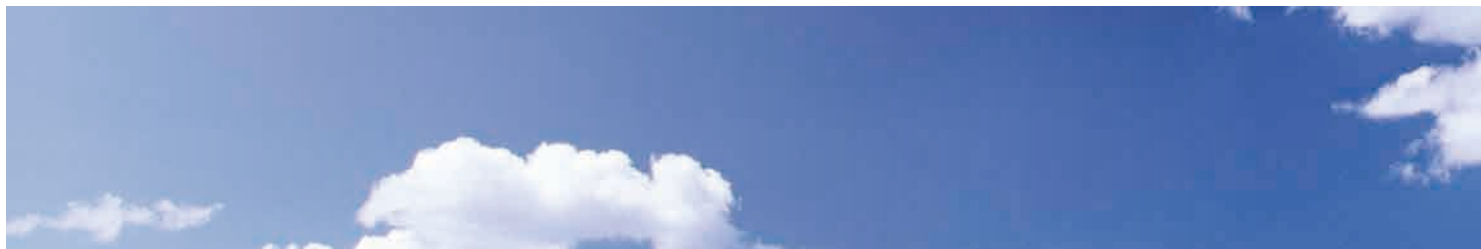
き、起稿のために録音データでもう一度お話を聞く。書いたレポートを再度チェックしてから、スタッフ同士でさらに確認し合う。最終的にご本人の確認を取り、レポートをWeb-siteに掲載するまでに少なくとも5回は話を聞いて、読む事になる。他にはない特殊な震災経験だ。

井 上 お話を聞いた後に現地に連れて行ってもらった事があった。同じ体験はしていないけれども、実際に現地を見る事で、ある意味その体験に近づく事ができる。荒涼とした情景に立ってはじめて、震災が現実なのだと思い知らされる。震災直後から被災地を訪れてお話を聞くようになり、EPO東北の仕事は現地に入る事だと思うようになった。このヒアリングがなければ、東日本大震災や東北について自分の言葉で語れるようにはならなかっただろう。この活動を通して、自信を持つ事ができた。

鈴 木 全国のEPOのスタッフがEPO東北を気遣ってくれていた。EPOネットワークのメーリングリストに「3.11 あの時」の情報を流すと、必ず四国EPOから応援のメッセージが来て、とても嬉しかった。震災後、連絡が取れず津波の犠牲になってしまったと思われていた方の安否確認ができたなど、思わぬところでも役立つ事ができたらいい。このレポートがきっかけでメディアや学生が取材に来たなどの事後談は、多くの方に読まれていて、さらに大事な情報源になった証でもある。EPO東北は現地の情報を伝えるスピーカーの役割を担う事ができたのだと感じた。

井 上 僕はEPO九州から「震災を受けて東北はどうするのだろうと見ていたが、「3.11 あの時」はまさに緊急時にEPOがどのような役割を担うべきかの指針を示してくれた」と言われた事が、とても嬉しくて印象に残っている。

鈴 木 多くの方からの冊子化すべきだとの後押しもあり、2011年度末に冊子化が決定した。冊子化は本当に大変だった。レポートを読み返すと誤字や脱字、読みづらい箇所がたくさんあった。校正のために何度レポートを読んだのだろう。完成後は、ヒアリングを受けてくださった方々に冊子を届けに行



き、各地方EPOを通して全国に配布した。

井 上 「3.11あの時」があったからこそ、持続可能な社会に対するEPO東北の考え方が共有されたと言える。全国各地から2012年度もレポートを続けてほしいとの声が届いた。1年目のヒアリングでいろいろな団体が被災地へ来ている事が分かったので、2年目は被災3県だけではなく、支援拠点となった山形や秋田など隣県での動きをヒアリングしてこうと方針を立てた。落ち着いてきた事で、誰にヒアリングを行なうべきかが見えてきた。また、2年目のレポートは非常に濃い内容になっていると思う。1年目は全てが混乱していた様子が伺えるレポートになったが、2年目は震災を受けての考察や人生観が伝わってくる。

鈴 木 1年目はまだ心の整理もついていない状態でヒアリングに応じていただいた。震災から1年がたち、心が整理され、話したい事がたくさん出てきたのだと思う。

小山田 私は「3.11あの時 stage2012」から関わっている。初ヒアリングで訪れた石巻で初めて被災した現場を見た時はかなり衝撃的だった。ヒアリング先で「(被災地を) 見るべきだと思う」と言われ、実際に現場を見て感じる事があると実感した。中でも印象的だったのは、津波を経験した方が「この地域から新たなライフスタイルや価値観の提案をしていきたい」と仰っていた事だ。津波を経験した方だからこそ言える言葉なのだろうと思った。

井 上 大変な経験をして、その上で仰る言葉には大きなインパクトがある。「自然の許容する範囲でしか人間の暮らしはないのだ」という言葉は、環境の根源を示していると思った。

ヒアリングを振り返って

井 上 特に印象に残っているヒアリングはあるか。

岡 崎 「3.11あの時 stage2013」から関わり、1年間ヒアリングをしてきて特別に印象に残っている方はいない。それはヒアリングを受けてくださったす



べての方に圧倒され、衝撃を受けたからだ。しっかりと震災に向き合っていて尊敬する反面、大変な経験をなさっていて悲しいような複雑な気分になる時もあった。2011年度当時のスタッフの大変さが伺える。

三 浦 辛く重い題材の取り組みだったけれど使命感が上回った。ヒアリングの待ち合わせ場所に近づくと気が引き締まる。

荻 野 私は震災当時、秋田から新潟へ車で移動中だった。コンビニエンスストアへ行っても停電でレジが使えないため販売を中止していて、ご飯を食べる事ができなかった。けれども新潟では次の日には普段と何も変わらない生活を送る事ができた。私にとって東日本大震災はここで終わっていた。2013年6月、EPO東北のスタッフになって「3.11あの時」を読んでも実感が持てなかった。現地を訪れ更地になってしまった場所を見ても、以前の風景が分からないので、前からこの状態だったのではないかと思ってしまう。そんな中、「3.11あの時 stage2013」のヒアリングを通して、皆さんが本当に土地を愛していて、その土地をよくしたいと心から思う気持ちを感じた。それからは「3.11あの時」を友人・知人に紹介している。私のように震災で大きな被害を受けていない方に、土地を愛して頑張っている方がいる事を知ってほしいと思ったからだ。3冊目には私がヒアリングしたレポートが掲載されるので、これからはヒアリングを受けてくださった方々の気持ちとあわせて、震



災が完結してしまっている方に被災地の現状を伝えたい。

三 浦 土地を愛している。それは皆さん共通していると僕もヒアリングを通して感じた。

小山田 私も2012年度から関わるようになり、最初は荻野さんのように現実味がなかった。EPO東北に配属された時、井上さんに「持続可能な社会とは何ですか」と質問した事がある。最後に井上さんは「持続可能な社会は人によって表し方が違うと思う」と教えてくれた。自分自身の言葉を見つけていく必要があると思った。ヒアリングを通して、震災について考え、多くの気づきを得て、それが少しずつ見えてきたと感じる。人は自然がないと生きられない。これまでと同じ社会でよいのかと皆が考え直し始めていて、地域には将来を担う若者が必要とされている。2年間のヒアリングを通して、世代を超える縦のパートナーシップが持続可能な社会につながるのではないかと学んだ。震災をきっかけに東北から新しい価値観やまちづくりのモデルを発信していこうと頑張る方々のお手伝いをする事がEPOの取り組むべき事ではないかと感じている。

鈴 木 私は3年間のヒアリングで、言葉の重みを感じた。レポートを読む方に、話して下さった皆さんの言葉をきちんと伝えたいと思った。EPO東北が「伝える」役割を担う事の大切さを感じながら取り組んでいたのも、ラジオパーソナリティーなど情報を伝える事を生業にしている方のお話は多くの部分で共感した。ある方が「当時の出来事と向き合えるようになるまでに1年かかった」と仰っていた。私も1年間でむしゅらにに取り組んできたので、かえて「あの時」に正面から向き合えない面があった。多くの現場を見聞きして、「3.11」を意識し続けたからこそ、「あの時」を振り返る事はできなかった。

井 上 「3.11 あの時」はがむしゅらにに取り組んだが、結果的には非常に良かった。本来は目的を決めてから走り出すものだが、走りながら取り組んで結果がついてくる事もあると分かった。

三 浦 1年目の最初のヒアリングは今でも記憶に残っている。自分では力作だと思うレポートができて他のスタッフに直されてへこむ事もあったが、井上さんに「三浦さんの記事は想いが込められている」と励ましていただいて、次も頑張ろうと自分を奮い立たせた。ヒアリングを重ねる中で、相手に心配りをして話を聞かなければならないと気づいた。人によって状況も語り方も違う。また、人間は辛く苦しい時にかっこいい事は言わず、むしろ本音が出るのだと学んだ。ヒアリングを受けてくださった方々とのつながりは僕の財産だ。すごく良い仕事をした。

井 上 僕はこの3年間のヒアリングを通して、スタッフの力がとても大きかったと感じている。仲間がいたから「3.11 あの時」は3年間続ける事ができた。一番混乱していた時期に被災地へ向かった三浦さん、素晴らしい文章力や構成力のある鈴木さん、——誰か1人が欠けても成立しなかった。仕事は1人で抱えると辛いし大変だと思う。EPO東北がチーム体制で運営しているのは、スタッフを大事にしていきたいからだ。僕も皆に助けられ、支えられている。スタッフそれぞれの感性を大事にしていかなければならないと感じた。3年間で振り返って出てくるのは、感謝の気持ちだ。これからもスタッフを大事にしたい。「3.11 あの時」で直接現地に伺ってお話を伺う事は大事だと学んだので、ヒアリングはEPO東北のスタイルとして継続したいと考えている。今後ともよろしくお願いします。

全 員 よろしくお願ひします。おつかれさまでした。

井 上 郡 康
三 浦 純
鈴 木 美紀子
小山田 陽 奈
岡 崎 優
荻 野 由 佳



【作成・発行】

発行：平成26年3月31日

東北環境パートナーシップオフィス (EPO東北)

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町2-5-1 オークビル5F

TEL. 022-290-7179 FAX. 022-290-7181

E-mail. info@epo-tohoku.jp

URL. <http://www.epo-tohoku.jp/>

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。



GREEN PRINTING JPPF
P-3110064
この印刷製品は、環境に配慮した
資材と工場で製造されています。



この印刷物は、
輸送マイルージ低減によるCO₂削減や
地産地消に着目し、国産米ぬか油を使用した
新しい環境配慮型インキ「ライスインキ」で印刷しており、
印刷用紙へのリサイクルが可能です。